

平成30年度第7回生徒海外派遣研修報告書

研修実施平成31年3月20日～3月27日

福岡県立小倉高等学校

第7回生徒海外派遣研修団

内容

1. はじめに.....	1
生徒海外派遣研修の目的.....	1
2. 派遣団紹介.....	2
3. 日程、主な訪問先.....	2
4. 事前研修報告.....	7
5. 訪問先紹介.....	9
5.1. ワシントンD. C. ・バージニア州～松本乃愛.....	9
5.2. スミソニアン博物館群・自然史博物館.....	14
ニコ先生のお父様.....	14
○自然史博物館.....	19
○自然史博物館(OCEAN HALL).....	20
○国立自然史博物館感想.....	21
○自然史博物館.....	21
○航空宇宙博物館 ライト兄弟.....	22
○航空宇宙博物館 ソユーズ TM-10 と秋山豊寛.....	22
○歴史に残る航空機.....	23
○アポロ月面着陸船—Apollo Lunar Module—.....	24
○National Gallery of Art.....	24
○ナショナル・ギャラリー・オブ・アート.....	25
5.3. ニューヨーク～土橋あゆな.....	27
5.4. 日本国大使館～北山琴夏.....	28
5.5. NIH（国立衛生研究所）.....	31
○アメリカの医療と NIH～末次玲奈.....	31
○NIH 感想～古荘 桜.....	33
○NIH で学んだこと～松本乃愛.....	34
○感想～上田 遼.....	34
5.6. 国連日本政府代表部～畠中遥子.....	36
5.7. 国際連合本部.....	38
○国連本部見学～榭谷怜央.....	38

感想～土橋あゆな	39
感想～北山琴夏.....	40
感想～本多麗奈.....	41
5.8. OB, OGとの懇談会.....	42
5.9.NHKアメリカ総局～古荘 桜.....	44
5.10.「9.11 メモリアルパーク」～本多麗奈	48
○感想～榊谷怜央	49
6. ホームステイ	51
○畠中&北山.....	51
○榊谷&上田.....	53
○末次&松本.....	55
○兒玉&古荘.....	58
○土橋&本多.....	60
7. 個人感想	62
○経験によって広がる可能性～土橋あゆな	62
○海外派遣研修を終えて～北山琴夏	64
○“好奇心”の追求～上田 遼.....	65
○初めての海外で私が学んだこと～本多麗奈.....	67
○新たな自分との出会い～末次玲奈	69
○アメリカでの挑戦から得たもの～松本乃愛.....	71
○海外派遣研修を通して、今思うこと～榊谷怜央.....	73
○挑戦することの大切さ～兒玉美智子.....	74
○すべてがかけがえのない経験～古荘 桜	76
○生徒海外派遣研修を終えて～畠中遥子	78
9. 引率教師感想	80
○第7回海外派遣研修を終えて～塚元 博子.....	80
○生徒海外派遣研修引率を終えて～藤永 容子	81
10. 謝辞.....	82

1. はじめに

生徒海外派遣研修は、将来世界に羽ばたき、国際社会のリーダーとなる人材育成を目的に、平成24年度から始まり、今回で7回目を迎えました。今回の研修も小倉高校奨学会、明陵同窓会をはじめとする様々な方々のご支援を受け、無事に実施することができました。

世界で活躍なさっている小倉高校の卒業生および現地在住の日本の方々など、関係各位のご協力のおかげで、普段は見られないものを見たり、聞けない話を聞いたりという、貴重な体験をすることができました。また、実際にアメリカを訪問することで、アメリカの人々の考え方や文化にも触れることができました。

短期間の訪問でしたが、研修生一同、様々な経験や刺激、驚きや発見を得ることができました。この報告書では、私たちが実際に体験し、感じ、そして考えたことを記しています。この報告書が、この研修のますますの発展につながることを願います。

最後に、今回の第7回生徒海外派遣研修をご支援いただいたすべての方に、感謝申し上げます。ありがとうございました。

生徒海外派遣研修の目的

世界の政治・経済・文化の中心地域の動向を直接見聞きするとともに、国際的に活躍する本校卒業生との交流を通じて、将来世界に羽ばたき、国際社会のリーダーとなる力を持った倉高生の育成を図る。

2. 派遣団紹介

団長	藤永容子 先生
副団長	塚元博子 先生
生徒代表	畠中遥子
副代表	末次玲奈
	古荘 桜
	兒玉美智子
	松本乃愛
	土橋あゆな
	本多麗奈
	北山琴夏
	上田 遼
	榎谷怜央

3. 日程、主な訪問先

●DAY1 3/20[WED]

時刻	内容	備考
06:30	集合	
07:20	福岡空港出発	
09:05	成田空港着	
11:00	成田空港発	
	※以下現地時刻	
10:40	ワシントンダレス空港着	ガイド 洋子様
12:30	アーリントン墓地	
14:00	昼食	ショッピングモール (SHAKE SHACK ハンバーガー等)
14:50	D. C. 内研修	キング牧師記念碑 リンカーン記念堂 ホワイトハウス 国会議事堂
17:50	ホテル着	HAMPTON INN WASHINGTON DC NOMA UNION STATION
18:00	夕食	牛肉ステーキ



↑ 出発前



↑ SHAKE SHACK Burger



↑ 夕食のビーフ

●DAY2 3/21 [WHU]

08:30	ホテル発	
09:00 16:30	スミソニアン博物館群 見学 昼食	<p>・国立自然史博物館 (アリの研究者である テッド・シュルツ氏の 研究室を訪問)</p> <p>スターバックス or マクドナルド</p> <p>・国立航空宇宙博物館</p>
17:00	スーパーマーケット	
17:30	夕食	イタリアンレストラ ン
19:00	ドラッグストア	
20:00	ホテル着	



↑ 鉱物館



↑ サンゴの水槽



↑ スターバックスの名前入りドリンク



↑ ワシントンの街並み



↑ イタリアンレストラン

●DAY3 3/22[FRI]

08:30	ホテル発	
10:00	日本大使館訪問	
11:00	日本大使館発	
12:30	昼食	FIVE GUYS (ハンバーガー)
13:30	アメリカ国立衛生研究所 (NIH) 訪問	
16:30	NIH 発	
18:30	夕食	チャイナタウン 中華料理
20:00	ホテル着	



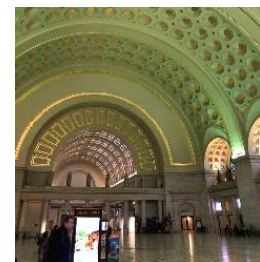
↑ FIVE GUYS



↑ アメリカの消防署



↑ チャイナタウン



↑ ユニオンステーション



↑ ガイドの洋子さんとお別れ

●DAY4 3/23[SAT]

07:00	ホテル発	
08:15	ワシントン・ユニオンステーション発	自由行動
11:59	ペンシルベニア・ステーション着	ニューヨークガイド 木下様
12:20	昼食	フードコート
13:30	ホームステイ (各ペアに分かれて解散)	ニューヨーク or コネチカット 2名1家族

●DAY5 3/24[SUN]

7:00	ホームステイ二日目	
16:00	ホームステイ終了 集合	
	コロンビア大学見学	
17:00	ホテル着	NEW YORK'S HOTEL PENNSYLVANIA
18:00 20:00	OB・OGの方々との懇親会 夕食	ギリシャ料理
20:30	ホテル着	



↑コロンビア大学の像の中に
隠れフクロウ発見!



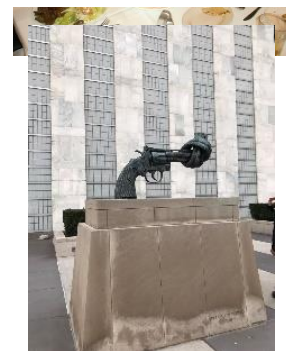
↑ギリシャ料理



↑懇親会にて

●DAY6 3/25[MON]

09:00	ホテル発	
10:00 — 11:00	国連日本政府代表部訪問	
12:00	国連本部見学 昼食	ガイドあり 国連内のフードコート
14:00 — 16:00	NHK アメリカ総局訪問	
17:00	9.11メモリアルパーク 見学	
	夕食	フードコート
20:00	タイムズスクエア	
21:30	ホテル着	



↑国連入口にある像



↑タイムズスクエア m&m

●DAY7 3/26-27[TUE-WED]

09:00	ホテル発	
10:00	JFK 空港着	自由行動
12:00	JFK 空港発	
	※以下日本時間	
	↓ ↓ 成田空港着 (入国審査) 成田空港発 ↓ ↓ 福岡空港着	
20:15	※到着後、解散式	



↑最後の朝食 大盛り！



↑ガイドの木下さんとお別れ



↑飛行機への搭乗前



↑飛行機

4. 事前研修報告

榎谷怜央 末次玲奈

○研修参加生徒による PowerPoint 発表と本校 OB 小島俊彦氏による講義

12月8日(土)に高校11期の小島さんをお招きした。小島さんは事前学習のPowerPoint発表についてアドバイスをしてくださり、さらにご自身のアメリカでの経験についてお話をしてくださった。

第一部「PowerPoint 発表」

まず私たちはA班「日本国大使館・国連日本政府代表部の活動」、B班「国際連合の機能と実態」、C班「アメリカにおける日本の報道機関の活動」、D班「アメリカで活躍する日本人科学者」、E班「アメリカの文化、芸術」の5班に分かれて事前学習を行い、PowerPointにまとめて発表した。それぞれ日本国大使館、国連日本政府代表部、国際連合、NHKアメリカ総局、NIH、スミソニアン博物館群等とアメリカでの実地研修で訪れるところの基本情報を中心にまとめた。各班の発表を通して現地の情報を共有することができたが、先生方からの鋭い質問に答えられず勉強不足だったと思い知らされた部分もあった。また、小島さんやNiko先生(本校ALT)のコメントはとても興味深く、アメリカのイメージを大いに膨らませることができた。

第二部「アメリカの概要」

次に小島さんに講義をしていただいた。まず初めにニューヨークとDCの外観を、写真を交えて紹介していただいた。先ほどPowerPointで発表した日本国大使館、国連本部、スミソニアン博物館群など私達が訪問を予定している場所のみならず、アメリカの州に関する基礎知識からニューヨーク、DCの街並みまであらゆることを教えていただいた。夜のタイムズ・スクエアといった観光的な側面だけでなく、朝の通りの様子など日常的な側面の写真も見せていただき、とても興味深かった。

第三部「アメリカのマナー、挨拶」

次は特にアメリカでコミュニケーションをとるうえで気を付けるべき点について教えていただいた。まずは小島さんに用意していただいた「Spoken Interaction Drill」を通してアメリカでよく使う口語表現について教えていただいた。スクリーンに映る英文を読むという一見簡単そうなものだったが、抑揚、発声、雰囲気など日ごろの授業での英語とは違ったものが問われ難しかった。また、自己紹介の練習では、相手の目をしっかりと見ることに抵抗を感じる人もいた。特に難しかったことはお辞儀をしないこと。日本人の基本たるお辞儀だが、海外の人から見たら目を合わせるのを避けているように見えるらしい(これはホストマザーから教えていただきました)。また返事は大きい声でしなければならないということなど、積極性の大切さを学んだ。

第四部「国際コミュニケーションについて」

最後に大学卒業後、NECでコンピュータービジネスの海外展開に携わっていらっしやった小島さんから、日米合同のプロジェクトチームを立ち上げた当時のことについて伺った。私はコミュニケーション様式の違いから対立を深めるプロジェクト

チームの中で、小島さんが行ったという『意識改革』が心に残っている。朝は必ず挨拶をする、ジョークを飛ばしてみるなど一見すると当たり前のことに思えるのだが、その当たり前の積み重ねが信頼を作っていくのだと強く思った。またアメリカでのマーケット開拓の大変さも教えていただいた。アメリカでのマーケット開拓は体力勝負なのだそうで、一週間での総移動距離が 8480 km（地球五分の一周）を超えることもよくあるらしい。海外で働きたいと思っていた人にとっては驚きだったようだ。

豊富な実体験をお持ちである小島さんのお話はとても勉強になり、アメリカについての知識を深めることができました。また、私たちの PowerPoint 発表に対する、現地に長く滞在していたという視点からのコメントはとても興味深いものでした。素晴らしいご講義をありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

○前年度研修生徒との懇談

前年度海外派遣研修に参加した先輩から前年度の研修の概要と感想、そしてアドバイスをいただいた。懇談はフラットな雰囲気で行われ、海外派遣への私たちのイメージを深めることができたとともに、不安なことを気軽に質問することができた。懇談が終わるころには私たちの海外への不安は解消され、海外派遣への期待はこれまで以上に深まっていた。受験期の忙しい中お集まりいただいた先輩方、ありがとうございました。

○市内の ALT 4 人による語学研修

2月18日、Niko 先生の呼びかけにより、市内在住の ALT 3 人が来校してくれた。Nico 先生を含めたこの 4 人にアメリカでの滞在を見越した語学研修を開いていただいた。3 班に分かれて各班に一名 ALT の先生がつく形式で行った。内容は飲食店での注文の仕方、道案内の仕方、ホームステイ先での会話の仕方等多岐にわたり、日本とアメリカの習慣の違いを事細かに教えていただいた。とくに印象に残っているのはレストランでの注文の仕方、日本と様式が全く異なったが担当の ALT の先生が優しく教えてくださり、現地滞在時には戸惑わずに注文することができた。ALT の先生方はみな気さくですぐに馴染むことができた。東筑高校の先生もいらっしやった。

遠いところからお越しいただき、素晴らしい研修をありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。

5. 訪問先紹介

5.1.ワシントンD.C.・バージニア州～松本乃愛

～見学地～

<アーリントン墓地>

ここは、アメリカのために犠牲になった人々が埋葬されている墓地だ。日本の墓地とは異なり、広い芝生の上に数えきれないほどたくさんのお墓が並んでいる。ケネディ大統領のお墓や死を悼んでつくられた「永遠の炎」があり、アメリカでは観光地としても有名である。ケネディ大統領のお墓の周りでは多くの観光客が静かに見学しており、厳かな雰囲気があった。



<キング牧師記念碑>

この記念碑は、2011年8月28日に設立された。キング牧師は、1963年8月28日に人種差別撤廃にむけてスピーチをしたことで有名である。「I have a dream.」と繰り返されるあのスピーチは、一度はどこかで耳にしたことがあるだろう。写真を見て分かるように、記念碑はとても大きい。その高さは約9mもある。また、記念碑の近くに石でできた壁があり、そこにはキング牧師の数々の名言が刻まれている。

<リンカーン記念堂>

第16代アメリカ大統領エイブラハム・リンカーンを記念してつくられた建物だ。建物の中には、リンカーンがどっしりとすわっている像がある。その横には、リンカーンの有名な演説が文字で刻まれている。下から3行目あたりには、有名な「人民の人民による人民のための政治」というフレーズが彫られている。演説の文章の中に分からない単語があり、全文を理解できなかったのは悔しかった。また、キング牧師がここで演説を行ったことから、階段の途中に「I have a dream.」というフレーズが彫られている。この記念堂で、国民が皆平等に生きられる社会をつくりたいという二人が共通して持っていたメッセージを感じることができた。





<ホワイトハウス>

1814年に起こったイギリスとの戦争によって汚れた壁を白いペンキで塗ったことがホワイトハウスという名前の由来である。屋上には24時間体制で警備員がいるらしい。今回は遠くから眺めることしかできなかったが、いつもニュースでみるホワイトハウスを自分の目で見ることができ嬉しかった。私たちがホワイトハウスを眺めていた場所に、「ゼロマイルストーン」

という石があった。これは、ワシントンD.C.の道路元標となっている。また、触ると願いが叶うと言われており、私たちは各々の願いを念じながら触っていった。

<国会議事堂>

ワシントンD.C.といえばこれ、と思うような建物の一つである国会議事堂。広い芝生に、真っ白でたくさん窓のあるデザインが印象的だ。ガイドの洋子さんに、大統領就任式のときに大統領が出てくる場所を教えていただいた。政治的に大事な儀式のときにたくさんの人が見られるよう、国会議事堂の前の芝生は広くしているのかもしれないと思った。

<バスの中から見たもの>

○FBI…正式名はFederal Bureau of Investigation (連邦捜査局)。アメリカの警察機関のひとつである。連邦政府が関係する様々な事件の捜査や公安に関する幅広い情報収集などを行う。ベージュ色の横長の建物だった。

○海兵戦争記念碑…米軍が硫黄島を占領したときに星条旗を立てた写真を像にしたもの。硫黄島は、太平洋小笠原諸島の南端近くに位置し、太平洋戦争のときにアメリカ軍と日本軍が戦った島だ。銅像が一色なので一本のアメリカの国旗の鮮やかさが際立っていた。日本との戦争に関連する像なので少し複雑な気持ちになった。

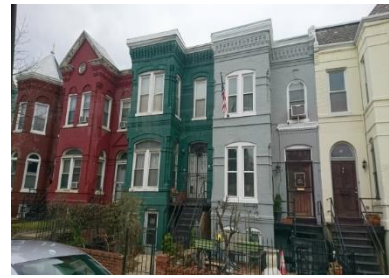
○トーマス・ジェファーソン記念館…第3代大統領トーマス・ジェファーソンを記念して1943年に建てられたドーム状の建物。トーマス・ジェファーソンはアメリカ独立宣言の初稿執筆者に選任され、アメリカ独立宣言を起草した人だ。高さ5.8mもあるトーマス・ジェファーソンの



銅像が建物の中に立っている。記念館を囲む池に沿って桜が植えられており、満開のときはとてもきれいらしい。日本が送った桜であるということで、日本の桜が今も大切にされていると知りとても嬉しかった。

～街並み～

ワシントンDCやバージニア州では、多くの建物がヨーロッパ風だった。ニューヨークとは異なり落ち着いた雰囲気、家一軒一軒がカラフルでとても可愛い。いたるところに荘厳な教会があったのも印象的だ。また、歴史的に活躍した人をたたえる記念碑や政治的に重要な機関が集中していた。



～ホテル～

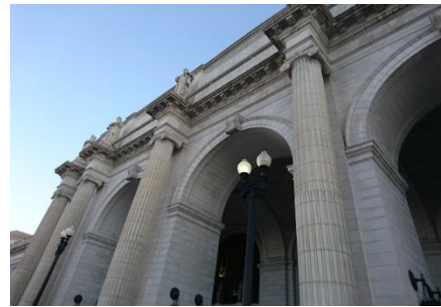
ワシントン D. C. のホテルはとてもおしゃれだった。ロビーの入り口の壁には、ホテル名が筆記体で書かれていたり、「Making you happy makes us happy.」というすてきな言葉が書かれていたりして、特に女子は写真をたくさん撮った。部屋は白を基調としたシンプルなデザインで、ベッドも大きくとても快適だった。ホテルの朝食はバイキング形式で、マフィンやベーグルなどアメリカらしいメニューがそろっていた。日本とは異なり、サラダが全く無いことに驚いた。ガイドの洋子さんいわく、アメリカの朝食はサラダよりも果物を食べるのが一般的らしい。特にりんごをよく食べるみたいで、バイキングのかごの中に、りんごがそのまま置いてあったのにも驚いた。



～公共交通機関～

<ワシントン・ユニオンステーション>

ワシントン D. C. からニューヨークに行く際に、ワシントン・ユニオンステーションで「アムトラック」という電車に乗った。駅に着いたときに思ったことは「えっ、これが駅？」だった。外見はまるで美術館のようで、風になびく3本のアメリカの国旗がかっこいい。中に入るとドーム状の高い天井や石が積み重なってできているような壁があり、ここが駅だとは思えなかった。アムトラックに乗る前に、駅員さんにキャリーバッグを預けると、案内されたのはひとつのゲート。荷物を運んでもらうように頼んだ人は、この専用ゲートからアムトラックの乗り場に行くことができ、一般のお客さんより先にアムトラックに乗ることができる。座席は日本より足元が広々としていて、アメリカ人の大きな体型に合わせられていることに気づいた。



<地下鉄>

何回か地下鉄を使う機会があり、まず私たちは「SmarTrip」というカードを買った。これは、日本でいう nimoca や suica のような交通系 IC カードで、このカードにお金をチャージして改札を通った。事前研修で地下鉄の乗り方は勉強していたので、オレンジや緑の路線があることには戸惑わずに済んだ。地下鉄を待つところは、天井がアーチ状で板チョコのような模様があった。

～ガイドの洋子さん～

今回ワシントンD.C.を案内して下さった洋子さんは、ジムのインストラクターをしながらガイドの仕事もされている、気さくでかつこいい方だった。私たちがお土産を買える時間が少ないと聞いてスーパーマーケットで買い物をする時間をつくって下さったり、私たちの意見を聞いて昼食場所を決めて下さったりした。見学先では、アメリカの歴史について詳しく分かりやすく教えてくださり、アメリカの歴史についてももっと知りたいと思うようになった。バスの中や見学先、レストランなどいろいろなところでアメリカについて教えて下さったが、ここでは特に印象に残った話を紹介する。

アメリカに着いたばかりのバスの中での話である。少し緊張しており挨拶の声が小さかった私たちに、どんな人に対しても笑顔ではっきりと挨拶することの大切さを教えて下さった。ほとんどのアメリカ人は自分の任された仕事以外のことはほしくないが、初対面のときに印象がいい人やいつも自分に優しくしてくれる人から仕事をお願いされると、引き受けてくれることが多いらしい。また、お願いの仕方によって引き受けてくれるかどうかが決まるそうだ。本当に困っていることが相手に伝われば、快く引き受けてくれることも多いのだ。そして最後に、「Thank you.」と笑顔で言われると、アメリカ人は、いいことをしてよかった、と心の底から思えるそうだ。洋子さんは、誰にでも優しく笑顔で接していればいつか自分にいいことが返ってくる、とおっしゃっていた。日本で挨拶といえば、目上の人に会ったときのマナーというような感覚があったので、自分のためにも誰にでも笑顔で挨拶をするという考え方が新鮮だった。この話を聞いて、実際に買い物でレジの人に笑顔で挨拶してみた。すると、最初無表情だった人が笑顔で挨拶を返してくれたので、とても嬉しかった。

洋子さん、私たちがこの研修をより楽しめるような工夫や、アメリカでの生活や文化などの話をしてく下さりありがとうございました。これからもお仕事頑張ってください。

～買い物～

洋子さんがスーパーマーケットで買い物をする時間をつくって下さり、アメリカでの買い物を楽しむことができた。特に感じたことは、日本の店員さんとの対応の違いだ。日本ではいつも接客の対応が丁寧である。一方アメリカでは、「Hi, how are you?」と声をかけて下さる店員さんもいれば、挨拶のない無愛想な店員さんもいた。日本の店員さんの対応に慣れていたので、後者の店員さんには少し違和感があった。それと同時に、日本の対応の丁寧さや接客指導のレベルの高さに気づくことができた。



～食事～

右の写真は昼食時に FIVE GUYS で食べたスモールハンバーガーだ。お肉がジューシーでとても美味しかった。この店では、ハンバーガーの具材は自分で選ぶことができるのだが、ここでハプニング発生。私の友達は、店員が何と言っているのか分からず全部 No. と答えたら、出てきたハンバーガーはハンバーグのみが挟まれていた。店員さんはトッピングを何にするのか聞いていたのだ。その友達は、あとで友達にレタスやオニオンをわけてもらっていた。



夕食は、ステーキやイタリア料理を食べることができた。どちらのレストランでも思ったことは、食事の量がとても多いことだ。しかし、これもひとつの異文化体験であり、料理の量に少し苦しみながらもアメリカでの食事を楽しむことができた。

《感想》

ワシントン D.C. とバージニア州は、歴史を感じられるおしゃれな場所だった。たくさん政治的に重要な機関があるが、どれも周りの雰囲気になじんでいて、ワシントン D.C. の景観を守ろうという工夫が見られた。またワシントン D.C. には、歴史的に重要な場所や政治的に重要な機関が集中していたことに気づいた。ワシントン D.C. は政治の町、ニューヨークは経済の町として成り立っていたと思う。どこか一つの都市が機能しなくなっても全部の機関が停止しないようになっていて、都市構成としてはとてもいいなと思った。日本は東京に全ての重要な機関が集まっているような気がする。もしものときのために機関を他の場所に移すのもいいのではないかと思った。見学先では、アメリカの歴史を肌で感じる事ができた。日本では、偉人の等身大くらいの銅像が多いが、アメリカの銅像や記念碑は実際の身長よりとても大きい。その偉人の偉大さが表されており、記念碑を造った建築士の思いも汲み取ることができた。また、世界史の勉強が役に立ったのが嬉しかった。友達が、「あの建物の柱はイオニア式だよ。」と言ったのを聞き、古代ギリシアの文化の影響を感じる事ができた。ワシントン D.C. ではヨーロッパ風の建築様式の建物が多く見られたので、なぜヨーロッパ建築が今も残っているのか、アメリカ独自の建築様式はないのか、などの疑問が生まれた。世界史の勉強をしながらその答えを見つけていきたいと思う。

一方、ガイドの洋子さんのおかげで見学地の歴史を知ることができたが、アメリカに行く前にもう少し自分で勉強しておくべきだったと後悔した。自分でアメリカの歴史について調べて行くことで、より興味を持って見学できただろうし、洋子さんにももっと質問できたにちがいない。だが、過ぎてしまったことは仕方がないので、これから興味を持ったことを自分で調べ、アメリカのことをもっと学ぼうと思う。私は、アメリカの独立までの経緯をもっと知りたいと思ったので、これから勉強していきたい。

5.2. スミソニアン博物館群・自然史博物館

ニコ先生のお父様～本多麗奈

スミソニアン博物館群訪問の際に、小倉高校 ALT であるニコ先生のお父様にお会いした。自然史歴史博物館でアリについての研究をしていらっしゃる方だった。そして、なんと、研究室を見せていただくことができた。私は、この世界最大規模の博物館を訪れ、日頃、決して目にすることがないものを見て回れるだけでもとても幸運だと思っていた。そんな素晴らしい博物館の연구원の方とお話しし、研究室を見せていただき、研究内容の説明までお聞きすることができてとても貴重な体験ができたと思う。温かく私たちを迎えてくれたことにとても感謝している。

アメリカに行く前、研究室を見せていただけると知ったとき、アリの研究の仕方は、私にはとても想像のできないものであった。初めて研究室を見たとき、まず目に入ったのはアリの巣だ。実際にアリを飼育し観察しており、アリの標本や系統について教えていただいた。専門用語の英語はとても難しく、十分に理解できない部分もあった。だが、とても楽しそうにお話ししてくださり、研究に対する気持ちと情熱を知ることができた。ニコ先生のお父様は、小さいころから虫が好きだったそうだ。好きなことを追求していく姿勢に感動し、尊敬したと同時に、好きなことを仕事にするのは幸せなことなのだろうな、と感じた。私は、この体験を通して自分の好きなことを探しそれで生きていくための努力をする勇気をもたらえた。これからは、つらくなったら、ニコ先生のお父様の姿を思い出して頑張っていきたい。

ニコ先生のお父様～土橋あゆな

スミソニアン博物館群に到着して、一番最初に訪れたのはニコ先生のお父様が研究していらっしゃるアリの研究室であった。普段は入ることができない特別な場所であったため、私たちは期待と緊張を胸に研究室へと向かった。そこではかごに入れられた大量のアリたちが私たちを待っており、やや気味悪く感じられた。また、アリのことを知らない私たちはその魅力を分からずにいた。お父様の話によると、アリは一万種以上もの種類があり、まだまだ発見されていない種はたくさんあるということである。また、アリの社会はわれわれ人間の社会と変わらないほど複雑であり、上下関係もはっきり区別されているということだった。このことを聞いて、こんなに小さなアリたちにも様々な役割や責任があると思うと、目の前にいるアリたちが偉大な存在に見えてきた。アリの研究について、英語で説明となると、やはり専門用語も多く出てきて理解が追いつかない場面もあったが、そんな時に日本にいるニコ先生がテレビ電話で専門用語とその日本語訳を送ってくださった。お父様の説明も丁寧で非常に興味深いものであったが、瞬時に日本語に翻訳することのできるニコ先生の対応の素早さは私たちを圧倒した。ニコ先生のおかげもあり、アリの説明の理解も深まった私たちは、話が終わるころにはアリの魅力に取りつかれていた。ただの博物館訪問だけでは、アリやそのほかの昆虫のことをここまで深く理解することはなかったはずなので、今回のバックグラウンドツアーは私にとって知識の幅を広げる好機となった。お忙しい中、私たちのために時間を割いてくださったニコ先生のお父様、そして、遅い時間で

あったにもかかわらずテレビ通話をしてくださったニコ先生、本当にありがとうございました。

ニコ先生のお父様～兒玉美智子

スミソニアン博物館ではまずニコ先生のお父様である Schultz 氏ご自身の研究について教えていただいた。研究室に行くまでもバックヤードツアーをしてくださった。その中で私が一番印象に残っているのは大量の虫の標本である。フロア中に蝶や蜂、そして蟻など、数え切れないほどの種類の虫が収納されていた。図鑑でしか見たことのないような綺麗な蝶や、日本には絶対いないであろう大きさの虫を見ることができた。研究室に着いてからはニコ先生がスミソニアンにいた頃の研究やご自身の研究についてお話してくださった。物理選択であるのに加えて専門用語が使われていたので内容を理解するのは難しかったが、テレビ電話でつながれた日本にいるニコ先生に難しい単語の意味を教えてもらいながら聞いていた。Ted 氏は蟻について研究されていて蟻の進化や特性について教えていただいた。普段私たちはあまり蟻を意識せずに



生活しているが、Ted 氏はそこに焦点を当てて様々な種類の蟻を研究されていてすごいと思った。何かに熱中して研究を行うというのは研究者だけでなく、学生である私たちにも大切なことだと感じた。もし私が研究者になったら Ted 氏のように研究対象について人に教えることができるようになりたい。

Schultz 氏、ニコ先生、本当にありがとうございました。

ニコ先生のお父様～古庄 桜

まず初めに、様々な昆虫の標本が収容されている標本室に通して頂いた。私は初めて標本を間近で観たのだが、一つの標本箱に大きさの異なる様々な昆虫がひとつひとつきれいにピンで刺されており、美しかった。昆虫は好きではないが、研究という視点で考えると、標本は後世に残すべき価値のあるものなのだなと感じた。次に、ニコ先生のお父様の研究室に案内され、農業をするアリについての説明をしていただいた。巣が5つほどのブロックに分かれていてパイプでつながれている。アリたちは葉をかみ切って運び、菌を培養するのに利用している、つまり簡単に言うと農業を行っているのだ。専門的な用語も多く、説明を理解するのは難しかったが、研究に対する熱意が伝わってきた。普段気にしたことがなかったアリだが、突き詰めるといろいろな発見があって、面白いと思った。



ニコ先生のお父様～末次玲奈

スミソニアン博物館で、ニコ先生のお父様にアリの研究を見せていただいた。アリというと、甘いものが好きで、目は悪いが鼻はよく、列を作って歩くという程度のイメージしかなく、それまでアリについて深く考えたことはなかったのだが、ニコ先生のお父様にアリの生態や組織、種類などを詳しく教えていただき、アリという小さな生き物の中にも複雑な仕組みがたくさんあると知ってとても興味深かった。話を聞きながら、ニコ先生のお父様はアリが本当に好きなのだと感じた。興味のあること、好きなことを仕事にし、生涯をかけて研究できる理由として、アメリカという国が基礎研究を積極的に重視しているということ、そして大量の標本を保管する部屋や研究設備などが充実しているということが考えられる。実際に博物館の中に研究室があるというのも新鮮だったし、広い標本室が何部屋もありとても驚いた。私も将来、ニコ先生のお父様のように、自分の興味のあることを見つけ、生涯をかけて突き詰めたい。

私たちのために貴重なお時間を割いてお話ししてくださったニコ先生のお父様、日本からテレビ電話で通訳してくださったニコ先生、本当にありがとうございました。

ニコ先生のお父様～松本乃愛

スミソニアン博物館群のひとつである自然史博物館で、ニコ先生のお父様は働いていらっしゃる。私たちはニコ先生のお父様の案内により館内を見学させていただいた。まず、たくさんの昆虫の標本が保存してあるところに行った。ここでは、解説を聞きながら様々な昆虫の標本を見て回ることができた。特に印象に残っている標本は、青い蝶だ。こんなに大きくて綺麗な羽を持つ蝶は見たことがなかった。次に、ニコ先生のお父様の研究室に連れて行ってくださった。研究室にはパソコンがあり、そこにはニコ先生が映っていた。本当は、ニコ先生も一緒にアメリカに行くはずだったが、急に大事な仕事が入り行けなくなったのである。だからモニター越しとはいえ、ニコ先生とアメリカでお会いできて、とても嬉しかった。ニコ先生に挨拶をした後、本題のアリの研究についての話に入った。ニコ先生のお父様の話を聞いて一番心に残ったことは、ニコ先生のお父様はアリが大好きだということだ。アリの行動は複雑で研究しがいがあるらしく、自分の研究を話したり質問に答えたりしているニコ先生のお父様は、とても楽しそうだった。アリの巣の様子を初めて見て、こんなに複雑な通路のある巣をつくれるアリって頭いいなと思った。

正直に言うと、ニコ先生のお父様の話はあまり理解できず悔しかった。その原因は、話す英語のスピードについていけなかったことと、話の中で出てきた専門用語の日本語訳が分からなかったことだと思う。自分の英語力不足を改めて感じた。話についていけず、ついパソコンの方に目をやると、ニコ先生が高速で専門用語の日本語訳をパソコンで打ってくださっていた。ニコ先生はインターンでこの博物館で働いたことがあるらしく、お父様の研究はよく知っているらしい。日本語も得意で生物の専門用語をよく知っているニコ先生のおかげで、少し研究の話が理解しやすくなった。今回の悔しさをばねにし、これから英語をもっと勉強し専門的な話にもついていけるようになりたい。

最後になりましたが、ニコ先生のお父様、貴重なお話をさせていただきありがとうございました。

ニコ先生のお父様～畠中透子

私はESS部に所属している。部活の時、ALTのNiko先生はいつも私たちに優しく、アメリカについての話や、英語について教えてください。Niko先生はとても探求心が強く、博識な方で、そんなNiko先生のお父様にお会いすることをとても楽しみにしていた。

Schultz先生はNiko先生と同じで探求心のあるお方でとてもやさしい方だった。自分の知りたいことを追求することは、難しいことだと思う。まず、物事に対して疑問を持ったり好奇心を持つことでさえ私にとっては難しいことだが、それをさらに研究していらっしゃる姿はとても輝いて見えた。私は英語力にあまり自信がなく、お話の内容を聞きとることがまったく不可能かもしれないと不安だった。しかし、先生は聞き取りやすく、わかりやすく説明して下さったし、Niko先生の専門用語についての説明などもあり、お話を聞くことができた。

私は人に説明するということが難しいことだと思っている。中学校でおこなったSDGs啓発活動の際、同級生から話の内容が難しくてわからないと言われた。皆にわかるように話したつもりだったが、私は専門家ではないため、逆にわかりにくかったのだろうと思った。専門性が高ければ高いほど、相手にわかりやすく伝えることができるのだろう。私も、Schultz先生のように、上手な説明のできる人になりたいと思った。そして、何かに対して情熱を持って取り組めるようになりたいと思った。

また、私はアメリカ人は昆虫などをペットとして飼わないということを聞いてとても驚いた。私は弟の影響で昆虫を飼うことが好きだ。しかし、これは日本独特の文化と知って、やはり、日本特有の文化というものは他国に行って初めてわかるものだと思った。スミソニアン博物館のバックヤードに連れて行って下さり、私たちに様々なことを教えてくださいましたSchultz先生には心から感謝している。このような貴重な経験ができたことを光栄に思う。この研修に参加できてよかったと改めて思った出会いだった。

ニコ先生のお父様～上田 遼

スミソニアン自然史博物館で、蟻の研究をしている博士の話聞いた。博士は、農業を営む蟻についての研究を続けていた。博士によると、その蟻は地上の葉を巣に持ち運んで、巣の中に植え、そこから菌類を育て、それを栄養に幼虫などを育てるといふ。私は、博士の楽しそうな話し方や研究への熱意を見て、一つのことへ熱中する素晴らしさを感じた。その博士は幼少期から自然、生き物に興味を持っていたという。さらに、その興味を持って学び、そして実際にアマゾンなどに出向いて蟻を捕獲し、スミソニアンという研究施設で研究を行っているのだ。私はこの博士の話聞いて、あまり関心がない分野である生物分野にも興味を抱くようになった。このように、熱意はときに人の興味、関心を動かすことがあると、私は考える。私は、研究を生業として生きていきたいと考えている。そのときに、この博士のように自分の熱意を聞く人に伝えられるようになりたいと考える。そのために、まずは自らの興味、関心について、熱意をもって研究を行い、また、人にその熱意を伝える表現力を養っていく必要がある。日頃のコミュニケーションから、わかりやすく意見を伝えるよう心掛けたい。今回は、とても面白く、貴重な話を聞くことができて、とてもよかった。またより深く話をしたいと感じた。

ニコ先生のお父様～榎谷怜央

以前生物の授業で Nico 先生に教えていただいた、「農業をするアリ」について、その研究分野のプロである Nico 先生の父である Schultz 氏からさらに詳しく教えていただいた。

アリは独自のコミュニティを築き上げることから生物学的にも注目を浴び、高校の教科書でもいくつか取り上げられるほどだが、「農業をする」という側面はあまり知られていない。現に自分も去年、Niko 先生の授業をうけて初めて知った。その後大学の専門書を捲ってみても、農業をするアリについての記載はあるがわずか数行ほど。多くの疑問を抱えたまま国立自然史博物館へと向かった。

まず、Schultz 氏は農業をするアリの生態を、実際に実験室で育てているアリのコロニーを見せながら教えてくださった。アリのコロニーは複数のプラスチックケースをチューブでつないだ一見簡素なものだったが、一つのケースには誇張なしに本当に農場があった。写真でしか見たことがないため、初めて見た。想像以上の規模だった。そして次に、アリ全体の農業形態を「Lower Agriculture (菌類との片利共生)」と「Higher Agriculture (菌類との相利共生)」の二つに分けたうえで系統樹にまとめたものを見せていただいた。そこでアリの農業形態は片利共生から相利共生へと発達していることに触れられた。農業はアリの片利共生であろうと予想していた私にとってこれが一番の驚きだった。またその進化は種が違ってもほぼ同じ時間軸で起こっていることにも驚いた。ある一つの種を掘り下げていくような生物の研究は、最終的には大陸間のその種の類似性を探り系統樹を作ることで種の発生場所やプレートの移動、地球の生命の発生等を解き明かすことが重視されると聞くが、この研究に関してはそのようなことを抜きにしてもとても興味深く、好奇心を大いにくすぐられた。

Schultz 氏の説明はとても分かり易く、私たちのために最大限専門用語を避けるなど、とても気を遣ってくださった。また、研究室に人を入れるのを嫌がる研究者もいる中で、このように温かく迎え入れてくださったことはとてもうれしかった。国立自然史博物館という場で研究者として活躍されるプロフェッショナルに話を伺えること自体めったにないことで、とても光栄だった。Schultz 氏が昆虫研究にその身を置いた理由は「小さいころから虫が好きだったから」。好奇心の赴くままに働くことのすばらしさ、そしてその信念を曲げないことの大切さを学んだ。

最後になりますが、お忙しい中快く受け入れてくださった Schultz 氏ならびに同研究室スタッフに感謝申し上げます。ありがとうございました。

ニコ先生のお父様～北山琴夏

自然史博物館では、ニコ先生のお父様にご自身の研究についてお話を伺った。ニコ先生のお父様はアリについて研究されており、アリの系統図やアリの巣の断面が見られる透明の箱、アリ以外にもスミソニアン博物館で保管されている蝶の標本などを見せてくださった。私は元々アリについての知識もなく、説明はもちろん全て英語なうえ専門用語も多かったため、お話を全て理解することは難しかったが、通訳して下さっていたニコ先生のおかげで半分くらいは理解できたと思う。また、私は、お話を聞く前は「研究」というものがどのようなものなのかがわかっておらず、「研究」に対してどこか堅苦しいようなイメージを持っていたが、今回の訪問を通して、そのイ

メージは払拭された。私は、「研究」とは好きなことをとことん追求することで、自分の世界を広げてくれるものなのではないかと考えた。ニコ先生のお父様はご自身の研究についてお話をされているとき、とても楽しそうで、キラキラしていた。その姿を見て、私は自分の好きなことを追求するということはとても素敵なことだなと感じた。私はまだ自分が熱中出来るものを見つけられていないので、今後の人生の中でそれを見つけて追求していきたいと思った。今回、研究室を見せていただくという貴重な経験をさせてくださったニコ先生のお父様、また、そのサポートをしてくださったニコ先生には心より感謝申し上げます。

○自然史博物館～松本乃愛

自然史博物館には、化石や魚類、ミイラなど様々な展示があったが、その中で特に私が心魅かれた宝石のコーナーについて書こうと思う。

ここには、カットし磨かれた宝石の原石が見られる展示や所持する者が次々と亡くなったホープダイヤモンドなどがあった。宝石はどれもまぶしく輝いて見とれてしまった。また、世界史が好きな私にとって、歴史上の人物と関係のある宝石の展示は印象深い。右の写真は、フランス革命中パリ脱出を図ったときにマリー・アントワネットが身に着けていたイヤリングである。このイヤリングから、フランス市民の貧しい生活とは裏腹に高価なものを身に着けていた当時の貴族の様子が想像される。ダイヤモンドは大きさ以上の輝きを放っていた。左下の写真は、ナポレオン1世が妻のマリー・ルイーゼに送ったティアラとネックレスである。ティアラには約1000個、ネックレスには約172個のダイヤモンドが使用されている。ティアラには、最初はエメラルドが入っていたが、のちにトルコ石に変えられたらしい。ナポレオンの愛が感じられるような、豪華でとても美しいアクセサリだった。



<感想>

上記の展示を見て、約200年前のものが今も輝き続けていることに感動した。激動の時代の中でも人から人へ受け継がれ、今私たちが展示品として見ることができるのは本当に奇跡だと思う。また、宝石がどんな原石からできたのかを知り、職人の技術の素晴らしさや原石に秘められたパワーを感じることができた。石をカットして磨いたらこんなに輝くことを誰が発見したのだろうと不思議に思ったので、時間があるときに調べてみたい。

博物館の見学を通して、博物館は言語の壁を越えて皆が楽しめる場所だということに気づいた。展示品のところには必ず紹介文があるのだが、私には難しくよく分からない英文もあった。しかし私は、一つ一つの展示に感動し英語が分からなくても大いに楽しむことができた。多くの人が見学を楽しんでいる様子を見て、異なる人種の人々が、同じものを見て美しいと感じたり驚いたりできるのはとてもすてきなことだと思った。もちろん紹介文を読めたほうがより展示内容を楽しめると思うので、英文がすらすら読めるようにもっと英語の勉強を頑張ろうと思う。また、博物館の展示品

は全て撮影可能だということに驚いた。感動したものを写真に撮って永遠の思い出にしてほしいという博物館運営者の思いがあるのだろう。いつかまたアメリカに行くことができれば、今度は動物の模型のあるコーナーもじっくり見たいと思う。

○自然史博物館(OCEAN HALL)

自然史博物館の中の展示室の1つである「OCEANHALL(海洋ホール)」は、海と人類の結びつきがテーマの常設展である。展示室に入り、まず天井を見上げると、タイセイヨウクジラの骨と実物大模型に圧倒された。他にも、ホッキョクグマや巨大クラゲ、地球の気候や海流の変動を示す大型模型、74種類の海洋生物を紹介する総水量約5.7トンのサンゴ礁の水槽などが展示されていた。

今まで見たことがないような、そして日本では見られないような、時代も場所も様々な海洋生物が実物大で展示されていたため、実際に間近で本物を見ているようでとても新鮮だったし、スケールの大きさに驚くばかりであった。



〈考察・感想〉

これはどの展示室にも言えることなのだが、平日にも関わらず、子供からお年寄りまで幅広い年代の人々が来館していた。スミソニアン博物館がこれほど多くの人に親しまれている理由は、スケールの大きさや本物を実際に見て楽しめることなど沢山あると思うが、その中でもやはり、入場料が無料であるということが最大の理由であると考えられる。運営資金は、アメリカ政府の財源、寄贈、ミュージアムショップ、出版物からの利益で賄われているのだが、このことから、アメリカという国そのものが、科学や自然に親しみを持っているということがよく分かる。入場料が無料だと、広くて情報量の多い博物館内を1日で回ろうと焦る必要もなくじっくりと見て回ることができるし、何度も訪れることで幅広い様々な知識を得ることができる。これは、子供の学習意欲向上にも効果があると考えられる。



アメリカとは違い、日本では入場料無料の博物館はほとんど見られない。日本も、教育水準の向上のための1つの手段として、博物館の入場料を無料にしてみてもどうかと思った。

多くの生物の実物大模型があったのだが、天井付近に展示して、私たちが下から見ることができるようにしていたり、360度どの角度からも見ることができるようにしていたりするなど、展示方法にも様々な工夫があり、どこを見ても飽きない楽しい作りになっていた。今回は1日しかなく、時間も限られていたためすべてを見て回ることが出来なかったのも、また機会があれば来て、もう一度じっくり見て回りたいと思う。

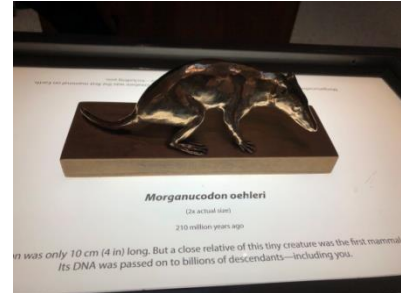
○国立自然史博物館感想

「生物」を高校で習い始めてから絶対に一度は行ってみたかった国立自然史博物館。特筆すべきはやはりその展示規模と内容。定番の化石から海洋生物、哺乳類まで多様な生命の化石、剥製を展示。また、生命体の誕生から生命の多様性が出現するまでを分かり易く展示しており、生物を専攻する者のみならず初学者にも易しいものとなっていた。

①「Morganucodon の模型」 (二倍拡大サイズ)

Morganucodon は三畳紀 (2 億 5100 万年前) に生息した初期の哺乳類で、珍しく多くの化石が見つかっている。

この Morganucodon oehleri は中国の雲南省で発見されたものだが、他にもウェールズやヨーロッパ大陸などでも見つかっている。写真下中央には「Its DNA was passed on to billions of descendants—including you」写真で見るとは大違いでとても興味深かったです。



②「Nature`s Best Photography」

国立自然史博物館のもう一つの楽しみが企画展示。スミソニアン博物館群自体展示の入れ替えやリニューアルの頻度は高いらしい。今回は世界的に有名な写真コンテスト「Nature`s Best Photography」で受賞した写真を展示していた。一番目に入ったのは右の写真で、入って正面の壁に展示されていた。短い滞在時間で急いでいた中でも、思わず足を止めてしまうほど神秘的でした。



全体を通して一番伝えたかったのはやはりその展示物の量。一日かけても回りきれぬのかわからないほど多く、短い滞在時間では回りきれぬはずもなかった。見たいが時間がないからと見送った展示物も多く、大変悔やまれる。しかし一番悔しかったのはやはり言語の壁、そして不自由さ。展示物横のテロップに、何か重要なことが書いてありそうだけれど英単語が難しいから読めないということもしばしばあり、もどかしい思いもした。でも次に海外に行く際には必ず訪れたい (できれば2日位滞在したい)、私の知的好奇心を大いにくすぐってくれる素晴らしい場所でした。

○自然史博物館

スミソニアン博物館自然史博物館の見学では、信じられないほど多くのとても貴重な展示物を見て、実際に様々なものを目で見て、驚き、学び、感動した。自分が知らないもの初めて見るものであふれていてとても面白かった。その中で特に私が感動したことについて書きたい。

私が最も感動したものの一つは、数々の貴重な宝石の展示だ。人気の展示であり、普段あまり貴重な宝石を見る機会はないので、スミソニアン博物館群を訪れたら絶対に見学したいと思っていた場所だ。美しい宝石がたくさんあり、そのきらめきや、美

しさに目を奪われ、とても感動した。その宝石の一つに、ホープダイヤモンドというブルーダイヤモンドがある。それは、45カラット以上の大きさであり世界最大級の大きさだ。この宝石には様々な伝説があるが、その金額は、200億円とも言われている。他にも、マリーアントワネットのイヤリングやナポレオン1世が妻のマリー・ルイーゼに贈ったネックレスなど信じられないほど美しいものがたくさんあった。また、展示の仕方にもとても工夫がなされ見る人を楽しませようという思いがあった。展示物がライトアップされているのはもちろん、ホープダイヤモンドは、より多くの人が見ることができるよう、ショーケースが回るようになっていた。そして、それぞれの宝石の原石の展示や、実際に触ることのできる宝石があり、より一層興味をひかれた。

感動した一番の理由は、歴史の教科書に出てくるような人が、身につけたり、贈ったりした宝石を、現代の私たちが見ることができるのは奇跡的なことなのではないか、と思ったからだ。様々な人がこれらの宝石に価値を見出し、大切にしてきた歴史は偉大なものだと思う。このように大切に保存され、多くの人を感動させてきた宝石を見ることができた幸せを感じ、感謝したい。私たちも、未来の世代の人々のためにこの美しさを保ち、受け継いでいかなければならないと思った。

○航空宇宙博物館 ライト兄弟

スミソニアン航空宇宙博物館には、人類初の動力飛行に成功したライト兄弟の航空機“ライトフライヤー号”が展示されていました。この航空機は、1903年12月17日に、ノースカロライナ州で12秒の飛行に成功したとされています。私はこの航空機を見て、ライト兄弟の研究への取り組みのすばらしさを感じました。当時は今とは違いコンピューターもあまりなく、物理演算もそれほどまで確立されていないような時代でした。そのような時代において、重量、羽の大きさ、枚数などを科学的観点から考慮し、またパイロットの技術も高め、実験を何度も繰り返し、最終的に成功したのです。これは、現代でも同様である“ものづくり”の一つのプロセスです。現代では、コンピューターの物理演算、プログラミングにより、実験を実際に行わなくてもある程度結果が得られる時代です。しかし、その時代だからこそ、実際の実験によるデータ収集は、やはり必要であると私は感じました。現代、あまり実用実験を行わずに研究を行うことが増えています。その結果、実際に見る、体感することによる新たな視点、発想を得ることが難しくなっていると私は考えます。工学のようにプログラミングなどのソフト面だけではなく、実際の実験を行い、実用化できるようにする実体をつくるハード面の研究も必要であると、私は考えました。また、研究とは根気がいるもので、とても多くの試行、失敗が必要であると感じました。

○航空宇宙博物館 ソユーズ TM-10 と秋山豊寛

「これ、日本人じゃない？」「本当だ！」私が宇宙航空博物館で特に印象に残っているのが、ソユーズ TM-10 である。数多くある展示の中で、偶然、日本人の紹介を見つけたのである。年季の入ったソユーズの帰還船の看板には、小さく “Japanese journalist Toyohiro Akiyama” と書いてあった。興味を持った



私は、ソユーズ TM-10 と秋山さんについて調べてみた。

秋山豊寛さんは、1942 年生まれのジャーナリストである。TBS に勤務していた際、民間人で初めて商業宇宙旅行を利用し、また、ジャーナリストとして初めて宇宙から報道を行った。日本人で初めて宇宙に行った人でもある。約一年間の訓練をモスクワの宇宙飛行士訓練センターで行った後、約一週間宇宙ステーションに滞在した。持ち込んだカエルが無重力空間ではどうなるか、扇子を仰いで移動できるかなどのレポートを行い、その様子は TBS の特別番組で放送されて話題になった。ソユーズ TM-11 で旧ソビエトの宇宙ステーション・ミールを訪れた秋山さんは、この TM-10 の帰還船に乗り、地球へ帰還した。



私は、ソユーズの帰還船を間近で見て、その小ささに驚いた。自分の身長ほどの大きさしかなく、大人が 3 人も乗るのはどんなに窮屈だっただろうかと思った。それと同時に、この小さくてつぎはぎだらけの機体に、命を託して宇宙から帰還するなんて、私にはできない、宇宙に繰り出してきた先人たちは偉大だと感じた。

また、日本人がこうして世界的な博物館で紹介されていることも意外だったので、誇らしく思えた。

○歴史に残る航空機

宇宙航空エリアには天井に何機もの航空機が吊り下げられていた。私がガイドさんの説明の中で一番印象に残っているのがこのスピリットオブセントルイス号である。そもそもスピリットオブセントルイス号とは、1927 年 5 月 21 日にチャールズ・リンドバーグによって、ノンストップでの大西洋横断単独飛行(アメリカ合衆国のニューヨークからフランスのパリ)に成功した航空機で、1903 年にライト兄弟が初めて飛行に成功してから三十年もたたないうちに大西洋を横断できるほどの技術が生まれたことに驚いた。

また、ベル X-1 という航空機も見所だと思う。ベル X-1 とはアメリカの有人実験機で、世界で初めて水平飛行で音速を突破した有人航空機(ロケット機)である。かつてレシプロエンジンと呼ばれる燃料の燃焼による熱エネルギーを作動流体の圧力(膨張力)としてまず往復運動に変換し、ついで回転運動の力学的エネルギーとして取り出す原動機が用いられていたが、抗力が急増すると共に、機体が異常な振動(バフエッティング)を起こし、場合によっては操縦不能、空中分解ということもあったため、音速の壁を破ることは難しかったが、ジェットエンジンの開発によってそれが可能になったのだ。人間の技術は年を追う毎にますます発達していることを実感する体験となった。



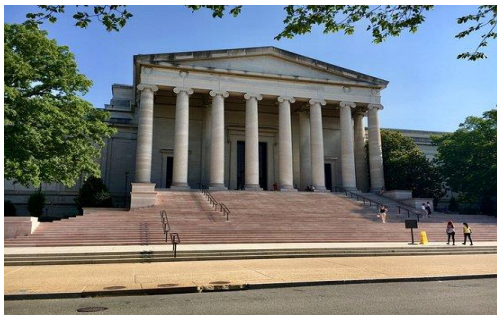
○アポロ月面着陸船—Apollo Lunar Module—

1 階の BOEING MILESTONES OF FLIGHT HALL にアポロ月面着陸船が展示されている。これは無人飛行試験用に開発された2号機 (LM-2) で、月面着陸したのは1号機 (LM-1) なので、実際に使用されたものではないが、仕様は1号機と同じである。月面着陸船から降りて人類で初めて月面を踏みしめたのは、ニール・アームストロング船長だった。彼は「人間の小さな一歩だが、人類にとって大いなる飛躍だ。」と無線機を通じてテレビ中継で見守る世界中の人々に語りかけた。



また、この月面着陸船のすぐそばには月の石も展示されており、実際に触れることができる。なお、この月の石は LM-2 と共に、1970 年に大阪で開催された日本万博博覧会でも展示された。

○National Gallery of Art



航空宇宙博物館の目の前にある、このナショナル・ギャラリー・オブ・アートは、実業家であり、美術品収集家であった、Andrew Mellon の寄付を受けて 1937 年に米国民のために創立された。

世界有数の優れた美術コレクションとして、中世から現代までの作品を収蔵している。

『散歩、日傘をさす女性』

モネの最初の妻カミーユと長男ジャンが草原を散歩する様子を下から仰ぎ見る構図で描き出している。この絵は、ジブリ映画「風立ちぬ」でモチーフとなった絵であり、これを見つけたときには唯一知っている絵であるという理由から大きな喜びを覚えた。





『クローヴィスの洗礼』

メロヴィング朝時代に全フランクを統一したクローヴィスが、妻の影響を受けて、アリウス派からアタナシウス派に改宗している様子を描いている。この出来事は世界史で既に学習していたので、その背景が思い浮かばれて、神聖な雰囲気を味わうことができた。

〈感想〉

今までは美術館を身近に感じていなかったが、行ってみると知っている作品や、繊細な描写から胸を打たれる作品が多くあり、心が満たされたひとときであった。またこのように感じられたのも、日ごろの世界史の学習が生かされたからだと思う。ある一つの作品を見るにしても、知識がなければ平面的にしか捉えられないが、少しでもその背景を知っていることで絵画の美しさを享受することができると思う。私にとって今回の美術館訪問は、絵画を楽しむだけでなく、これらのことにも気づくことができた有意義な時間となった。

○ナショナル・ギャラリー・オブ・アート

概要

ナショナル・ギャラリー・オブ・アートは、アメリカ合衆国にある国立美術館である。このナショナルギャラリーは、実業家であり、美術品収集家のアンドリュー・W・メロンが美術館設立のための基金と、自身のコレクションを寄贈したことに始まる。メロンが駐イギリス大使としてロンドン滞在中、ロンドンのナショナルギャラリーを参観したことで抱いた、母国アメリカにも同様の国立美術館を造りたいという夢を実現させたものである。連邦議会の両院合同決議により1937年に米国民のために創立された。誰でも入れる美術館を目指し、開館以来、すべてのプログラム、入場料が無料。本美術館の周りには、スミソニアン博物館群が広がっているが、運営はスミソニアン協会とは別である。世界有数の優れた美術コレクションとして、中世から現代までの西洋の絵画、彫刻、素描、版画、写真を中心に所蔵している。

感想

誰でも入れることのできる国立美術館は、お金がなくても、すべてのプログラムを見ることができる。そのことにより、より多くの人に美術作品を見るチャンスを与え、多くの人が豊かな経験をすることができると思った。このように、国民のために、芸術的な施設を整えるということは、必要なことだと思う。また、誰でも入れることのできる美術館を目指したアンドリュー・W・メロンはとても大きなものを後世に残してくれた。

日本では、大学や企業の博物館などを除くと、入館が無料というところはあまりない。そこで私は、海外と日本の美術館はどのような違いがあるのかを調べてみた。

海外の美術館は、展示するものがあるので美術館をつくっている。一方で、日本はバブルの時に美術館の建物のみを作り、その後展示物を集めている。海外から短期間で作品を借りてきて展示しているのでそれだけお金がかかる。また、日本には美術館は有料であるのが普通という考えがある。その考えは、来場者にお金を払ってもらうからと、学芸員たちが有名な作品ばかりを集めようとする事に結び付く。それだと、展示方法や内容に変化がなく、新しいことに挑戦することが憚られるという。

また、国際法と国内法に、博物館法というものがある。日本の法律の場合、『国立博物館は、入場料その他博物館資料の利用に対する対価を徴収してはならない。但し、博物館の維持運営のためにやむを得ない事情のある場合は、必要な対価を徴収することができる』と記されている。本来は無料なのだ。海外でもこのような考えから、入館無料のところがある。例えば、イギリスの大英博物館は1753年の創設以来入館無料だ。また、現在入館料が必要なパリのルーブル美術館やニューヨークのメトロポリタン美術館でも、入館無料にできないものかという試みが行われている。

したがって、海外の美術館の館長の仕事は資金集めということになるそう。日本の場合、周りには資産家が多いにもかかわらず、あまりそのような活動に対して積極的ではない。日本はもっと、多くの人が芸術に触れることのできる機会を作ることに積極的になるべきではないか。お金のある人は、入館料を支払い、美術館に行くことが可能だろう。しかし、世の中にはそうでない人も大勢いる。日本の美術館が有料であることは人々が芸術に触れる機会を奪っていると思う。

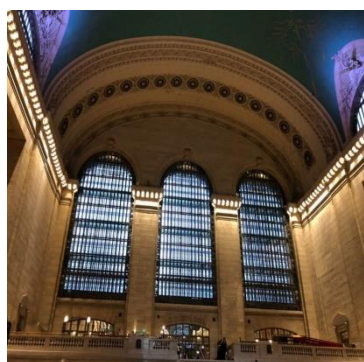
今回この研修に参加して、今まで有料が普通だと思っていた美術館が、海外では無料もしくは、無料にするべきだということが議論されているということを知ることができた。新たな発見をすることができて、この研修に参加できてよかったと改めて思った。



ナショナル・ギャラリー・オブ・アート

5.3. ニューヨーク～土橋あゆな

ワシントンでの研修を終え、アムトラックでおよそ三時間かけてニューヨークへ到着。駅から出ると、周りにはビル、ビル、ビルばかり。ワシントンと比べて、とても賑やかであり、バスで移動するのも一苦労であった。近くのフードコートで昼食を買い、ホームステイ先へと向かった。ここで分かったことは、ニューヨークといっても、タイムズスクエアを過ぎると、それほど栄えていないことだ。住宅街があったり、公園があったりと、それほど日本と変わらないような光景が広がっていた。



グランド・セントラル駅

天井に描かれたエメラルドグリーンの星座図は神の視点から見たものを表している。ティファニーで作られた時計もあり、恋人たちの待ち合わせ場所だとか。

駅であるが、ほかの施設も充実しており、フードコートや、ショッピング店もたくさんある。大きなアーチ型をした窓が特徴的であり、広い天井はとても開放的で、人々の憩いの場となっている。

エンパイア・ステート・ビル

1930年に工事が始まり、翌年オープン。名前の由来は、ニューヨーク州のニックネーム「エンパイア・ステート」による。アンテナまで入れると高さは440mである。ランドマークのため、観光用に見えるが、オフィスビルである。「キングコング」や、「めぐり逢えたら」など、250本以上の映画の舞台となっている。



タイムズ・スクエア



ニューヨークといえば、タイムズ・スクエア！！ホテルから歩いてすぐのところにあるタイムズ・スクエアは、夜でもネオンが光り輝いていた。これぞ眠らない町、ニューヨークであると感じた。お土産屋がたくさん並んでおり、I♥NYと書いた商品が多く見られた。また、街にはキャラクターを被った人々に写真を撮るように誘われたが、彼らと一枚撮るだけでチップを要求されるらしい。



自由の女神

高さ 46.05m、重さ 225 トン。

足元を見ると引きちぎられた鎖と足かせがあり、女神がしっかりとした両足で踏みつけている。これはすべての弾圧や抑圧からの解放と、人類はみな平等であることを象徴している。また、この女神像は独立戦争のさなかにフランスとアメリカが友好関係を築いた記念としてフランスから寄贈されたものである。夕食の際に訪れたショッピングモールからわずかに見えたが、自由の女神が見えたとたんみんな興奮して写真を撮っていた。やはり、アメリカを象徴する偉大な銅像であると実感した。

～ニューヨークで見かけたユニークなもの～

LinkNYC

これは街中に設置されている高速無料 Wi-Fi ステーションである。もとは公衆電話があった場所を利用しており、国内電話や緊急電話 9 1 1、充電ができる USB ポート、周辺のマップなどを無料で利用できる。



また、LinkNYC の Wi-Fi は高速であり、スマートフォンで使われている LTE 回線と変わらないかそれ以上である。

これらのディスプレイは広告やお知らせ、天気予報が流れるデジタルサイネージとなっているが、これこそが LinkNYC の大きな特徴である。これらの運用費はすべて広告費でカバーされているため、税金を投入することなく高速なインフラを市内に巡らせることができるのだ。

〈感想〉

ワシントンに比べて街全体が賑やかである印象を受けた。特に、タイムズ・スクエア付近の道路は常に渋滞しており、また、路上駐車している車も見受けられ、安全とは言い難い様子であった。他にも、クラクションが鳴り響き、頻繁にパトカーのサイレンも聞こえていて、私たちの住む街の交通とはかけ離れていた。昼夜を問わず常に人通りが多いニューヨークではカバンを前に抱えて持ち、スリ防止を心がけることをガイドの木下さんに教わった。バスでタイムズ・スクエアを抜けると、あまり治安の良くない地域に出るようだ。確かにその辺りはガランとしていて、つい先ほどのタイムズ・スクエアとは活気が違っていった。今でも少なからず差別はあるようで、私たちは先ほどの楽しくて賑やかな気持ちから一転して、多民族国家であるアメリカの現実を目の当たりにした。そして、このことは、私たちに人種差別について深く考えるきっかけを与えてくれたと思う。

5.4. 日本国大使館～北山琴夏

今回お話を伺ったのは、現在日本国大使館にお勤めの、2人の外務省職員の方だ。

1人目は、公使の方で、現在の日米関係や日朝関係など、現代の日本の外交問題について話して下さった。

国家間で良好な関係を築くには、民主主義・市場経済主義・基本的人権の尊重といった基本的な価値観の共有が必要だそうだ。また、私たちが現在の外交上の問題について質問した際には、日米間では大きなものは特にないが、米中貿易摩擦や、北朝鮮の拉致問題などが重要な問題として挙げられると答えて下さった。



2人目は1人目の公使の方の秘書という形で働いていらっしゃる、外交官の鈴木さんだ。鈴木さんは、昔から歴史が好きで、歴史の本をたくさん読んでいたそうだ。外務省に入省後、アメリカに語学留学されたのち、現在、アメリカの日本国大使館で広報を担当されている。鈴木さんからは次のようなお話をお聞きした。

Q. 外交官としての仕事について詳しく教えてください。

A. 自分は、広報が担当で、この仕事の大きな目的は日本の真の姿をアメリカに伝える、ということ。アメリカ人のジャーナリストと会って話をしたり、アメリカ人を対象に日本に関するアンケートを行ったりしている。

Q. 外交官として働く中で、心がけていることは何ですか。

A. 国益を第一に考えている。世界のため、ということも意識するが、一番は日本のため、日本人のために働く、という気持ちを持っている。日本のためを思って働くことが結果として世界のためにもなると思う。あとは、「誠実さ」を大切にしている。

Q. 外交官の良さは何ですか。

A. 色々な国に行けて、行った国々で友達ができること。
また、色々な分野の人と関われること。

Q. 日本の高校生に進路決定についてアドバイスをお願いします。

A. 学生はまだ無色透明。あまり人に流されすぎないこと。やりたいことがはっきり決まっていない人は、自分の好きなものは何かを考えてみるのも良い。進路を決めるにあたって、自分から積極的に行動して、色々な大人に話を聞くことも大切。あとは、恐れなくてチャレンジすることが大事！

～鈴木さんの1日～

9:00 出社
メール・電報チェック
昼 ジャーナリストと食事
大使と仕事
夕方 電報チェック
19:00 帰宅
(時差を考慮して)外国
と電話でやりとり
24:00

今回の訪問を通して、私は外交官という仕事について詳しく知ることができた。お話を聞く中で、私は外交官には高い交渉力が求められるのだな、と感じた。鈴木さんは、お話の中で、「交渉をする時はゼロサムゲームではお互い損をしてしまう。問題解決のためには、同じ立場に立って考える必要がある。」と語っていた。ゼロサムとは、全員の利得の総和が常に0になるということである。自国の利益だけではなく、世界全体の利益に目を向けて仕事をする外交官という職業はとても格好いいと感じた。



また、進路の決め方についても非常に参考になった。私は将来やりたいことがまだはっきりとしていないので、今は目の前の勉強を頑張って、大学で様々なことを学び、経験を積んだ上で進路を決めたいと思う。

今回の日本国大使館訪問では、日頃の生活だけではわからないことをたくさん学ぶことができた。今回学んだことを今後に生かしていきたい。

—Column 1 外交官になるには?—

外交官になるには、人事院が実施する国家公務員採用総合職試験に合格し、官庁訪問を経て外務省に採用されること、あるいは外務省が独自に行っている外務省専門職員採用試験に合格し、採用される必要がある。いずれの試験も大卒・大学院卒見込みの他に、21歳以上で30歳未満であれば学歴を問わず受験資格が得られる。試験内容は、ともに一次試験は筆記、二次試験は筆記と面談などで構成されている。しかし、公務員試験の中でもトップクラスの難易度で、平成27年度の国家公務員採用総合職試験の大卒程度試験では、倍率17.4倍という狭き門だった。

Column 2 一日本国大使館とは一

大使館とは特命全権大使が駐在国で事務をとる公館のこと。つまり、自国を代表する機関で、自国にとっては相手国との関係をよくするための機関、相手国にとっては自国への入り口。自国と相手国の架け橋である。大使館では、相手国政府との交渉・連絡、政治・経済その他の情報の収集・分析、自国を正しく理解してもらうための広報文化活動、自国民の生命・財産の保護などを行っている。

在アメリカ合衆国日本国大使館—Embassy of Japan in United States of America—
所在地 Embassy of Japan 2520 Massachusetts Avenue NW, Washington D.C 20008
特命全権大使・・・杉山晋輔

5.5.NIH（国立衛生研究所）

○アメリカの医療と NIH～末次玲奈

- 日時 2019年3月23日
13:30～16:30
- 場所 メリーランド州ベセスダ



NIH 本部のクリニカルセンター

研修3日目、私たちはアメリカ合衆国の保健福祉省公衆衛生局の下にある、国立衛生研究所（National Institutes of Health）を訪問した。まずは訪問先の国立衛生研究所（以下NIHとする）の概要を説明したいと思う。

NIHとは1887年に設立された、アメリカで最も古い医学研究の拠点機関である。20の研究所と7つのセンターで組織されている。職員数は約18,000人で、そのうち日本人研究者は約350人。NIH内には一般の人が利用できる図書館もある。



国立衛生研究所（NIH）のロゴ

<体験内容>

NIHに到着すると、まず車体検査があった。実は私たちが訪問した日の前日にNIHのシステムが新しくなったばかりだったらしく、かなり渋滞していた。車体検査の後、空港と同じような厳重なボディチェックと荷物検査を受け、パスポートを提示して写真入りの見学証明書を受け取った。NIHの敷地内はとても広大で、大きな研究所がいくつも並んでおり、都市のようだった。目的の建物に到着した。会場に入ると、日本人研究者の方々が快く私たちを歓迎してくださった。

まず初めに、国立小児保健発達研究所の日本人研究者の方が、スライドショーを使って15分ほど、NIHの概要や研究内容、敷地内のマップについて説明してくださった。NIHの機能は、NIH内で行われている所内活動と、NIHの支援のもとアメリカ国内外で行われている所外活動とがあり、年間予算270億ドルの75%はこの所外活動に使われるそうだ。20の研究所の中には、癌やアレルギーの研究所の他にも、アルコール依存症や環境衛生、薬物乱用などの研究所があり、全員が病気をターゲットに研究しているわけではないという。

その後、研究者の方々の自己紹介があった。質疑応答の時間は、研究者の方々が私たちの前に並び、事前に送っていた様々な質問事項に答えていただくという形で進化した。ここで、答えていただいた質問のうち、いくつかを紹介したい。

<質疑応答>

Q1 他の施設にはない、NIH(アメリカでの研究)の魅力は何でしょうか。

A-1 上司と部下の格差がなく、対等な立場で議論することができる。

A-2 子育ての支援があり、女性も働きやすい。

A-3 アメリカでは就職の際にも年齢を聞かれることがないため、どの人も年齢に関係なく対等に自分のキャリア像をデザインできる。

Q2 研究をする上で心掛けていることは何ですか。

A 「どうしてだろう？」と、疑問を持ち続けること。その気持ちがメカニズムの解明につながる。

Q3 アメリカと比較して、日本で働くメリットを教えてください。

A-1 アメリカでは、早いうちから strategy (戦略) を決め、将来に向けた準備を自分でしていかなければならないが、日本では、高校→大学→大学院という、ある程度の進路が定まっているため、余裕がある。

A-2 日本は授業料が安く、コネ社会であるアメリカとは違って実力でなんとかなるため、平均的にいい教育を受けることができる。

Q4 日本が基礎研究に投資しない方針についてどう思いますか。

A 日本は役に立つ研究だけに視点を当てており、多様性がない。アメリカではどこに役立つのかも分からない、物事の基礎となるような研究が盛んに行われているため、日本でも多様性を認め、いつかは役に立つかもしれない基礎研究にもっと力をいれるべきである。

Q5 今、高校生の私たちがしておくべきことは何ですか。

A 英語の勉強。それも、聞くだけ、読むだけではなく、英語を話す勉強。同じ結果を出したとしても、英語を話すことができなければ負けてしまう。日本人の奥ゆかしさは海外では通じないから、英語は使ってナンボ。

すべての質疑応答が終了し、写真撮影を終えた後も、研究者の方々と楽しく会話させていただいた。別れを惜しみながら研究者の方々が暖かく見送ってくださった後、私たちはバスに乗り込み NIH を後にした。



日本人研究者の方々と私たち研修生 10 名

<考察>

今回の NIH 訪問を通して、アメリカの研究力の強さの秘訣は、個人個人が自分の力を最大限に発揮できる環境が整っている、ということにあるのではないかという考えに至った。その理由は 3 つある。

1 つ目は、広大な敷地と多人種を受け入れる寛容さである。NIH は 300 エーカー (東京ドーム 92 個分) の広い敷地内に 75 以上の建物を所有している。とにかく規模が大きく、研究分野の内容も多岐にわたるため、稀な研究分野であっても、充実した研究が行えるのではないかと考えられる。また、NIH はアメリカの人だけでなく、日本、中国、インド、メキシコ、フランス、ロシアなど多くの国の人々を受け入れており、アメリカはやはり人種のサラダボウルなのだと分かった。様々な国の人々が共に議論することで、多くの視点から物事を捉えることができるため、より議論を深めることができると考えられる。

2つ目は、アメリカ自体の特性についてである。質疑応答にもあったように、アメリカでは年齢を聞かれることがなく、年齢に関係なく活躍することができる。このことにより、どの年代の人よりも高いレベルを目指そうと奮闘するため、人々の研究意欲、学習意欲がさらに向上すると考えることができる。また、アメリカには家族との時間を非常に大切にするという風潮がある。結果を出すことさえ出来ればよいと考えているため、残業や徹夜はしない。この風潮から、仕事の時間と自由な時間とのメリハリが付き、人々は決められた時間内に終わらせることができるように努力するため、作業効率が格段に良くなるだろう。その上、家族と過ごす時間が増えるため、自分が働くことの意味を明確にすることもできると考えられる。

最後に3つ目は、研究の多様性である。アメリカでは、個人個人が自分の好きなこと、興味のあることを研究している。アメリカでは研究が職業として認められており、基礎研究も盛んである。役に立つ研究だけでなく、どこに役立つのか分からないような研究も国が支援しているため、様々な分野でプロフェッショナルが生まれ、その基礎研究をその他の研究に応用することができ、さらなる医療の発展に直結すると考えられる。

日本には現在、課題がいくつかある。労働の面でいうと、残業や長時間労働である。家族との時間をとる以前に、自分自身の時間すらとれないというのが現状だ。これは、アメリカでは家族のために、働くことを手段としているのに対し、日本では、働くということ自体が目的化しているということが原因として挙げられるだろう。日本政府は「働き方改革」をさらに進め、そして働く日本人自身も、何のために働くのかを考え直す必要があると考えられる。研究の面でいうと、基礎研究力の低下である。日本は成果の出る研究だけに視点を向けている。しかし、日本もアメリカと同じように多様性を認めて基礎研究に投資し、また国民が積極的に様々なことに関心をもつことで、個人個人の個性のある研究をもっと普及させていくべきであると私は考える。これらの日本の現状を変え、これからのグローバル化する世の中に対応できるような日本を築いていかななくてはならないのは、私たち世代であると私は考えている。

ONIH 感想～古庄 桜

アメリカで働く人々と日本人の価値観の違いや、英語の重要性など、実際にアメリカで働いている人にしかわからないことをたくさん教えて頂いて、とても勉強になった。最後に、どうしても聞いてみたくなった質問をしてみた。「研究とは何ですか。」難しいよね、と言いながらも皆さん丁寧に答えてくださった。とても印象的だったので記しておきたい。「研究は最初から特定の成果を狙って研究しているわけではないし、何が役に立つのかわかっているわけではない。」「発見は面白い。飽きることがない。」私の研究に対するイメージが大きく変わった。「知りたい」と思うことを追求する面白さ、楽しさ。新しい何かを自分の手で発見する喜び。そういうものを私も知ってみたいと思い、今までよく考えたこともなかった研究という分野に、とても興味が沸いた。将来の選択肢がまた一つ増えて、とても貴重な経験となった。

ONIH で学んだこと～松本乃愛

NIH に着いて、はじめは、話についていけるよう頑張ろうということばかり思っていた。なぜなら、私は文系で医療の分野に関する知識が全くなくて少し不安だったからだ。しかし話を聞き終わって思ったことは、「皆さんかっこいい！」ということだった。もちろん難しい話もあったが、研究者一人一人の仕事に対する思いや私たちへのメッセージを受け取ることができて、とても中身の濃い研修となった。

たくさんお話を聞いた中で特に印象に残ったことが二つある。

一つ目は、「どこでこの研究が役に立つかわからない」という言葉だ。NIH で働いておられる研究者は、各々がしたい研究をされているらしい。ある研究者の方がつけて、「今自分が行っている研究がどこで役立つかは誰にもわからない。しかし、たまにそれが大きなものにつながることもある。だから君たちも、先の利益を考えずに自分の好きなことを追求してほしい。」とおっしゃっていた。私は英語が好きなので、外国語学が学べる大学への進学を目指している。しかしこの頃、真剣に将来のことを考えだして、将来就職に役立つことを大学で学ぶべきではないか、と志望校に迷いが生じていた。外国語が話せる人は世界中にたくさんいて、それだけで仕事を得られるわけじゃない。それだったら、例えば教育学のような、直接仕事に結びつく学問を大学で勉強し、外国語は独学で頑張るべきではないかと思ったのだ。だがこの話を聞いて、外国語を大学でも勉強したいという意志が固まった。大学で学んでいくなかで、将来につながる何かを得られるかもしれないし、大学で出会った人の影響で新しい道が開けるかもしれない。そう思えるようになったのだ。

二つ目は、英語の大切さだ。アメリカなのでコミュニケーションはもちろん英語だし、ここでは自分の意見をはっきり言うことが求められているので、仕事をする上で、交渉できるくらいの英語力が必要だという。また最近、論文のほとんどが英語で書かれているらしい。これからグローバル社会を生きていくには、英語は必須なのだ。私たちに、英語は使ってなんぼだから間違えることを恐れずにどんどん話して上達して欲しい、というエールを送ってくださった。これから受験勉強を通して、さらに大学での学びを通して英語をもっと極めていきたい。また、お話をされている途中で、「あれ、日本語がでてこない。」という場面がなんだかあった。日本語を忘れるほど英語を使っているって、なんかかっこいいなと思った。私もいつかこんな言葉が出てくるくらい英語を使いこなせるようになりたい。

NIH を訪問しお話を聞いて、私は自分の進路により向き合うことができた。今回学んだことをこれからの受験勉強や人生においての糧にしたい。

最後になりましたが、お話をしてくださった研究者の皆さん、本当にありがとうございました。

○感想～上田 遼

今回、NIH を訪問して、私が感じたのは、日本人がいかにか“実用性”というものについて考えているかである。私は、実際にアメリカの医療研究施設を訪れ、そこで実際に働く日本人研究者の話を聞き、日本とアメリカの研究環境の違いを感じた。NIH は医療に関する研究機関であるが、そこでは実用性からは程遠い内容である基礎研究も行うことができる。その一方で、実用化に向けたラットによる実験研究、さらには実際の患者を治療者として治療を行う臨床型の実験も行うことができる。さらに、医

療や健康、人体に関するようなことであれば、あらかじめのことは研究することができる。実用性などは深くは考えずとも、自らの好奇心にそって研究を行うことができる環境である。

さて、日本では基礎研究をあまり支援せず、応用的な研究や実用的な研究を支援する体制ができつつある。もちろん、実用化に一番近そうな研究に対して資金をつぎ込み、その研究を成功させ実用化させることは、ある意味理にかなっており、また重要である。しかし、実用的な研究に対する予備知識として、細胞はどうなっているのか、このたんぱく質はどのような性質なのかといった研究が、基礎研究であると私は考えた。近年注目を集めた iPS 細胞、PD-1 などといった発見はすべて基礎研究の成果であり、まだ実用化には至っていないものの、世界で高く評価された研究である。このように、ある分野において新しい革新的なものを作り出すときの突破口となるのは、基礎研究である。先述したように、NIH では基礎研究もおおに行うことができる。私が話を聞いた日本人研究者の多くも、この基礎研究を行っていた。しかし、基礎研究ばかりでは、新しいものが実用化されないのもまた事実である。よって、私は基礎研究と応用研究のバランスが、より社会が発展していくために必要であると考えている。ここに、研究者自身の好奇心、そして熱意が加わることで、より実用的で発展できるのではないだろうか。私は NIH での話を通して、このように考えた。

また、私は今回の話を通して、物理学、工学と医学という、かけ離れていそうな二つの科学の融合について知ることができた。今回、私は脳科学によって人が考えていることをイメージ化するという研究を行う研究者と話すことができた。その人は、脳信号により人が見た夢などを画像に再現することができるという。詳しい仕組みはよくわからなかったが、脳波計測という物理的事象と、全身麻痺などの障害を負った方の考えを理解するなどといった医学が融合していることに、私は驚き、また好奇心を抱いた。私は物理学と医学の両方に興味があったが、実際に両立した研究を行うことができるのかとよく考えていた。しかし、実際にその研究を聞いたことで、現実に可能なのだと考えた。そして、ある考えに至った。それは、あらゆる学問、分野において、複数の要素を絡めて知ろうとすることは可能であり、むしろそれが学問、研究、ましては“知ること”の本質となりうる、ということである。学問というのはあくまでも縛り、分類に過ぎず、本来好奇心というものはその分類を超えた範囲について生まれうるものである。例えば、学問などを知らない幼少期の好奇心などは、それにあたる。このように、研究の現場でもある学問、分野に縛られるのではなく、その範囲を超えて研究を行っていけると、私は考えた。また、私は今後、自らの好奇心をもとに研究、学びに取り組んでいきたいと考えた。

今回の NIH での研修は、様々な科学の、そして考え方などの面白い話を聞くことができた。とても良い経験になったと感じた。今後はこの経験を生かし、自らの学びを深めていきたいと、私は考えた。

5.6.国連日本政府代表部～畠中遥子

国連は国際社会の平和や安全のため、様々な分野における重要な役割を果たしている。例えば、紛争解決や平和の構築、人権問題、貧困問題、環境問題などだ。それらの問題の解決は、日本を含むすべての国が影響を受けるものであり、その解決には国際協調が重要だ。また、日本の外交政策の実現には、国連の「普遍性」や「専門性」という強みを活用することで、自国の力だけでは実現することが困難な問題にも対応できる。だからこそ、日本にとって重要な機関である国連日本政府代表部で、国際連合日本政府代表部大使・次席常駐代表である星野俊哉さんに自分たちの質問についてご回答いただき大変参考になった。

質問と回答は、以下の通りである。

Q 今、国連日本代表部で最も力を入れていることは何ですか？

A 順番はつけがたい。なぜなら、国連職員としては「世界」の利益を優先すべきだが、ここはあくまで日本の政府の代表であるので、「日本」の利益を優先すべきだからだ。だから日本自身の成長を目指している。しかしながら、世界の平和と日本の平和は不可分である。日本の繁栄には世界の整った環境が必要だ。だから、世界のために働くということは日本のために働くのと同じようなことであり、逆に、日本のために働くということは、世界のために働くのと同じことである。例えば、環境問題は、日本だけが二酸化炭素の排出を減らしても、世界全体で減らさない限り日本の環境問題が改善されるわけではない。しかし、世界のために二酸化炭素の排出量を減らす活動をすれば、日本の環境問題も同時に改善される、ということだ。

Q 国際平和の基準はその時代により変わるとは思いますが、今の国際平和の基準とは何ですか？

A 現在、科学技術が著しく進歩してきている。それをいかに活かすのが重要である。紛争は今もずっとなくなっていない。今、科学技術が進歩しているからと言って、化学兵器を使った紛争の解決など絶対にしてはならない。なぜなら、紛争は話し合いで解決されるべきだからだ。また、サイバー攻撃など新たな犯罪などに対しての対策として、科学技術を使い、防ぐことも大切だ。

Q アメリカで、交渉することの大切さを学びましたが、交渉力を上げる方法は何ですか？

A 自分が論理的に物事を言えているかに気をつけること。また、相手の立場に耳を傾けるのも大切だ。それを聞いたうえで、自分の要求していることをできるだけかなえつつ、相手の立場に寄り添った案を出すことがよい。

感想

生徒海外派遣研修に参加している生徒はみな、世界で働くことや社会に貢献したいという気持ちを持っている。そのような気持ちを持っている私たちにとって、国連日本代表部でお話を聞いたことはとても良い経験となった。

また、星野さんは日本での模擬国連を始めた方でもある。私は高校入学前から模擬国連に出場することが目標であった。しかし、なかなかペアが見つからず、出場を断念した経緯があるので、星野さんにお会いすることができて驚いた。模擬国連で、世界の高校生と会議をする機会を作ってくくださった星野さんは、日本の次世代の者が、

多く国連に関わってほしいとおっしゃっていた。日本の可能性を広げてくださいったことに感動した。日本の利益ということをおっしゃっていたが、国際的な会議の中で、自国の利益と他国の利益のバランスをとることは難しく、とても大変だろうと思う。

これから私たちの生きていく社会は、グローバル化が進行し、いろいろな場面での交渉や利害の調整が必要となるだろう。そのときに、今回星野さんが教えてくださった交渉力についての話を思い出して、より円滑な交渉ができるようになりたい。

最後に、ご多忙にもかかわらず、ご講義くださった星野さんに深謝しております。国際機関で働くとはどのようなことなのかを実際に働いておられる方から教えていただき、大変勉強になりました。今回学んだことを生かして社会に貢献できるような人間へとなれるよう、頑張ります。



5.7.国際連合本部

○国連本部見学～榎谷怜央

1. 事前研修時点での理解

位置：ニューヨーク市マンハッタン街イースト川沿い

加盟国：193 か国

主要機関：総会、安全保障理事会、経済社会理事会、国際司法裁判所等々

国連旗：第二回総会（1947年）で採択。北極を中心として描かれた正距方位図法の世界地図と平和の象徴であるオリーブの葉がデザインされている。

2. 実地研修

当日は日本人の国連職員の方によるツアーに参加した。ここではガイドの方からお聞きしたと現地ですら実際に撮影した写真を通して、事前研修で欠けていた知識を補いたいと思う。

① 「発射不能の銃 Non-violence」

ルクセンブルグ政府寄贈で作者はスウェーデン出身の芸術家カール・フレデリック。中学校の公民の教科書に掲載されるなど日本でも知名度の高いモニュメント。

設置場所は国連本部セキュリティーゲート出てすぐという国連で皆が必ず目にする場所。4.5ミリ口径のピストルの銃身を曲げることで非暴力の精神を表す。



② 「恒久な平和のための人類の戦い Mankind's Struggle for a Lasting Peace」

スペインとドミニカ共和国の共同寄贈。作者はスペインの画家ホセ・ヴェーラ・ザネッティ。全三部構成で過去二度起こった世界大戦からの復興と再生を表しているそうです。左から右へと戦争からの再生が進んでいく中で、下を向いていた人間が最後に顔を上げ手を上に伸ばすところが印象的である。



③ 「黄金律 Golden Rule」

アメリカ政府寄贈で作者はアメリカ人画家のノーマン・ロックフェル。すべての民族が一つの絵画に収まっており、着物を着た日本人女性も中央左に見られる。絵画下中央に刻まれているのは「Do unto others as you would have them do unto you」。これは聖書マタイ伝7-12に記述されているもので和訳すると「己の欲する所を人に施せ」となります。絵画正面に立つと、描かれた人々全員と目が合うようでとても圧倒された。



④ 国連総会議場

初めて現在の総会議場で会議が行われたのは1952年の10月14日のこと。総会議場左右の壁にはフランスの芸術家フェルナンド・レジェによってデザインされ国連協会によって寄贈された抽象画が。会議場自体は複数の建築家が連名で設計した大掛かりなもの。



⑤ 国連安全保障理事会

おそらく国連の会議場の中で最も知名度が高く、報道の場でも多く取り上げられる会議場。写真左上の絵はノルウェーの画家ペール・グロフによって描かれたもの。灰の中から飛び立つ不死鳥の姿を描いたもので、第二次世界大戦からの世界の復興を表しているといわれている。訪れた会議場の中で最も緊張感があった。



3. 実地研修を通して（感想）

国連で特筆すべきなのはモニュメントや絵画等展示物の多さ、そしてそれら全てが各国からの寄贈品であるということだった。前記した4か所のみならず、他にも人権問題、原子爆弾や水爆、PKO活動、少年兵問題等々多岐にわたる。主にモニュメントは芸術品が中心だが、その中には「本物」も展示されている。例えば原爆の被害を受けた石造、実際の（機能は解除されているが）地雷、災害や紛争発生時に国連が現地の子供たちの安全のために送る「箱の中の学校 School in a Box」等。それらの展示物の前に向き合うときはより一層気が引き締まる思いだった。すべてのモニュメント、絵画、展示物に共通している願いは戦争からの再生、非暴力、人権の尊重、即ち「平和への願い」で、様々な表現様式を通して私たちの心に語りかけてきた。

また同じ日に行われているほかの国の国連ツアーの多さにも驚いた。英語、フランス語のみならず、中国語、韓国語の東アジア系、アラビア語など中央アジア系、スペイン語などのラテン系のツアーと人種は様々で、国連が多くの人を受け入れている開かれた場所なのだと思う。また国連が世界的に影響を及ぼす機関なのだと改めて実感した。

私が一番心に残っているのはガイドさんがおっしゃった「国連総会議場では各国が10分間平等にスピーチする機会が与えられる」というものだ。国の規模、経済的な差、宗教や民族など関係なく各国が平等に一票ずつ持つという総会議場での平等の流儀をまさしく体現していると思った。研修生の中には将来国連で働きたいという人も多く、将来の目標を再認識するいい機会となりました。

感想～土橋あゆな

私たちは、国連日本政府代表部を訪問したのちに隣にある国連本部を訪れた。入り口には加盟国193か国の色鮮やかな国旗が掲げられており、国際的な機関であることが一目でわかる建物であった。中では、言語別によるツアーが行われており私たちはガイドの方の説明を受けながら施設を案内してもらった。特に印象に残っているのは、

実際に戦争が起こっている国の人々を写した写真である。隊員によって支援を受けている人の写真や、不安げな顔をしている黒人の子供たちの写真、また、武器を捨てて未来へと進んでいく少年たちの写真など、何気ない写真であるが、どれもその意味を考えられるものであった。他にも、長崎、広島に落とされた原爆投下の様子も展示されており、きこの雲のモノクロ写真や、後ろだけ黒く焦げてしまった石碑を見て、非常に胸が締め付けられる思いがした。長崎、広島への原爆投下は世界中でも、悲惨な出来事としてとらえられていることを改めて実感して、このことは一生忘れてはいけないと思ったし、後世に戦争の恐ろしさを伝える必要があると思った。私は長崎に住んでいたこともあり、実際に被爆された方々のお話を聞いたことがあるが、皆さん口をそろえておっしゃることは、戦争はとて恐ろしいもので一瞬にして人も建物も破壊するということだ。また、ただひたすら逃げて、生きることを考えていたとおっしゃっていた。このことを聞いて私は、本当に心が痛み、同時に二度と戦争を起こしてはならないと強く思った。時がたつにつれて、出来事は風化していってしまうので、そうならないためにも私たち若い世代が、原爆投下について実際に聞いた話を、子どもたちやその次の世代へと伝えていくべきである。

感想～北山琴夏

私は今回国際連合を訪問して、世界の現状を“体感”したと感じた。今世界の国々が置かれている状況を身をもって感じたということである。私たちは国際連合で、国連の平和維持活動についてお話を聞いたり、国連の人権宣言や、戦争・紛争に関する展示を見たりした。お話によると、平和維持活動の予算よりも世界の軍事費の方がはるかに多いらしい。私はそもそも軍事費という概念は戦争を前提にしているのだと気づいた。どこの国も平和を求めていることは同じなのに、それが自国の平和を最優先するため、自国を守る軍事費という形でお金を多く使っているのだと考えると複雑な気持ちになった。戦争に関する展示では、地雷を見たことが印象に残っている。地雷の外見にはその恐ろしさは現れていない。それが爆発物だと認識できない子供たちにとってはおもちゃに見えてしまうだろうと思うと、何も知らずに近づき犠牲になってしまった子供達のことを考えて胸が痛んだ。また、紛争が起こった地域に送る学習セットもみた。スーツケースの中に、小さな黒板やチョーク、定規やノートなどが入っていた。そのノートは普段私たちが使っているものよりもボロボロだったが、ガイドさんはこれが紛争が起こった地域の子どもたちにとっては大切な学習道具なのだと言っていた。私は普段の私たちの学習環境がいかに整っているか、その環境の中で勉強できている自分たちはいかに幸せかということを改めて感じた。私は今回の訪問を通して、私たちには何ができるのか、ということ非常に深く考えさせられた。もちろん、世界には紛争が頻繁に起こっていて子供達が学校にも行っていない国があるということは知識としては知っていた。しかし、その解決について深く考えることはあまりなかった。というよりもむしろ目を背けていたような気がする。しかし今回国際連合を訪れて、その問題について先進国に住む私たちが深く考え、取り組む必要があると強く感じた。自分一人が頑張ったところで世界は変わらないと思う人はいると思う。しかし、私はまず現状を知ることが大切だと思った。世界に目を向けて、今起きている問題を自分の問題だとして捉える必要があると思う。私もこの世界に生きる一人として世界の恒久的な平和を守るためにすべきことを考えていきたい。

私の将来の夢は国際連合のWTOで働くことだ。人に将来の夢を聞かれたとき、自分にはあまりにも大きな夢で、自分には無理なのではないかと思い、いつも言うことを一瞬ためらってしまう。だが、今回国連ツアーに参加し、国連が果たす世界的役割の大きさを実際に感じ、やっぱりこの場所で働ける人はカッコいいな、と憧れの気持ちが強くなった。

国連本部を訪問して感じたことは主に2つある。1つ目は、国連は多くの国々が協力したくさんの願いが込められた場所、組織であるということだ。国連の様々な会議室は、国連加盟国からの寄贈で、そのデザインの一つ一つには意味が込められている。例えば、経済社会理事会の会議室の天井は「仕上がって」おらずパイプとダクトがそのまま見える部分がある。それは国連の経済社会活動には終わりが無い、すなわち世界の人々の生活状況を改善するためになされることは常にあるという意味が込められている。また、国連には各国から寄贈された様々なオブジェや絵画などの美術品がある。それら一つ一つもそれぞれに意味があり、平和への願いが込められている。私は国連ツアーに参加するまで、会議室のデザインに意味があることを知らなかった。これらのことを知って、改めて、国連が各国の支援によって成り立ち、世界の希望が寄せられているということを知った。2つ目は、国連で働くには色々な角度から多面的に物事を考え、より良いアイデアを出していくことが必要だということを知ったことだ。国連にはユニセフが行っている「箱の中の学校」というものがあり、ジュラルミンのケースの中に、ノートや鉛筆、黒板に使える絵の具など勉強するための道具が詰まっている。そのノートは、どんな文化や言葉の人でも使えるように、右からでも左からでも書けるように工夫されている。紛争や災害時に、学校で子供たちが勉強できるように送られるものだ。「箱の中の学校」を送る理由として、被災地にいる子供たちに教育を続けるため、また孤立しないように精神的支えとなるように、ということも想像できた。だが、子供が一ヶ所に集まることで、子供たちが犯罪に遭う事態を減少させることができる、ということを知り、私には思い付くことのできなかつた考えだと思った。直接的な因果関係だけでなく、他の被害とも関連付けられることが必要だと感じた。私も、もっと物事を色々な視点、観点から考え、様々な問題と関連付けたアイデアを考えられるようになりたい。

自分の夢をためらわずに言えるようになりたい。そして、口でカッコいい夢を語るだけでなく、そこで働くのにふさわしい素質と考えを身に付けた大人にならないといけない。そのために、これから辛いこともたくさんあると思うがそれを一つ一つ着実に乗り越えて、いつか誰かに夢をあげられるような人になりたい。

5.8.OB, OGとの懇談会

3月24日(日)夜、ニューヨークの10th Avenueにある、“The Greek Kitchen”というギリシャ料理のレストランで、懇親会を行いました。小倉高校の卒業生として、田代さん、有馬さん、大内田さん、そして古部さんがいらっしやり、貴重なお話を聞かせてくださいました。

私が話を聞いたのは、主に大内田さんと古部さんでした。古部さんは第5回の研修時にご参加いただいて以来の参加で、大内田さんは初めてのご参加でした。古部さんは元ラグビー部で、高校卒業後、大学を経て日本の企業に就職なさいました。その後、海外転勤をするならインドへと要望を出し続けたところ、ブラジルのサンパウロへと転勤になられ、さらに3年ほど前にアメリカ・ニューヨークへと転勤なさいました。その体験を踏まえて、大きく2つのことをお話しいただきました。1つ目は、日本、サンパウロ、そしてニューヨークでの文化、考え方の違いについてでした。例えば、日本人ははっきりと自分の意見を示すことは少ないが、海外では自らの考えを明確に示したうえで協議などを行う、というようなものでした。また、ブラジルとニューヨークでも考え方が違っていらっしやうので、転勤のたびに少し苦労をしておっしやっていました。私はこの文化の違いについて、その国の立地やたどった歴史に要因があるのではないかと考えました。例えば、アメリカやブラジルは多民族社会を構成しているような大陸国家ですが、日本は島国であり、異質な外部のものを排除してきた国家です。このような違いによって、文化の差が生まれると私は考えます。しかし、古部さんもおっしやっていたのですが、現代のグローバル化で様々な文化が融合するようになりました。ここで、より仕事を行いやすくするために、古部さんは赴任先の文化に合わせて行動し、なじむことを心掛けたそうです。このことがお話しいただいたことの2つ目でした。他国においてはその地の文化になじむことが、この現代を渡り歩く有効なすべの一つであると、古部さんはおっしやいました。このことは的を射ていると感じました。

大内田さんは古部さんと同学年で、同じラグビー部のマネージャーをしていらっしやったそうです。高校卒業後に海外の大学に進学なさい、そのまま海外の企業に就職なさいました。私はその話を聞いたときに、大学入学の時点から留学して、海外で暮らしていくという発想力と、それを実行に移す行動力がすごいと感じました。そのときにおっしやられたことは、行動しないで後悔するより、行動して後悔した方がはるかにいいとのことでした。日本人は行動に移せずに後悔する人が多くいますが、機会があれば行動をとってみることは、今後の社会においても大切なことだと私は考えました。

また、お二方がおっしやっていたのは、“偶然”についてです。お二方は高校の同級生かつ同じ部活動で、その後他の道を経てニューヨークで再会したそうです。そこでお二方がおっしやったことが、人生は偶然の連続で何が起るかわからないということです。しかし、お二方ともその偶然を楽しみながら生きていらっしやいました。このように、偶然を楽しむことの大切さを、改めて実感しました。

もう一方のテーブルでも、とても貴重な話を聞くことができ、大変盛り上がりしました。今回お話しいただいたすべての方々、大変気さくで、私たち研修生の話にも耳を傾けてくださいました。また、意見をはっきりと述べてくださり、とても分かりやすく話してくださいました。この“コミュニケーション能力”も近年の社会で必要に

なる能力です。私は、今後様々な人と実際に会話をし、コミュニケーションをとって
いくことを心掛けていきたいと考えました。

上田遼

私は主にOBの田代さん、有馬さんよりお話を伺いました。田代さんはセッティング
等を含めて本懇親会に長い間ご尽力いただいております、息子さんも出席されたことがあ
るそうです。有馬さんは今回が初の出席だと仰っていました。御二方の豊富な人生経
験から来る言葉は一つ一つ重みがあり、とても興味深かったです。

田代さんからは主にアメリカでの生活について伺いました。田代さんは大学卒業後
に日本企業に就職されましたが、突如アメリカへの転勤を命じられたそうです。当時
はとても苦労されたと伺いましたが、今ではそれがきっかけとなり長くアメリカで生
活を続けていらっしゃるそうです。アメリカ暮らしがかなり長い間、何気ないよう
な日常生活の話でも日本との違いに驚かされるが多かったです。そして私が田代
さんから伺った話で最も驚いたのは、田代さんが今現在、弁護士の資格を取るために
勉強をされているということでした。アメリカという日本とは法律の全く違う国で法
律の専門家になろうという、そのチャレンジ精神にとても驚きました、また、懇親会
に出席いただいた先輩方の中で最年長でありながら、アメリカに移住という困難を乗
りこえた上で更に挑戦を続けるという姿勢に大いに感服しました。ここから私は、人
生は挑戦の連続であるのだと改めて確信すると共に、安定した生活や基盤の上に眠り
続けて困難を避けるのではなく、敢えて挑んでいく姿勢が人生を豊かにするのだと思
いました。アメリカへの移住(学生でいうと長期留学)は、私を含めて英語に不安を抱
えている人達にとっては困難で敷居が高く、縁のないようなことに思えていたが、
真に問われるのは能力ではなく当人の姿勢の在り方であるのだと、田代さんの経験か
ら教えていただきました。

有馬さんはアメリカに来てからあまり長くはないと仰っており、初めはチップを払う
かどうかや日本食の入手方法などの話題で盛り上がり、その後アメリカに来た経緯や
生活についてお話をいただきました。有馬さんも田代さんと同じで大学卒業後一般企
業に就職され、転勤によってアメリカに来たとのことでした。また、今回初めてこの
懇親会の存在を知り足を運んでくださったと、その時に伺いました。有馬さんには主
に進路のアドバイスをいただきました。どの大学にするか迷っている私に「入ってみ
ると意外とそうでもないかもよ」と優しく声を掛けてくださったのを覚えています。
一見するとなんでもないような言葉ですが、有馬さん自身もアメリカに移住という困
難に今現在立ち向かわれていることを踏まえて考えると、とても勇気づけられる言葉
でした。何事もやってみなければどう転ぶかは分からない。そこで大事なは見えな
い不安に怯え行動することや冒険することを恐るのではなく、何が起こっても問題
ないように人事を尽くすこと、まさに「人事を尽くして天命を待つ」なのだと思
っていただきました。

御二方の話はとても勉強になり、小倉高校
のOBOGの先輩方の偉大さを益々思い知りま
した。お忙しい中足を運んでくださった先輩
方、ありがとうございます。この場を借り
て御礼申し上げます。

榎谷 怜央



〈NHK・アメリカ総局について〉

NHKは1950年に放送法に基づく特殊法人として設立された「日本放送協会」の公式の略称である。NHKは公共放送であり、国内に向けた放送については視聴者からの受信料を財源としている。これは、国家が直接運営して国費を財源とする国営放送や、広告を放送して広告料収入を主な財源とする民間放送とは異なるものである。「政治的公平」「対する論点の多角的明確化」などの放送法に基づいて放送を行っている。国内の番組としては、総合・教育テレビ放送、AM・FMラジオ放送、インターネットでのニュースの配信などを行っている。また、NHKワールド JAPANは、テレビ、ラジオ、インターネットで日本やアジアの今を伝えるニュースや番組を世界に発信している。

NHKは世界の30都市に特派員を派遣し、世界の最新情勢や日本の参考となるような海外の事例などを正確かつ速やかに視聴者に伝えるべく取材活動を続けている。海外総支局からの報告を中心に、特集が構成される事が多い。ヨーロッパ総局・アジア総局・中国総局・アメリカ総局というように4つの総局と26の支局、あわせて30都市にその拠点が置かれている。

私たちが訪問したNHKアメリカ総局は、ニューヨークの中心地のビルの中にある。アメリカには他にもワシントンD.C.とロサンゼルスに支局が置かれている。現地です実際に起きていることについて取材・撮影を行い、日本に伝えるのが主な役割である。ホワイトハウスなどがあり政治の中心地であるワシントンD.C.の支局は政治的な内容を主に扱っている。国連本部が位置し、ニューヨーク証券取引所をはじめとする銀行などが集中するニューヨークのアメリカ総局では、主に国連や経済について扱っている。

〈体験内容〉

始めに、会議室にて、アメリカ総局長の河野憲治さんがアメリカ総局やNHKの報道について説明をしたり、質問に答えたりしてくださった。河野さんは長年の海外特派員経験をお持ちで、ワシントン支局長、ロサンゼルス支局長、テヘラン支局長、報道局国際部長などを歴任されている。最近では、2015年から2017年まで、ニュースウォッチ9のキャスターを務めていた方だ。



そこで説明して頂いた、ニュース制作の仕組みについて紹介していく。ニュースは、原稿を書き、映像を撮影する「取材」、それらを組み合わせ編集する「制作」、それらを放送する「送出」の三つに分けられる。取材班と制作班の間に「デスク」と呼ばれる部があり、そこで内容をチェックされる。NHKでは、一度デスクを通った記事はラジオやウェブなど様々な媒体で使うことが許可されているということだ。



次に、スタジオに行き、ニュース原稿を読む体験をさせて頂いた。私たちがニュースで見る映像では、窓の向こうにアメリカの街並みが見えるが、実際にはグリーンバックで、ビルの屋上にあるカメラの映像を合成しているようだ。また、アナウンサーの手元の原稿は、天井に固定されたカメラによって撮影されており、アナウンサーの目線の先にあるモニターに映されている。そのモニター

を反射させたボードの奥側にカメラがあるため、映し出された原稿を読み上げると、自然とカメラを見ていることになるのだ。外国では、あらかじめ打ち込まれた原稿がスクロールされていき、それを読むという形式がとられていることも多い。しかし地震など災害が多い日本では、いち早く対応するために印刷された紙を手元に置いてそれに書き込んだり差し込んだりすることが出来るように工夫がされているようだ。

さらに、私たちがリポーターとなって、生中継の体験もさせて頂いた。

〈質疑応答〉

事前にお送りしていた質問に答えてくださったので、その中のいくつかを紹介していきたい。

1. 大統領選挙の時に、アメリカ総局ではどのようなことを行っていましたか。

1年がかりの一大イベントで、D.C.支局に開票速報本部を置くなどして情報を収集していた。ヒラリー・クリントン氏の当選の可能性が高かったためそちらを手厚くしていたので、トランプ氏が当選したのには驚いたし、対応も大変だった。また、日本での選挙報道との違いは、日本の場合はNHK独自のデータで判断し報道できるが、アメリカの場合はデータが少ないため、現地の放送局であるABCと連携して報道を行っている。

2. 報道した内容に対して視聴者から批判を受けることはありますか。

キャスターのもとには届かないようにしているものの、担当者のもとにはたくさん届いている。これは仕方がないことであり、批判を受けるということはそれだけ視聴者の関心があるということでもある。

3. アメリカでの取材について、日本での取材と違う点や、気を付けていることはありますか。

日本では以前は「夜討ち朝駆け」が、警察担当記者などでは取材の基本だった。これは予告なく早朝や深夜に取材先を訪問し人間関係を作り、情報を聞き出すものである。しかしこれはアメリカでは銃で撃たれる可能性があるなど危険なので、行われていない。また、日本に比べて治安が悪く、カメラが盗まれることもあるので注意している。

4. SNSが普及している現在、報道に関して以前と変わった点はありますか。

ツイッターの情報はやはり早いので、東京にはチェックしているチームがいる。しかし、中には正確でないものや嘘も多いので、AIを利用するなどして正確かどうかをよく確かめている。

5. 報道をしていくうえで大変なことはありますか。

NHKは公共放送なので、公平さが特に重要となってくる。例えば選挙報道では、候補者を扱う尺の長さを同じにするといった配慮を行っている。

6. アメリカと日本ではどちらが取材をしやすいですか。

NHKの知名度がとても高いため、日本の方が取材をしやすい。アメリカでは他の放送局に比べて知名度は低いですが、ドームくんは現地の大手スーパーでマスコットキャラクターとして採用されたことがあるため、人気である。

7. フェイクニュースによる誤報を防ぐための取り組みはありますか。

フェイクニュースの中でも一番怖いのは映像系のものである。正しいかどうかを審議するのが大変で、また、視聴者に信じられやすいからである。映像に嘘が無いかを調べる専門の業者に委託をしたりしている。

8. 情報社会を生きていくうえで、大切なことは何でしょうか。

その情報が正しいかどうかを判断するのは、最終的には自分である。最初から情報をうのみにするのではなく、疑いながら過ごすことが大切である。

〈感想と考察〉

始めに、今回の研修で私が感じたことを記しておきたい。アメリカ総局で出会った河野さんをはじめとする職員の皆さんからは、「世界の情報を、日本のみんなに伝えたい」という熱い思いが存分に伝わってきて、自分のニュースに対する考え方が少し変わった。今まで私は、ニュースというと少し堅苦しい印象を持っていた。だが純粋に考えてみると、新しいことを知るのはとても面白いと感じたのだ。今まで遠い国に思っていたアメリカも日本との密接なかかわりがあり、政治や経済、文化の面で影響を及ぼし合っている。ニュースはテレビの中の出来事なのではなく、自分の実生活に結びついている。リアルタイムで、世界を動かしている人がいる。今は高校生の自分だけれど、その世界に出てゆく可能性を持っている。当たり前ではあるが、この研修に参加しなければ気付いていなかったかもしれない発見だった。そしてその世界の「現場」に立ち会い、発信者となれる報道の仕事が、とても魅力的に感じられた。これからはそのような新鮮な目線でニュースを見ることが出来ると思う。

次に、アメリカの報道と日本の報道について、比較・考察を行っていきたいと思う。日本では、放送法で「政治的公平」「対する論点の多角的明確化」が定められている。なかでもNHKは公共放送であるため、選挙報道は特に公平に扱うようにしているということだ。河野さんのお話にもあったように、選挙候補者を扱う尺を同じにするなど様々な工夫が行われている。一方、事前研修でアメリカの報道について調査した中で、印象的だったことは、アメリカの政治報道における分極化である。日本と比較して特徴的なのが、「保守」と「リベラル」いずれかの政治的立場を明確にした内容の番組が発信されているという点だ。「保守」と「リベラル」は国によってそのニュアンスは異なるが、一般的には、伝統的な価値観や考え方を大切にするのが「保守」、格差をなくして個人間の平等を実現しようとするのが「リベラル」とされている。アメリカは二大政党制であり、トランプ大統領の共和党は保守主義的な思想を、オバマ元大統領の民主党は自由主義すなわちリベラルな思想を取っている。具体的には、ア

アメリカでもっとも信頼度が高いとされているテレビ局FOX Newsは保守的な立場を取っており、大統領選ではトランプ大統領の共和党寄りの報道が見受けられたという。このような分極化の背景には、1949年に定められた放送の公平性を保証するための規則「フェアネス・ドクトリン（公平原則）」が、言論の自由を制限しているという考えから、1987年に廃止されたということがある。それによって番組の内容の自由度が大いに高まり、ニュースや政治問題についてリスナーからの電話を受けて過激な議論を行う政治トークラジオ番組が急増し、人気を集めた。この動きがテレビの報道にも影響している。このようにアメリカでは、メディアの分極化により、主観を含んだ放送がなされる場合もあるため、私たち日本人がアメリカのメディアから政治に関する情報を得るときは、どこの情報なのかをよく確認する必要があるのだ。アメリカと日本の報道について比較することで、自分の意思を主張できるアメリカの人々と、公平を重んじる日本人の気質がメディアの特徴にも表れているように感じ、とても興味深かった。アメリカの滞在中にじっくりとアメリカのテレビ番組を見ることが出来なかったので、実際にどのような報道がされているのかを自分でも調査したいと思った。

最後に、情報社会との向き合い方について考察を述べたい。今日インターネットが普及し、誰もが発信者になれるとともに、大量の情報を瞬時に手に入れることが可能になった。そこで問題となってくるのはやはり情報の正確性だろう。言葉が適切に伝わらなかったり、根拠のない話に尾ひれがついて広まっていったり、フェイクニュースや悪意のある嘘情報が流される場合もある。それによって人が傷つけられたり、プライバシーや権利を侵されたりしてしまう。便利なはずの道具が不利益を生むことにつながるのだ。まず、発信者としては、自分が発信する情報に責任を持つことが求められる。そして情報の受信者は、情報をうのみにせず、いくつかの情報を比較し、判断をすることが必要だ。また、自分が探していた都合のいいような情報だけを見て情報が偏るということがないようにすることも重要だろう。私は今回の研修を通して、大勢の人がたくさんの手間をかけて、「みんなに知ってもらいたい」という情報を精選してニュースが制作されていることを実感した。私は最近時間がなく、スマホで自分が気になるニュースをざっと読むことはあっても、テレビでニュースを見ることは少なくなっていたが、映像の分かりやすさと情報量、公平性と信頼性などを考えると、テレビのニュース、特にNHKのニュースをもっと見ていくべきだと感じた。河野さんのお言葉にもあったように、「その情報が正しいかどうかを判断するのは、最終的には自分である」のだから、その判断が出来る大人になろうと思った。

〈最後に〉

私たちの質問に丁寧に、分かりやすく答えてくださった河野憲治さん、様々な体験をさせてくださったアメリカ総局の皆さま、本当にありがとうございました。



5.10. 「9.11 メモリアルパーク」～本多麗奈

9.11 メモリアルパークは、2001年9月11日に発生したアメリカ同時多発テロの公式追悼施設であり、ニューヨークのグラウンドゼロにある。9.11 アメリカ同時多発テロでは4機の旅客航空機がハイジャックされ、激突、墜落した。2機はマンハッタンのワールドトレードセンターに激突し、その2つのビルは崩壊した。かつてワールドトレードセンターがあったそれぞれの跡地には、ノースプールとサウスプールという、慰霊碑があり、このテロの犠牲者たちの名前が刻まれている。残りの2機は、それぞれ、バージニア州にあるアメリカ国防総省本庁舎「ペンタゴン」、そしてもう一機は郊外に墜落した。一連のテロ攻撃による死者は2996人(被害者2977人、実行犯19人)、負傷者は、6000人以上であり、インフラ等への物理的損害による被害額は最低でも100億ドルとされている。

メモリアルパークには、様々な当時の映像や展示物があった。どれも、見る人に、テロがどんなに非人道的なものかを訴えかけてくるものであった。そのなかで、私が最も印象に残った2つのことについて書きたいと思う。1つ目は、ハイジャックされた飛行機の中から家族、もしくは恋人に向けてかけた当時の電話の音声である。その内容は、飛行機がハイジャックされてしまい、おそらく状況が好転することはなく、自分は今からきっと死ぬだろうということ、そして、自分がどんなに相手のことを大切に思っているかを伝えるものだった。館内をまわる中で、受話器があったので何気なく耳に当ててみると、この音声だった。不条理な状況の中で、死を覚悟し、大切な人に別れを告げなければならない切実な痛みが、伝わってきた。この電話をかけた人がどんな思いでこんなメッセージを残したのか、そしてこの電話を掛けられた残された人はどんな気持ちでこの電話を聞いたのか、自分がこの人だったら、自分の大切な人がこんな状況になってしまったら、と考えると泣きそうになった。2つ目は、同時多発テロで犠牲になった人々の、顔写真と名前の展示だ。写真の中では、人々は日常の中で、カメラに向かって笑顔を向けたり、凛々しい表情をしたりしていた。まさか突然日常が奪われるとは考えていなかったはずだ。実際に被害にあってない人はどうしても少し他人事だと思ってしまうと思う。だが、顔写真や名前の展示によって、このテロがどれだけの人を傷つけ、人生を奪ったのかが、鮮明に伝わった。

私は、このような経験を通して、実際に被害にあった人々に比べればほんの僅かには違いないが、テロによる痛みを知ることができた。当時の状況を知るだけで、とても心が痛くなった。犠牲者たちは、突然人生を奪われ、どんなに怖かっただろうか。負傷者は、遺族の方々は、どんな思いで生きてきたのだろう。このテロの記憶は、生きている間、消えることはないだろう。私は、テロを計画し実行した人たちに対して、怒りと恐怖を感じる。私は、テロの実行犯たちも死んでいることに驚いた。飛行機を墜落させるのだから、考えれば、死ぬのは当たり前なことだ。しかし、無実の人々を殺し恐怖に陥れるために、自分の命を捨てるのだ。私にはその考えは理解できないし、理解してはいけないと思う。だが、世界ではテロも戦争もなくなっていない。社会には、政治的問題や貿易摩擦や宗教の違いなどによる様々な理不尽、不平等、不満があふれている。このような状況がテロの温床になっていると考える。テロをなくしていくためには、世の中にたくさんの違いがあるのは当たり前であると認識し、違うから変える、なくすというのではなく、その違いを尊重し、違いのある人々と共存していくという意識を一人一人が持たなければならない。そして、社会的弱者を救済し、世界中のすべての人々が幸せに暮らしていける方法を国際社会が一体となって考え、行

動していかなければならないと考える。同じ人間同士で争い、命を奪い合う。そんなことは許されるものではない。私たちは、9. 11メモリアルパークを訪れ、改めてテロがどんなに非人道的なものかを認識し、世界からテロをなくすことの重要性を学ぶことができた。そして、テロの恐ろしさを未来の世代にも伝え、二度とこのようなテロが起こらないようにしなければならぬと感じた。私たちは、今、不自由なくこの平和な日本で生きている。この日常は、私たちにとって当たり前だと感じてしまうものだ。だが、どうして何の疑いもなく当たり前だと言い切ることができるのだろうか。世界にテロがある以上、いつ私たちの「当たり前の日常」が壊されるかはわからない。私は、これから、ただ争いを憂えるのではなく、原因を考え、抽象的でもいいから、解決策を考えたい。テロに対して、自分なりの考えを持ち、自分にできることを探したい。これから先、この悲惨なテロのことを忘れずに、平和に感謝して生きていきたい。

○感想～榎谷怜央

「9.11」。8月に生まれ、当時生後1ヶ月であった私は当然当時のことを覚えているはずはないのだが、その言葉を耳にすると表現しがたい思いが、ある筈のない行き場を求めて私の体を駆け巡る。背筋が引き締まるような、かつ煮えたぎるようなそんな感覚だ。勿論歴史的にみても9.11の存在は大きい。真珠湾攻撃以来のアメリカ本土襲撃、約3000人の死亡者と6300人を超える負傷者、テロリズムの台頭の象徴、アメリカの対テロ戦争の契機、挙げるとキリがない。ただ一つ言えるのは、「これはアメリカで起こった事件であるが、アメリカの事件ではない」という事だ。ややこしい表現になったが、何も言葉遊びがしたい訳ではない。メモリアルパークの訪問を通して、私はどんな思いを抱いたのか、テロのグローバル戦争が進む今だからこそ考えてみたいと思う。

研修6日目、NHKのアメリカ総局訪問が終わり夕方のニューヨークに繰り出した。夕飯時が近づくにつれて通りには賑わいが増し、モールは数え切れないほどの人を吸い込み続けていた。しかし目的地に行くにつれて、自然とそのニューヨークの喧騒は遠のいて行った。研修先は「9.11メモリアル・パーク」。海外派遣研修最後の目的地。最後を飾るには相応しい場所であろう。研修の仲間同士が話している横で、メモリアルパークに近づく私はどうも誰かと話す気にも、写真を撮る気にもなれなかった。訪れたことなど一度もないのに、あの場にはシャッター音は似つかわしくないと不思議と理解していた。

メモリアル・パークの中の紹介は端的に行いたい。全て本物の展示物。へしゃげた柱、焼け焦げた標識、もう二度と動かない消防車、青年の勇敢さを今でも証明し続ける赤いバンダナ。何も「もの」だけでない。ハイジャックされたアメリカン航空の乗客の肉声。これらを目の当たりにして湧き上がるやるせなさ、怒り、悲しみをミキシングしたような粘度の高い感情は私の心に今もこびりついて離れない。時折目覚めてはどこかへと消え去っていく。これらは文面にすると数十文字に過ぎないが、文字という手段では完全に表しようがなかった。この世界で生きている限り、ぜひ訪れていただきたい、訪れたことがあるならばもう一度。言うておくが、そこでは記録用の写真、まして笑い声などは場違いである。9.11の写真や情報などが多くネット上に転がっている中で、ここを訪れる意義はそんなくだらないことではない。写真が欲しいな

ら Google で拾えばいいし、何も事件があった場所を訪れることが全てではない。じゃあ一体何なのか、ここで先述した言葉遊び擬きに戻りたい。「これはアメリカで起こった事件であるが、アメリカの事件ではない」、つまり 9.11 は何もテロリズムのアメリカに対する挑戦状ではなかったという事だ。あれは明らかに平和への挑戦状、この惑星で生きている全ての生命への挑戦状であったと、メモリアル・パークは私達に教えてくれる。そして対テロ戦争の続く今、テロリズムの台頭する今、そして差別感情が煽られ続ける今、世界平和のあるべき姿をメモリアルパークは常に提示し続けている。そこで得られた悲しみ、怒り、全ての感情はこの世界をより良いものにするのだと私は強く信じている。

最後に 9.11 について調べるにつれて少々興味深い事があったので、それを記した上で考えたことを述べてこの小欄は幕を引きたいと思う。9.11 に関しては「陰謀論」に関する話題が尽きない。9.11 と Google に入力すると、1 スペース開けて必ず検索候補に「9.11 陰謀論」と出てくる。オサマ・ビンラディンは何処にいるのか、何故か溶けた鉄骨、激突していない所から上がる煙、アルカイダ設立の経緯、テルミット反応の痕跡等々ネット上に転がっているものも様々だ。最近ロシア大手メディアが報じ、米大統領選でトランプ現大統領が「9.11 の真実を開示する」と言ったことから、関心は大いに高まっていることや、これが単なるハッターリでないことは薄々感じられる。ここでは両者の言い分を比較して、陰謀論が正しい、間違っている等と白黒をつける気はないが、陰謀論の話し合いを見ていて少し思うところがある。話し合う以前に何か大切なことを忘れてないか。陰謀論に賛成するにしろ反対するにしろ、両者に求められるのは被害者への哀悼の意と平和への願いである。「9.11 は陰謀」だからとそこで亡くなった約 3000 人をなおざりにすることは許されないし、あってはならない事だ。「9.11 は陰謀」だからとメモリアルパークの意義そのものを否定することなども勿論許されない。たとえ万一にも、9.11 が陰謀で全くの作り話だとしても、メモリアル・パークは今まで反テロリズムの精神と世界平和への願いを届け続けてきたし、これからもその役割は変わらない。9.11 があったからこそメモリアル・パークは作られた。しかし、メモリアル・パークの存在意義はもはや 9.11 に依存しない。

メモリアル・パークで私がシャッター音を響かせることはなかったし、人と言葉を交わすこともなかった。あの場ではひたすら生まれてくる感情と同居し向き合うのが良いと思う。その結果生じた目元の熱さと息が吸いにくいあの苦しさを、私は一生忘れることはないだろう。メモリアル・パークは私の世界平和への祈りの原点として今日も存在し続けている。

この場を借りて 9.11 をはじめとして、全テロリズムの被害を受けられた方に深く哀悼の意を表します。



6. ホームステイ

○島中&北山

—1日目—

私たちのホームステイ先には Janelle という 18 歳の女子高校生がいて、初日は彼女と彼女の友達 Emma とホストマザーと一緒に大きなショッピングモールに買い物に行った。彼女たちは元々そのショッピングモールに行く計画を立ててくれていたらしいのだが、車内で私たちがタイムズスクエアに行ってみたいと言った事で、混乱を招き、初めの方は不穏な空気が流れていて緊張していたのが今となっては懐かしく感じる。結局、ショッピングモールに連れて行ってもらい、彼女たちにアメリカでのファッションの流行などを聞きながら洋服やアクセサリなど色々なものを購入した。家に帰ってからは Janelle と Emma と一緒にたくさん話をした。Janelle が二人が通っている高校のアルバムを見せてくれた。そのアルバムには現在の個人写真だけでなく、小さい時の写真や、両親からのメッセージ、部活動の写真などが載っていて、とても個性あふれる素敵なアルバムとなっていた。その後は、一緒にボーリングに行った。午後 10 時半頃だったが、ボーリング場にはたくさん高校生がいて、私たちもアメリカの高校生になったような気分でも楽しんだ。

—Column—アメリカの人気店～ファッション～

Victoria's Secret——米国初のファッションブランド。衣類、下着、香水、美容用品などを扱っている。通称「VS」。「ビクシー」と呼ばれることも。ファッションショーが非常に注目されている。

Pink——Victoria's Secret と同じ系列のブランドで、同じように、下着や美容用品などを扱っている。Victoria's Secret よりも若い年齢層をターゲットにしている。ブランドのマークは犬。

ULTA BEAUTY——化粧品店。プチプラコスメやネイル用品、ヘアケア用品が多く取り揃えられている。多くの商品が 2 つ買うと 50% オフなどのセール対象商品なのでとても安く購入することができる。

—2日目—

ホストマザーが私たちを起こしに来たのは、朝の 9 時頃だ。その後支度を済ませて朝食を食べた。メニューはスクランブルエッグとベーコンとシリアルだった。牛乳やオレンジジュースなどの容器が日本に比べてとても大きく、消費期限内に使いきれぬのだからと心配になるほどであった。その時に、私たちからのお土産である桜柄の竹箸、団子形の箸置き、将棋の駒柄や金魚柄の手ぬぐいなどを渡した。ジャネルは日本に留学しに来たことがあるので、箸は使えるらしく、喜んでくれた。その後家を出て、ジャネルたちの学校に連れていってくれた。アメリカでは小さい学校らしいが、とても大きな学校だった。その後、Jefferson Valley Mall へ行った。そこで、ジャネルや店員さんにアメリカでのファッションやコスメの流行りを聞きながら買い物をした。買い物を通して分かったことは、アメリカ人は自分のしたい恰好をしているということだ。他の人にどう思われるかは考えずに自分の欲しいものを買って、身に着

けるし、自分の格好に自信があるのでとても似合っているのだ。私も見習いたいと思った。昼食の時間にはモールの中華料理店でご飯を食べながら部活や学校行事などの話をした。話をしながら、国外に出るとその国の文化だけでなく自国の文化を改めて学ぶことができるのだと実感した。

〈感想〉

私は、渡米もニューヨークに来るのも2回目だったが、前は文化や暮らしに触れることがなかったので、今回は新たな発見や驚きがたくさんあった。まず、アメリカ人は自分の思っていることを相手にはっきりと伝えるということだ。私は夜、ボーリングに行きたいかと尋ねられて中途半端な回答をしたら、あなたはどうしたいの？と言われた。その時私は、アイメッセージができていないと気づいた。だから、これからは自分の気持ちを相手に伝えたいと、相手の意見を聞いていこうと思う。(島中)

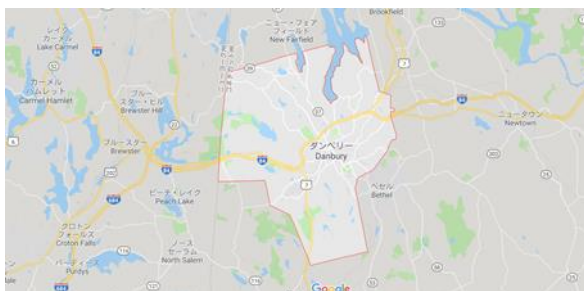
〈感想〉

ホームステイの2日間は本当に充実した2日間だった。アメリカの高校生と交流して、お互いのことや、アメリカの高校生活について知ることができ、とても濃い時間だった。私は、去年の夏に3週間ロサンゼルスにホームステイに行っていたのだが、その時は自分の英語に自信がなくて、自分から何か話題を見つけてホストファミリーに話しかけるということがあまりできておらず、悔しい思いをしていた。しかし、今回はその経験を生かして自分から積極的に話すことができたように思う。1日目は、JanelleとEmmaを怒らせてしまったかと思い、失敗した、と感じていたが、1日間一緒に過ごして、最後には非常に仲を深められたように思う。2日目の朝はホストマザーとたくさんお話をすることができた。ホストマザーはカウンセリングの会社の社長をしているということだった。日本ではカウンセリングは精神的な問題を抱えている人が受けるようなイメージがあるが、調べてみると、アメリカではそのようなイメージはなく、むしろ気軽に相談するような感覚で多くの国民が利用しているそうだ。日本は過労死なども問題になっているが、アメリカのようにカウンセリングが一般的になり、気楽に悩みを話せるような雰囲気があれば、仕事でのストレスが軽減する人もいるのではないかと思った。2日間ホストファミリーと過ごして一緒に話す中で、聞きたいことや話したいことがたくさん出てきて、でもうまく伝えられないという場面が多々あり、もどかしく思うこともあった。もっと英語が話せたら楽しいだろうな、もっと話せるようになりたい、と強く思った。この気持ちとこの経験を原動力として、英語はもちろん、様々な分野の学習に励んでいきたい。(北山)



○榎谷&上田

今回お邪魔したのは、ニューヨーク州のおとなりコネチカット州にある、ダンベリーという町。ニューヨークのベッドタウンとしても栄える、自然豊かな町でした。

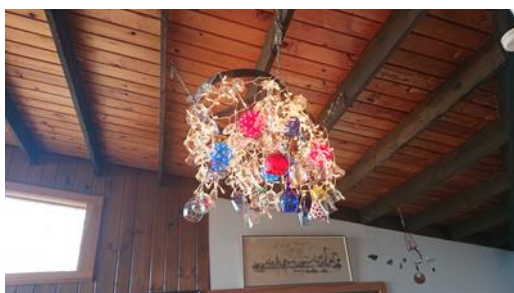


・アメリカと日本の生活の違い

実際にアメリカの方の家にお邪魔してお話をして様々な違いを体感しました。

～住居～

まず、家が広い。お邪魔した家は老夫婦二人暮らしだったのですが、それには十分すぎるほどの広さでした。所有している土地はもっと広く、敷地内を散策できるほどでした。家の中には遊び心満載のインテリア、暖炉など、快適な空間が広がっていました。



～食事～

アメリカでは、主食はおもに小麦料理で、お米は出てきません。スーパーへ買い出しに行くのですが、そのスーパーがすごく大きい。都会近郊にはたくさんのもが売っている、大型なスーパーが多くあります。そこで仕入れた食材でいざ調理。夕食はホストマザーお手製の魚のムニエルでした。とてもおいしかったです。



～国民性～

アメリカの人たちは、おしゃべりが大好きです。いつも街中でも様々な人に話しかけたり、おしゃべりをしたりしています。少しの沈黙でも気まづくなり、ショートトークは必須です。ここにもやはり、日本人とアメリカ人との民族性の差が表れるのではないかと考えました。日本では、あまり街中で他人に話しかける人は少ないと感じます。実際にホストマザーも“日本人は口下手だ。”とおっしゃっていました。

また、アメリカ人は好奇心が旺盛。ホストマザーの家には、フリーマーケットで買ったという浮世絵が飾られていました。そのついでに、榎谷君が浮世絵を調べて解説をするという一幕も…。また、その他の多くのインテリアも飾られていました。そのため、物が多い。ホストマザーいわく、アメリカの人は衝動買いをしがちで、家にはものがあふれかえっているとのこと。興味を持ったものを手に入れ、そして物が多くなる、好奇心旺盛な国民です。

～オンとオフ～

アメリカの人たちは、休日を楽しみます。私たちが滞在したのは週末で、実際に日曜日に町へと出かけたのですが、出かけている人の多さ。ショッピングモールや市場、映画館などにはたくさんの方がいました。遊ぶ場所の大きさもアメリカンサイズ。家族連れで訪れて、一家そろって休日を謳歌しているようです。



～気づいたこと～

ホストファミリーとの生活や会話を通して、特に印象に残っていることがあります。それは、日本はなぜ幸福度ランキング世界 58 位なのか、についてです。丁度滞在時に発表された順位で、すごく話題になりました。そのなかで日本人の幸福度が低い理由について、

1. 日本人はオンとオフのメリハリが薄く、働きすぎである。
2. 日本人は気をつかいすぎである。
3. 日本人はあまり笑わない。

という理由が考えられました。実際にアメリカで1日だけ生活してみて、このことを実感しました。アメリカ人はおしゃべりを楽しみ、おおらかに生き、そして何より、よく笑っていました。一方で日本人がそのように笑うことは、日常においてあまり多くはありません。そこで、より幸せになるためには“笑うこと”がカギとなると、私は考えました。

～感想～

・実際にアメリカでホームステイを行うことで、よりアメリカのことについて知ることができ、よかったです。これからは、“笑うこと”も意識しながら、楽しい人生を送っていきたいと感じました。とても楽しかったです。(上田)

・言語が違っても、人間思うことは同じであると感じました。言語はあくまでもコミュニケーションツールの一つで、互いに思いやることができれば、言語の違いなどはほんの些細なことではかないだなと思いました。(榎谷)

○末次&松本

<ホストファミリーについて>

今回私たちがお世話になったホストファミリーは、看護師であるホストマザーの Stacey、消防士であるホストファザーの John、子どもの Emma と Gabriel、ペットの犬と猫、鶏で構成されていた。Stacey は、私たちが笑顔で迎えにきてくださって、車の中



中でアメリカのことをたくさん教えてくださいました。外で出たプラスチックのゴミを家に持ち帰り再利用するなど、環境のことを考えて生活している尊敬できる方だった。John は、とても優しく温かい方だった。寝る前に何時に起きたらよいか聞くと、「何時でもいいよ。ゆっくり休んでね。」と教えてくださいました。Emma はディズニーのベルが好きな女の子。修学旅行で東京ディズニーランドに行った写真

を見せると、私も行きたいと言ってくれた。Gabriel は、やんちゃな男の子。お菓子のポッキーが大好きらしく、お土産で抹茶のポッキーを持っていくと、僕のものだと言ってとても喜んでくれた。二人とは、自己紹介をするとすぐに仲良くなれた。家はとても広く周りが自然豊かで、子どもたちはのびのびと育てている印象だった。Stacey によると、子どもがしたいこと、好きなことをできるだけやらせてあげているらしい。のびのびと育てているから、アメリカの子どもは自分の意見をしっかり持って、積極的に発言できる子が多いのではないかと思った。また、クリスマスやハロウィン、イースターなどのイベントは、家族全員で毎年お祝いしているらしく、家族団らんの時間も大切にしているようだった。



<イースター>

イースターとは、4月21日に行われるイエスの復活祭のことだ。イースターが近いということで、デパートにはイースターを祝うお菓子や雑貨がたくさん並んでいた。私たちもホストファミリーの家で、イースターのお祝いを体験させていただいた。テーブルの上に並べられた卵に、



クレヨンで絵をかき、専用の絵の具で卵を浸したら完成。Emmaは宇宙をモチーフにしたデザインにする、と張り切っていた。私たちもそれぞれ好きな絵を描いた。この卵は後で食べるらしく、デザインした卵を食べてしまうのは少しもったいなく感じてしまった。

<ショッピング>



1日目も2日目も、Staceyがショッピングに連れて行ってくださった。1日目は、オーガニックのものしか扱っていないスーパーマーケットに行った。体に気を使い、なるべく化学肥料などの使われていない食べ物を選ぶようにしているらしい。そこで、スムアを作るためのマシュマロや朝に食べるちょっとしたお菓子などを買った。レジで支払いをするとき、かごを置くところがベルトコンベアになっていて動いたのにびっくりした。2日目は、のんびりと朝食をいただいた後、町の小さな個人経営の店に行った。可愛い雑貨や面白いお菓子などがあった。中でも、日本のキャラクターのおもちゃを見つけた

ときはとても嬉しかった。「千と千尋の神隠し」のカオナシを見つけ、Emmaに知っているか尋ねると、映画を観たことがあると言っていた。ジブリ作品はアメリカでも人気らしい。またこの日は、大きなスーパーマーケットで昼食を食べた。買い物をしていると、所々にボタンがあった。それを押すと、ぬいぐるみが出てきて歌いだしたり踊りだしたりした。小さい子が一緒に買い物にきても、これなら楽しめると思い、日本でもこんな楽しいスーパーマーケットが増えるといいなと思った。昼食は量り売りのコーナーで買った。意外にもサラダの種類が多く、あまり野菜を食べることができていなかった私たちにとってそれがとても嬉しかった。また、アメリカの料理だけでなく、メキシコ料理やイタリア料理などもあり種類が豊富で、容器に詰めることが楽しかった。



<キャンプファイヤー>

ホストファミリーの家の庭で、キャンプファイヤーをした。まずはスモアを食べた。スモアとは、マシュマロを火であぶり、それをビスケットでチョコと一緒に挟んで食べるものだ。最初はあぶり加減が難しく、少し焦がしてしまった。しかし、ビスケットに挟んで食べてみると、マシュマロは中が溶けていて、とても美味しかった。食べ終わった後は、火を大きくしていよいよフィナーレ。勢いよく燃える火はと



とても迫力があり、しっかり目に焼き付いた。家でキャンプファイヤーができるのは、庭が大きく家と家との間隔が広いからであり、アメリカの広大さを感じることができた。

<感想>

1日という短い時間だったが、アメリカの家庭での生活をぞんぶんに楽しむことができた。言葉の壁はもちろんあったが、ホストファミリーの皆は私たちのつたない英語を真剣に聞いてくれた。子供たちの話す英語はとても速く何度も聞き返したが、嫌な顔をせず言い直してくれたのが嬉しかった。また、ホストファミリーは2022年に日本を訪れる予定らしく、日本の寿司やアニメが好きと言ってくれたのも嬉しかった。

1日しか一緒に過ごせなかったが、お別れするときはとても寂しかった。感謝してもしきれないくらいの楽しい思い出がいっぱいできた。いつかまたアメリカを訪れるときは、ホストファミリーに会いに行きたいと思う。



集合場所のとある駐車場で、
“Michiko” “Sakura” と書かれた紙
を持って出迎えてくれたのは、私たち
のホストマザー、Kathy だ。彼女は御
年 78 歳、一人暮らしのおばあちゃん
で、事前のメールのやりとりで感じて
いた通り、とても優しい方だった。早
速車で彼女の家に向かった…のだが、
Kathy は早口で、英語で思うように返
事が出



来ない。この先上手くやっていけるの
だろうかと、少し不安になった。30
分ほどで到着したのは、自然が豊かで、
高級住宅街の Scarsdale という町だ。
教育が充実しているため、日本人が
多く住んでいた時もあったそうだ。彼
女の家もとても大きくておしゃれで驚
いた。私たちに用意してくれていた二
階の部屋は大きなベッドがある部屋
で、街の資料や新聞の切り抜きなど
を用意してくれていた。



家の中を案内してくれた後、「しばらく
したら降りておいで」と Kathy。部屋
に私たち二人きりになって「英語が
話せない！」と二人で慌てて電子辞書
を開いた。特に相槌のレパートリーが
少なかったので、少し勉強してから
Kathy のもとへ向かった。彼女はま
ず、家族の話聞かせてくれた。キッチン
に貼ってあるポストカードや写真を見
たり、バンド

マンの息子のレコードを聞かせてもら
ったり。次に私たちが持って行ったお
土産を渡した。Kathy はもともと日
本の事を知っていたので、風呂敷や
お寿司の形をしたキャンドル、扇子
や折り紙などをとても喜んでくれた。

夜ごはんはピザを作った。土橋・本
多ペアのホームステイ先が、なんと
Kathy ととても仲の良いお隣さん、
Elizabeth さんと息子の Ahanu くん
だったので、サラダを持ってきてく
れてみんなで夕食を食べた。手作
りのピザは本当においしかった。そ
の後私たちは Elizabeth さんの家
におじゃまして、Ahanu くんのか
わいチェロの演奏を聞いたり、



“Greatest Showman” の映画を見たり、
イラスト伝言ゲームをしたりと楽し
んだ。

翌日、Kathy の作ってくれたパンケーキを食べた後、近くの教会へ向かった。私たちは greeter として協会の入口に立ち、やってくる街の人に挨拶をしながら、その日のプログラムを配った。みんなとてもフレンドリーで、歓迎してくれたのがうれしかった。一時間に及ぶ礼拝では、ミサ曲を歌ったり、シスターのお話を聞いたり、どれも新鮮で面白かった。地域の人暮らしに触れることができ、本当に貴重な経験となった。



教会を後にして Kathy の車に乗り込み、Scarsdale の街を案内してもらった。歴史のある家や豪邸が立ち並んでおり、まるで映画の中のような感じだった。買い物がしたいという私たちのリクエストに応じて、スーパーにも連れて行ってくれた。そのスーパーの周りには電車の駅や川、小さな滝があって、とても暮らしやすい街だなと思った。

家に戻るともう昼食の時間で、Kathy がグリルでハンバーグを焼いてくれた。お別れの時間が近づいてきて、また車で私たちが出会った駐車場に向かった。行きよりも話は進んで、もう別れるなんて信じられないくらいだった。みんなで写真を撮って、ハグをして別れた。

【感想】

～兒玉 美智子～

初めてのホームステイで戸惑うことも多かったが、その分新たな発見をすることが出来た。私たちのペアは偶然にも隣が土橋・本多ペアだったため、他のペアとはまた違ったものを味わえたと思う。ホームステイで一番楽しかったのはごはん作りだったかもしれない。家でピザを焼いたことも、ハンバーガーを作ったことも初めてで、Kathy の指示を聞きながら具材を切ったり、たまに聞き間違えたりして Kathy から “No, no!” と止められたこともあった。今思い返すとどれもこれも貴重な経験だった。今からもっと英語の実用的な力をつけて、もう一度 Kathy に会いに行つてスムーズに話すこと。これが次の私の目標となった。

○土橋&本多

NYに着くやいなや、私たちはバスに揺られ、期待と不安を抱きながらホームステイ先へと向かった。Macisco 家のみんなが私たちを温かく迎えてくれた。そのホストファミリーを紹介しようと思う。

Elizabeth…Macisco 家のお母さん。とても優しく、私たちが英語を理解できるまで何度も丁寧に教えてくれる。昔、沖縄を訪れたことがあるらしい。

Ahanu…10歳の男の子。茶目っ気があり、少し恥ずかしがり屋さん。チェロを習っており、私たちに披露してくれた。

John…82歳のおじいちゃん。かつては、大学の教授だったそうだ。いつもニコニコしていて、私たちを大いに歓迎してくれた。教会に行くことが日課であった。



Day 1

お母さんの Elizabeth が迎えに来てくれて、そのままショッピングへ。小物・雑貨屋へ行ったり、ショッピングモールに行ったりして、各々買い物を楽しんだ。また、移動の車の中では、自己紹介や、私たちの町のことなど英語で積極的に話すことができた。Elizabeth も、私たちの英語力を褒めてくれて、自分の英語が相手に伝わっていることが分かり、自信につながった。夜は、隣家に滞在する古荘・兒玉ペアと一緒に夕飯を食べた。この日は、手作りピザとチョコレートケーキを食べ、話も弾んだ。夕食後、日本からのお土産を渡すと、非常に喜んでいて。特に、ホストファミリーの名前に漢字をあて、それを筆ペンで書いたものをプレゼントすると、喜んで部屋の壁に飾ってくれた。そのほかにも、みんなでグレートショーマンを見たり、Ahanu のチェロの演奏を聴いたりして、1日目はあっという間に終わってしまった。たくさんの「はじめて」を経験した、有意義な時間となった。

Day2

陽の光を浴びて、小鳥のさえずりを聴きながら目覚めるというなんとも優雅な朝を迎えた。朝ごはんは、近くのベーグル屋さんで買い、スターバックスコーヒーに寄った。また、ドライブしながら Scarsdale の町を紹介してくれた。この町は豪邸が多く、日本の一軒家とは比べ物にならないほど大きかった。ほかにも、小学校や

高校などにも連れて行ってきて、少しではあったがアメリカのスクールライフを味わうことができた。昼食は、再び古荘・兒玉ペアと一緒にハンバーガーを作って食べた。手作りハンバーガーは食べ応えがあって、ボリューム満点だった、そしてとてもおいしかった！！



感想

スターバックスに寄った際に印象的な出来事が起こった。Elizabethが入り口ですれ違った男性と親しげに話していたのだが、後から聞くと、誰であったのか覚えていないと言っていた。私たちは、日本ではあまりありえないようなことに驚いていたが、アメリカでは普通のことであると言っていた。また、誰であっても、仲良く話すことは良好なコミュニケーションを図るうえでとても大切であると教えてくれた。日本人は外国人に比べてシャイであると思うから、この習慣は日本でも積極的に広まってほしいと思った。この二日間は私たちにとって外国の文化や生活を知ることのできた有意義な時間であった。また、日本にいる時とは違って、意欲的に何にでもチャレンジする新しい自分に出会えた二日間であったと思う。間違えることが恥ずかしいと思いがちであるが、アメリカにいる私たちは間違えることをも恐れずに、ただ相手と心を通わせたいという気持ちでいっぱいであった。これは、ホームステイで見られた大きな心の変化であったと言えよう。北九州の説明が書かれたパンフレットを見せながら紹介する場面では、身振り手振りを交えながら、観光スポットや、名物、行事について伝えることができた。また、北九州のみならず、日本全体の地理についても日本地図を描きながら説明して、大いに盛り上がった。ホストファミリーとの別れは、またすぐには会うことができないと思うととても悲しかった。短い間ではあったが、たくさんの思い出ができたために別れはより一層辛いものであった。しかし、Elizabethが最後に、「月を見れば、私たちはまたつながることができるよ」と言ってくれた。遠く離れていても、みんな同じ月を見ることで心、を通わせることができるというのだ。私たちはこの言葉を聞いて、みんな同じ空の下にいることを実感し、とても感動した。そしてハグをし、再会を誓って別れた。

大学生になったら、必ずまた Scarsdale を訪れようと思う。

7. 個人感想

○経験によって広がる可能性～土橋あゆな

「自分が興味を持っていることにチャレンジする。」この言葉は、訪れた研修先で何度も耳にした言葉だった。一見、ごく普通の言葉に感じられるが、このことが自分を大きく変えるということを再認識した。最初にこの言葉を聞いたのは日本国大使館であった。大使館の役割や、仕事内容、また現在の日米関係について公使からお話を聞き、質問コーナーへと移った。そこでは公使とは別の方が受け答えしてくださったが、大使館の質問だけでなく、人生の先輩として、様々な質問に答えてくださった。そのなかでも、「若いうちに経験した方が良いことはありますか」という質問に対して、「自分が好きだと思えるものを見つけること」と回答された。そして、積極的に周囲の人と関わって、自ら機会を作っていく必要があると続けた。私はこのことを聞いて、なるほどと思うことがあった。今まではこれがしたいと強く思う理由もなく、ただぼんやりとしか将来の夢を考えてなかった。また、テレビやインターネットで見た表面的な内容だけを取り入れて、就きたい職業を決めていたところがあった。しかし、本当にやりたいことを見つけるには圧倒的に経験が少ないことに気づいた。また、視野が狭く、わずかな選択肢しかないため、自分の可能性を広げられないでいたことにも気づけた。だから、これからは自主的に様々な活動に参加して、経験値を上げようと思った。特に、今所属しているインターアクト部での活動が役に立つだろうと感じた。この部活動ではボランティア活動を通して、子どもたちや、障害のある方、地域の人々や、ロータリークラブの方などいろんな分野でいろんな人と関わることができる。残り少ない期間ではあるが、この部活動の良さを生かして自ら可能性を広げる機会を作っていこうと思う。30分程度の短い質問コーナーではあったが、ここで私は大切なものを得ることができたと思う。

次に私がこの言葉を聞いたのは、NIH(アメリカ国立研究所)であった。文系の私は正直、研究には興味がなく、話を聞いて質問できるか不安であった。しかし、私の予想とは裏腹にとっても楽しく、興味深いものであった。研究分野の異なる10名の日本人研究者の方が集まっていたが、全員に共通していることはみな好奇心を持ち続けていることだった。大人になっても、「なぜ？」という気持ちを持ち続けて、一心に研究をされているということはとても感慨深かった。なかでも、ある研究者の方が自分の研究内容を話されているときに、ほかの研究者の方が疑問に思ったことをすぐに質問していて、そこでどんどん話題が盛り上がっていく様子は、見ていてこちらまでワクワクするものであった。また、その質問も発想力に富んだ面白い質問ばかりで、固定観念にとらわれず、考えが柔軟であると思った。「研究では、誰でも世界の先駆者になれる。」という言葉は、私が最もしびれた言葉であった。何事においても一番になるのは簡単なことではないし、誰かを追いついて一番になることはとても大変である。しかし、研究においては、まだ誰も解き明かしていない事実を見つけ出すと、その時点で世界の一番になれるというのである。その瞬間は達成感に包まれとてもわくわくするとおっしゃっていた。ここに、研究のロマンが詰まっていると感じた。私は、今、心理学や哲学に興味がある。なぜ人間が文明を築き、ほかの動物に比べて複雑な社会で生きようになったのかなど、知り

たい、学びたいと思うことはたくさんある。NIHでの医学・生物学的な研究とは異なるものの、これが、私にとっての好奇心であり、大学で詳しく学んでみたいと思うことである。このように、誰でも自分の中に持っている「好奇心」を何らかの形で追いつければそれは、大学での学びや、最終的には自分の就きたい職業につながると思う。だから私は、日常生活のなかに溢れている「なぜ？」を理屈で片付けるのではなく、身をもって考えたり、調べたりして形に変えていこうと思う。

この研修を通して思ったことは、アメリカで働く日本人の方々はみな自分の仕事にやりがいを持って働いているということだ。もちろん大変なこともあって、うまくいかないときもあるけれど、それでもなお自分の好きだと思えることを仕事にしているため難しい仕事を成し遂げられるのだと思った。また、そこでの達成感が自分の仕事に対する自信へとつながり、さらなる仕事へのモチベーションになるのだと感じた。他にも、日本に比べてアメリカの方が働きやすいと思う部分があった。それは、ステータスに関係なくみんなが平等に働けるということだ。日本ではどうしても年齢などによる上下関係が生まれてしまう。しかし、アメリカではそれが一切存在しないのだ。会社に提出する履歴書には年齢、性別を記入する必要がなく、顔写真を貼ることは全くないという。これは、アメリカという国がいかに多種多様な人を受け入れて成り立っているか、そして社会的偏見や差別が小さいかが分かるだろう。また、これらのおかげで、何歳になっても負い目を感じず、初心者でいることができるという。私はこのことを知って、自分もステータスにとらわれずに、自由な選択をして仕事をしたいと強く思った。

この生徒海外派遣研修では、旅行や語学研修では体験できないようなことがたくさん詰まっていた、本当に有意義なものであった。食事や文化面でも日本と異なることはいっぱいあり、浴槽にお湯を溜めてゆっくりとお風呂を楽しめないことは日本人の私たちにとってつらかった。また、見るからに高カロリーなアメリカの食べ物は、みるみる私を太らせた。ひとつ面白かったことは、飛行機の行きと帰りで、機内食で提供されるハーゲンダッツの大きさが異なっていたことだ。行きの飛行機では、おなかいっぱいデザートアイスも苦しいほどだったが、帰りの飛行機では、一回りサイズが大きくなっていくにもかかわらず、ぺろりとたいらげてしまった。どうやら、胃袋がアメリカサイズにシフトされてしまったようだ。写真を振り返って見ていると、日に日に顔が丸くなるのが分かるほどだ。このように、アメリカの食事、生活面でのエピソードをあげればきりが無いが、やはりこの研修での大きな収穫は、やりたいことや、興味を持っていることにチャレンジすることの重要性を学べたことだ。自分には経験が足りていないということに気づくことができたし、また、この研修も自分の可能性を広げる経験となった。たくさんの刺激を受けて、吸収したことを自分の進路に生かすだけでなく、自分の周りにはいる友人や家族にも還元していきたいと思う。

最後にこの研修で大変お世話になった、奨学会の方、引率の藤永先生、塚元先生そして海外派遣研修に携わってくださったその他多くの先生方、本当にありがとうございました。

私がこの研修に参加したいと思った主な理由は2つあります。1つ目は自分の進路の参考にしたいと思ったからです。私は、昔から何となく海外への憧れがあり、英語も好きなので、海外で働くということにとっても興味を抱いていました。しかし、具体的に何がしたいのかは、自分でもまだはっきりとはわからない状態でした。そこで、今回の研修を通して海外で活躍なさっている方々のお話を聞いて、海外でどのような仕事をされているのか、海外で働くことの魅力や大変さ、求められる人材やスキルについて知り、自分の進路を決めるきっかけにしたいと思っていました。2つ目は、実際に英語を使ってたくさん会話をしたいと思ったからです。私は昨年の夏休みに3週間アメリカにホームステイに行っていました。その時は、自分の英語に自信がなくて自分から積極的に英語を使うことができないことが多かったので、今回は率先して英語を使っていきたいと思っていました。

実際に、この研修を通じて、多くのことを学び、将来についての考え方や視野が随分と広がりました。特に私が印象に残っているのは、「交渉力」についてです。ワシントンでガイドをしてくださったヨーコさんは「交渉力はとても大切。日頃から、明るく挨拶を交わしたり、きちんと毎回 Thank you と言うことで、その人との信頼関係が生まれて、頼みごともしかり受けってもらいやすくなる。」とおっしゃっていました。また、日本国大使館でお話を伺った外交官の鈴木さんも、交渉の大切さについてお話しされていました。私はこれらのお話を聞いて、色々な人と話して、人と人、国と国とを自分自身の力でつなぐということがとてもかっこいいと思いました。

英語に関しては、昨年の夏よりは積極的に使えたかなと思います。特に、ホームステイの時には、とりあえず英語で話す、伝えようとする、ということは頑張りました。でも店員さんの話す英語が聞き取れなかったり、言いたいことがうまく言えないということもたくさんあったので、もっと英語を頑張ろうと改めて思いました。

また、今回の研修を通して多くの方と関わり、海外で活躍されている方々の行動力と芯の強さを感じた場面が多くありました。ヨーコさんと添乗員の荒金さん、懇親会に来てくださった大内田さんは高校を卒業後、海外の大学に進学されたそうで、荒金さんと大内田さんについては学校の反対を押し切って、進学されたとのことでした。私は18歳の時点でそこまで自分の意志を貫ける強さを持っていたということに感心しました。また、NIHで私たちが英会話の上達について質問した際、「ラジオやNHKの英会話をひたすら聞いてシャドーイングしていた。アメリカに來ただけじゃダメで、努力しなければいけない。あと、英語は使ってナンボ。」ということをおっしゃっていました。外交官の鈴木さんも自分の進路を決めるにあたって、いろんな大人にコンタクトを取って、話を聞いたと言ってっていました。これらの話から私は、自分の意志を強く持って、積極的に行動することの大切さを学びました。私は、昔から人からの評価を気にして、自分が思うままに行動できないことが多かったけれど、今後は周りの意見をうまく取り入れながら最終的には全て自分で決定し、自分の行動に責任を持った自立した人間になる

うと思いました。また、意志が弱く、すぐに諦めることも多かったのですが、これからは最後まで諦めず、自分に負けないように努力し続けようと思いました。

私は今回の研修を通して、本当に多くのことを学びました。自分の将来について深く考える良い機会になったとともに、少しずつ自分の将来の方向性が見えて来たような気がします。まずは、今の勉強をしっかりと、将来、世界を舞台にして活躍できる人になるために、日々精進しようと思います。

最後になりますが、7日間を共に過ごしたみんな、この研修を支えてくださった皆さん、本当にありがとうございました。



○ “好奇心”の追求～上田 遼

“私はなんで将来医師を志しているのだろう。”幼いころに医師を志して以来、ずっとこのことを考え続けてきました。そして、その問いはいつしか“私はなんのために今生きていて、生きていくのだろう。”という問いに変わっていきました。この“生きる意味”に対する問いの答えはすぐにわかるわけではありません。数学や物理学、言語学のような学問のように、1つに定まるものではありません。私は、この問題に取り組むにあたり、まずは様々な世界を体感しようと考えました。そして、生徒海外派遣研修へ参加を決めました。

今回の研修では、様々な方々の様々な話を聞き、様々な場所で様々な体験をすることができました。アリの研究を生涯かけて行っている教授、アメリカの地で政治、経済、国際関係、そして報道などの分野で活躍なさっている日本人の方々、アメリカで研究を行う日本人の方々、実際に現地で生まれ、そして住んでいる現地の方々など、多くの方々と多くの話をすることができました。そこで私は、お話しさせていただいたすべての方々が、自らのしていることに誇りを持ち、楽しんでいて感じました。とくにスミソニアン博物館群の研究施設で研究を続けている Ted さんや、NIH で研究を続けていらっしゃる日本人研究者の方々は、自らのやっていることを信じ、探求心と熱意をもって研究に取り組んでおられました。その姿を見て、何事も楽しむことがまずは大事だと考えました。

また、様々な方々の話の中で、よく出てきた言葉に“自分のやりたいこと、楽しいことを探し続ける”ということが出てきました。この言葉は、様々な考え方、立場の方がそろっておっしゃっていたことで、自身の体験からの言葉だということでした。この言葉を聞いて、私は今回の研修を通して、改めて自分の興味や関心、やりたいことについて考えました。私は物理学と工学、医学に興味を持っていて、自ら知りたいと感じるこ

とを発見する“研究”をしたいと感じました。そのため、私が本当につきたい職業は“臨床医師”ではなく“研究医”であると考えようになりました。そして幼少期からの疑問であった“私はなんで将来医師を志しているのだろう。”という問いへの一つの答えが浮かび上がりました。それは、“それが自分のやりたいことだから”というものでした。

さらに、私は今回の研修を通して、深く感じたものがあります。それは、様々なことを見たい、知りたい、体験したいという“好奇心”でした。とくに、研究施設を訪問した時に感じた、各研究内容への好奇心、海外の方々の文化、考え方に対する好奇心などは、とても強く鮮明に感じました。この好奇心を原動力として、私は今回の研修を過ごしていました。また、考えてみると、日常の生活においても好奇心は重要な役割を果たしていました。たとえば、勉強においても、問題の解き方や解答を知りたいという好奇心によって問題へと取り組んでいました。部活動、委員会活動、そして学校以外の生活でも、好奇心をもとに生きてきたと考えました。このとき、ふと“私はなんのために今生きていて、生きていくのだろう。”という問いに対する一つの答えが浮かんできました。それは、“自らの好奇心を満たすため。”というものでした。そのために私は生き続けていると感じました。思えば、現在の物理学の基本となっている微積分学を確立し、古典力学の基礎を築いたニュートン、一般相対性理論を提唱し天文学の発展に大きな貢献をしたアインシュタイン、iPS細胞を発見し、再生医療の分野において重大な功績をあげた山中教授、というように社会にとっても役に立つ事象を発見した科学者は、みな“好奇心”をもとに研究を行い、発見に成功しています。このように、自らの好奇心をもとにすることで、社会全体の利益にもつながりうるような新しい視点・発見を得ることができる私は考えました。そして、そのために私は生きていますと考えます。

人によって生きる意味とは一様ではなく、様々です。しかし、社会全体をよりよくする際に、個人の“好奇心”と“探求心”は大きな役割を果たします。私は今回の研修を通して、“好奇心”に基づき自分のやりたいことを考えながら行動することで、その人自身だけでなく社会にもいい影響をあたえようと考えました。そのために、知識を持ち、体験を重ねることは必要なこととなります。私はこれから、“好奇心”を大事にしながら学習や様々な体験をしていきたいと考えます。また、この現代において、若い世代の人々が“好奇心”を持ち、それを支援できる体制、制度があることで、より社会は発展していくと考えます。そのために、若い人々はまずは学ぶべきであり、自らの興味・関心を追求して“したいこと”を考えるべきだと私は考えました。

今回の生徒海外派遣研修では、様々な体験を通して様々なことを見て、聞いて、話して、感じて、考えることができました。この研修に参加できてとてもよかったですと思います。同時に、今回の研修で感じたこと、考えたことを、この報告書以外の様々な場面で、様々な人に還元していきたいと思っています。

最後になりましたが、この生徒海外派遣研修にご協力いただいたすべての皆さん、本当にありがとうございました。



私は、小学校の高学年くらいからずっと海外に行くこと、そして、住んだり働いたりすることに憧れていた。でも今思えば、憧れに近づくために大きな行動を起こしたことも、将来の計画や職業についてじっくり考えることもしてこなかった。もし小倉高校にきて、この研修に参加できていなかったら、きっとただの夢で終わっていたのではないかと思う。中学生のころ、同じく小倉高校を目指していた友達からこの研修のことを聞いた。そのころから海外派遣研修に参加したいと思っていた。海外派遣研修の募集がかかったとき、私はとても緊張していた。研修に参加するためには、小論文を書いて面接を受けなければならない。どうしても行きたかったので、アメリカで学びたいこと、自分が将来やりたいことについて、今までで一番一生懸命考えた。あいまいに思い描いていたことを、現実的にしていった。私は、いつまでもあいまいで真剣に考えることから逃げていた甘かった自分を本気にしてくれたこの研修にとっても感謝している。

私は、この研修でたくさんのことを経験し学んできた。その一部について書きたいと思う。まず、3月21日に訪れたスミソニアン博物館についてだ。ニコ先生のお父さんがスミソニアン博物館の研究員で、その研究室を見せていただいた。私は、研究者の方の仕事を正直なところよく知らなかった。だが、何も知らない私にもわかるくらい研究が行われている場所は圧倒的で、研究者の熱意が伝わってきた。また、自分の好きなことを極めていて、とてもかっこいいと思った。博物館は、分野によっていくつかの建物に分かれており、とても規模が大きく、展示も素晴らしく、見る人が楽しむため、より多くのことを学ぶためのたくさんの工夫がなされていた。私たちは、自然史歴史博物館、航空宇宙博物館に行ったが、本物の宝石やロケットが展示されておりとても圧倒された。次に、9.11メモリアルパーク。当時の悲惨な状況を伝えるたくさんの展示があった。何度も心が痛くなった。今までどこか他人事であったテロへの意識を変えることができた。この2つの施設を訪問して感じたことは、アメリカでは、「様々なことを学ぶ」ことに対しての関心が高いことだ。とても多くの人が、博物館や、メモリアルパークを訪れていた。そして、日本大使館、国連日本政府代表部、国連本部のツアーについてだ。世界で活躍する方々にお会いすることができ、様々なことを学ぶことができた。お話を伺った方々は、どの人も自分の仕事に責任を持ち、やりがいを感じながら仕事に向きあっていた。日本大使館では、日米関係や外交官の仕事について学んだ。お話のなかで自分の頭で考えて行動すること、何事にもチャレンジしてみることが大切だ、とおっしゃっていたのが印象に残った。私は、必要に迫られないと考えることを面倒に感じ、逃げて、人任せにしてしまいがちだ。今回、自分の頭で考え、行動していくことの大切さを改めて認識した。また、国連日本政府代表部では、お仕事の内容だけでなく、今回のアメリカ研修における多くの場面でその重要性を感じた、「交渉力」について教えていただいた。自分の要望をただ主張するだけでなく、相手の立場に立って考え、できるだけお互いが得をするように折り合いをつけていくことが重要だそうだ。国連ツアーでは、実際に世界規模で重要な会議や演説が行われていたりする場を見ることができて感動した。

最後に、ホームステイについて書きたい。私は、あまり外向的な性格ではなく、楽しみな反面、とても不安だった。ホームステイの経験をするのも初めてで、事前にメールのやりとりをするのも失礼なことを言っていないだろうか、自分が伝えたいことは伝わっているだろうか、と様々なことに悩んだ。しかし受け入れ先の方はとても暖かく私たちを迎えてくださり、とても良い経験をする事ができた。ホストマザーであるエリザベスや息子のアハヌとたくさん英語で話した。私は、足を怪我していたり、アメリカの水道水を飲めなかったり、迷惑をかけてしまうこともたくさんあった。しかし、事情を伝えると、いやな顔一つせず、教えてくれてありがとうと言ってくださり、優しさにとっても感動した。これからも、手紙やメールで連絡をとりあってこの縁を大切にしたい。

私は、この海外派遣研修を通して成長することができたと思う。また、英語の重要性も痛感した。簡単な英語でも聞き取り話せなければ、お店で注文することにも苦勞する。博物館でも、意味を理解できなければより深く学ぶことはできない。もっと英語力をつけ自分の世界を広げたいと思った。ホームステイもまた機会があればしたいと思う。不安もたくさんあったがそれ以上に楽しくて忘れられない思い出を作ることができた。もっと英語力を向上させ、世界中に友達を作りたい。そしてこの研修の中で日本の良さに気づくことができた。アメリカで町ごとの経済格差を見てまだまだ人種差別や大きな格差が残っていると感じ、日本で暮らしていると気づくことのできなかつた、日本の便利さ、自分の幸福さに気づくことができた。逆にアメリカを参考にして、日本も変えていくべきだと思うこともあった。例えば、今話題になっている外国人労働者についてだ。アメリカは人種のるつぼともいわれているが、実際にいってみて人種の多さを実感した。アメリカにも様々な問題や歴史的背景があるが、外国人と一緒に働き、生活していく一つの例として参考にし、そのやり方を取り入れてみてはどうだろうか、と感じた。これらのことを含め、私は今までにないくらいたくさんのことを体験し、様々なことを考えた。この研修を通してたくさん感動し、多くのことを吸収し、自分の視野を広げ、新たにやってみたいことも見つけることができた。そして、この研修の中で学んだこと、感じたことを忘れずに、貴重な体験として心に留め、これからの生活に活かしていきたい。私は日本出国の前に怪我をし、不安でいっぱいだったが、最高の時間を過ごすことができた。この経験は、私の一生の宝物だ。

『日本を変えたい。』私に新たな夢ができた。アメリカという未知の世界で、「本物」に触れ、日本との文化や生活の違いを直接肌で感じる、全てが刺激的な一週間だった。今回この海外派遣研修に参加した目的は、医師になるという夢を具体的なものにするべく、将来の選択肢を広げるといったものだったが、私はこの海外派遣研修を通して、今まで知らなかった自分に出会い、今までのものの見方や考え方を大きく変えさせられることとなった。

日本国大使館では、まず公使の方が、現在の日本とアメリカの関係について詳しく説明して下さった。世界との交渉に必要なことや、トランプ政権の現状など、私たちにもわかりやすいようにお話して下さったのだが、そこで、「マーケットエコノミー」、「ポリティカルコレクトネス」など、聞き慣れない単語も多く耳にした。そもそも私は、12月に行われた事前研修まで、恥ずかしながら、大使館の役割や大使館で行われていることについてほとんど知らなかったのである。公使の方がお話しされる世界情勢に関しても、知らないことが多くあった。自分の無知さを目の当たりにし、グローバル化に対応していくためには、やはり普段からニュースに関心を持ち、世界で起こっていることに積極的に目を向ける必要があると心底感じた。しかしただ知るだけではなく、それらを踏まえて、自分に何ができるのかを自分の頭で考えて実行するという、チャレンジ精神と行動力も同時に必要だと感じた。その後、公使の方の秘書の鈴木さんにお話を伺った。その中で、特に印象に残った鈴木さんの言葉がある。それは「私は日本人のために働いている。しかし、ひいてはそれが世界のためになる。」というものだ。私は今まで、世界で活躍するためには、世界に出て世界のために働くしかないと考えていたので、日本人のために働くことが世界のためにもなるという鈴木さんの言葉には非常に衝撃を受けた。自分が生まれ育った土地である日本に貢献しながら、世界にも羽ばたく。ここで1つ、選択肢が広がった。

スミソニアン博物館では、ニコ先生のお父様にアリの研究を見せていただいた。博物館で研究をしているなんて信じられないと初めは思っていたが、開館前に博物館の裏側のような場所に入らせていただき、広すぎる標本の保管室を見て、思わず圧倒された。説明がすべて英語で、専門用語などもありとても難しかったが、ニコ先生のテレビ電話での通訳のおかげもあり、大体の内容は理解することができた。耳に入る英語をなんとか理解しようと悪戦苦闘した経験は、とてもいい経験になったと思う。その中で「どうしてアリの研究者になろうと思ったのですか。」と尋ねると、ニコ先生のお父様は、「アリは単体行動でなく集団で関わりをもって行動するから面白い。」とおっしゃった。アリが大好きで研究しているのだなと思った。自分の好きなことをとことん突き詰めることができるのは、アメリカの、十分すぎるほど広い施設とその研究を受け入れる機関があってこそなのだ実感した。好きなことを仕事にし、いきいきと研究されているニコ先生のお父様は、とてもかっこよく、輝いて見えた。私もあんな風になりたい、と思った。

研修3日目にはNIHを訪問した。高校二年時に参加した東京訪問で、東京大学の研究室で行われている日本の最先端の研究に触れさせて頂く機会があったので、これが世界の最先端となるとどれほどのものなのか、アメリカと日本の研究の違いはどこにあるのかなどが非常に気になっていた。そのため、実はNIHは、今回の研修先の中で最も興味のある研修先の一つだった。NIHの訪問を終えて、まず一番に思ったこと。それは、「日本を変えたい。」をいうことだった。NIHを切り口に日本を客観視し、アメリカと比較することで、日本の強みだけでなく、日本が抱える現状や課題を知ることができた。やはり私は将来、日本人として日本を変えていきたい。最も印象に残っているのは、研究者の方々の研究内容の紹介である。私のもつ「研究」のイメージといえば、科学的なことに限定されたかなり堅苦しいものであったが、NIHに来て、癌やアルコール依存症、薬剤の研究をはじめ、カエルの研究や、睡眠中に見ている夢の内容を推測する研究など、自らのしている研究について、いきいきと熱意を込めて語る日本人研究者の方々を見て、こういう形の研究もあるのだと知り、研究に対するイメージが明るいものになった。その中で、研究者の方の一人が、「初めは日本で臨床医をしていたが、そのうち病気の根本となるメカニズムが気になり始め、研究者になった。」とおっしゃった。そのとき私の中に、臨床も研究も両方するという選択肢が生まれた。臨床医として働く中で疑問に思ったこと、気になったことを、次は研究者になって、研究者の立場から突き詰めていき、具体的な研究内容や得られた成果をより多くの人に広め、知ってもらう。行われている研究についてまず知ってもらうことこそが、基礎研究の重要性を認識してもらうための第一歩だと考えられるからだ。ただ漠然としていた「医師になりたい」という夢が明確なものになった。

この7日間の研修を通して、アメリカという国の素晴らしさを実感したと同時に、日本の良さも改めてよく分かった。飲食店でのサービスやレジの会計など、至る所で日本人のさりげない気配りや優しさへのありがたみを感じた。日本を出て分かったことは、「私は日本が好きだ。」ということである。生まれ育った土地である日本を、今後の未来を担う世代の一人として、今回学んだことを糧にグローバル化に立ち向かっていけるような多様性のある世の中へと築きあげていきたい。「日本を変える」ことこそが、かなり壮大ではあるが、私の本当にしたいことであり、高校生のうちからこのような貴重な経験をさせていただいた私の使命なのだと気づかされた。

そして今回なにより、小倉高校という存在の大きさに心を打たれた。この研修の資金のほとんどをまかなってくださったOBの方々の小倉高校への深い思い入れを感じ、また、懇親会では、海外で活躍していらっしゃる小倉高校の先輩方がこれほど多くいるのかと感銘を受けた。私は小倉高校の一員としての責任と誇りを感じ、今回の研修で得たことを糧に、「医師になって日本を変える」という夢に近づけるよう、日々精進していきたい。

最後になりましたが、今回の海外派遣研修を国内外様々な形で支援してくださった皆様、本当にありがとうございました。

私が海外派遣研修のことを知ったのは、学校開放説明会のときだ。海外に行くことに昔から憧れがあった私は、小倉高校に入学できたらこの研修に参加できたらいいなとひそかに思っていた。そして入学し、文化祭のポスター発表を見たときに、先輩方の感想や訪問先での学びを知り、ただ海外に行きたいというぼんやりとした憧れがアメリカで学び自分を成長させたいという強い思いに変わった。また、高校生になり、授業や課題研究の時間に世界の国際問題について触れる機会が増えたことで、問題を解決するために必要なことを国連などの訪問を通して学びたいと思うようになり、この研修に応募した。小論文と面接を受けた後、合格者の発表で自分の名前が呼ばれたときは、嬉しすぎて涙が溢れた。それと同時に、もっとアメリカのことや訪問先のことを勉強しなくては、と思った。事前研修を受けている中で、この研修での私の目標が見つかった。それは、「失敗を恐れずに挑戦し続けること」だ。英語を話すことも訪問先の方に質問することも、積極的にしてみようと心に決めた。

あっという間に月日は流れ、気づいたら日本から飛び立つ日だった。この研修で最も不安なことは、実は時差ボケだった。アメリカではたくさんのことを吸収したいと思っていたので、研修中に睡魔と闘いたくないと思っていたのだ。だから成田空港では、アメリカに出発するわくわく感と同じくらい、機内でしっかり眠れますように、と願っていた。前日の睡眠時間は3時間だからきっと眠くなるはず、と思っていたが、実際はほとんど眠れなかった。2時間くらいで起きてしまって、もう一回寝ようとクラシックを聴いたり羊を数えたりしてみたが眠りにつけず、いつの間にかアメリカに到着してしまった。そのせいで、のちに時差ボケで苦しむことになるが、それは触れないことにしよう。長いフライトを終え、ワシントンDCに着き一步空港から出ると、まさしくそこはアメリカだった。広い茶色の道路に大きな貸し切りバス、風になびくアメリカの国旗…。ハリウッド映画に出てきそうな景色が広がっていた。ここから私の充実した7日間が始まった。

学んだことや感じたことはたくさんあるが、全部は書ききれないので、特に心に残った3つのことを書こうと思う。

1つ目は、たくさんのかっこいい大人の方に出会えたことだ。アメリカで働いているというだけでもかっこいいが、皆さん志が高く自分の仕事に誇りを持っているところがとても素敵だった。訪問先でお話を聞いている中で驚いたのは、全員が口をそろえて「自分の好きなことを仕事にするべきだ。」とおっしゃっていたことだ。新しいことがいっぱい楽しそうだから研究職に就いた人、政治や歴史が好きだと気づいて外務省を目指した人、マスメディアに興味がありNHKに入社を決めた人など、今の仕事に就くまでの経緯は様々だったが、根本的なものは好きなことを仕事にしていることだった。私も将来、自分の好きなことを見つけて仕事をしたいと思った。また、NIHで研究されている方がおっしゃっていた「将来のことは迷っていい」という言葉も印象に残っている。今までの私は、早く目指す職業を決めそれに合った大学を選ばなければならない、という気持ちがどこかにあった。アメリカの出発前になって、将来したいことや好きなこと

が分からなくなってしまう、少し焦っていた自分もいた。しかしこの言葉を聞き、寄り道しながら間違えながらも最後に満足のいく進路をたどれたらいいと思うようになり、心が軽くなった。これから勉強をしていく中で、またたくさんの人と出会い様々な価値観を知る中で、自分が一生追求できるような好きなことを見つけていきたい。

2つ目は、アメリカ人の温かさだ。アメリカではいろんな場面で現地の方の温かさに触れることができた。まず、ホテルのシャトルバスの運転手さんの優しさが心に残っている。勤務時間外だったにも関わらず、ガイドのようこそさんのお願いにより駅まで迎えにきてくださった。さらに、バスを降りるときには手を差し出しエスコートしてくださった。「Thank you.」と言うと、笑顔で「You're welcome.」と答えてくださったのもとても嬉しかった。また、もう一つ特に心に残った出来事がある。それはホームステイ中にホストファミリーと一緒に買い物に行ったときのことだ。ある雑貨屋で店員さんから「Where are you from?」と聞かれ「Japan」と答えると、笑顔で「Enjoy your stay.」と言ってくださった。日本では店員さんと話をする機会があまりないので、挨拶やちょっとした会話ができただけが楽しかった。

3つ目は、英語の難しさだ。出発前は、自分の英語が伝わるかが不安だったが、アメリカに行ってみると、現地の方の英語を理解することのほうが難しかった。まず、入国審査のときにそのことを実感した。入国審査官の英語は、普段リスニングテストで聞く英語よりはるかに速く、何回も聞き返した。そのときは本当に入国できるか不安だったが、「No ramen?」というジョークも交えてくださった優しい入国審査官のおかげで、なんとか入国できた。また、ホストファミリーの子どもの会話についていくのが一番大変だった。話すスピードはもちろん速く、たまに分からない単語も出てきた。何回「Please speak slowly.」と言っただろう。そんな私に子どもたちは、嫌な顔をせずゆっくり話してくれたのは嬉しかった。今回の研修で英語の難しさを感じるとともに、自分の英語が伝わったときの嬉しさや学校で習った単語や文法がいかに役立つかを実感できた。だから、受験のためだけでなく、これからグローバル社会の中で生きていくためにも英語をもっと勉強したい。

この研修で、たくさんのことを学び、自分自身成長することができた。英語を恥ずかしがらずに話せるようになった点、訪問先で毎回質問ができた点などで、「失敗を恐れず挑戦する」という目標はまあまあ達成できたと思う。もちろん失敗もしたけれど、勇気を出したことで得られたものの方が多かった。これからの学校生活の中でも、いろいろなことに挑戦しもっと成長した自分になってから、またいつかアメリカに行きたいと思う。

最後になりましたが、この研修に携わっていただいた全ての方に感謝申し上げます。このような貴重な体験をさせてくださり、本当にありがとうございました。

本来ならばここで海外派遣の訪問先を一つ一つ振り返り、「楽しかった」「印象に残った」などと書き連ねるのが常道なのだと思う。現に今、私の手元にはそのような感想を書き連ねた2000字程度のプロット用紙があり、つい30分前にはそれをつまらなさそうな顔でパソコンに打ち込んでいた。だがそのデータを消し、私はまとまりのつかない考えを抱えたままパソコンに向かって座っている。何故か。

10月ごろのことだと思う。「本研修は語学研修でなく、OBの方々から海外での経験などを伺うためのものだ」。そう事前研修の教職員挨拶で木本先生がおっしゃった。英会話に不安を抱えながらも研修への期待に胸を膨らませていた私にとって、当時その言葉は不思議に聞こえた。しかし今、ふとこの言葉が私の頭をよぎったとき何故かその意味が分かるような気がしたのだ。

もちろん研修で学んだことは多い。本研修で訪れた場所はどれも素晴らしいものであったし、出会った方から伺った話もためになるものばかりだった(海外でビジネスを立ち上げたときの話、海外での就職活動、大学生活等々)。だが記憶はいつか消える。アメリカで見聞きしたことは、研修のみずみずしい記憶はやがて多忙な生活の中で消えはせずとも色あせていく。だから話を聞き共感するだけでは不十分だと思ったし、自分にどう還元するか、これを見出さずに感想をただ記すのでは研修に行った意味はないと思った。これは「語学研修」ではない。これはOBなど現地の方の話を聞いて「自分自身を、そして将来を見つめる」ための研修なのだと思かにも今更ながら気づいた。先の問いの答えはこれである。なのでここでは訪問先で聞いた話や見聞きしたことを通して、また私はどう変わるべきなのか、どう変わったのか考えてみようと思った。

まず、今回の研修を通して私が痛感したのは自分の未熟さと甘さだった。別に英語力について述べているわけではない。先述した通りこれは「語学研修」ではないのだから。そもそも技術革新が進む今の世の中で言語の差など大した障害にはなりえない。私が最も痛感したのは自らの理想とする姿と自分の今の姿、その溝の深さであった。それは学力的なものでもあり人間的なものでもある。どちらにしろ、これは技術革新など関係ない。私を取り巻く環境がどう変わろうと、そこで問われているのは私がどう変わるのかだからだ。特にTed氏の研究所見学では生物研究のレベルの高さに驚くとともに、自分の生物の勉強不足を思い知らされた。そして小倉高校という狭い世界の中で安心感を得ていた自分が恥ずかしくなった。私が変わろうが変わるまいが、センター試験は来るし二次試験だって待ってくれない。早急に変わらねば。世界から見たら私は劣っているのだ、未熟なのだ気づくことができた。

次に、これは主に国連本部で思ったことだが世界のために働くことの大変さを知ることができた。私は将来、WHOで世界の医療格差の是正についてかかわりたいと考えている。しかし初めて訪れる国連では、国連の輝かしい功績というよりもむしろ国連の限界のようなものを感じた。例えば核軍縮。例えば紛争の調停。例を挙げればきりが無い。今までの私は「世界のために働く」といった、国連の職の持つ名誉的な言葉尻のみに自らが引かれていたのだということを理解した。そして、本当に私はWHOで働きたいのか

考え直すことができた。とどのつまり、私に WHO で働く覚悟はあるのかということだ。私は今でも WHO で働くことを夢見続けている。理由は前抱いていたようなキラキラとした憧れだけでない。無力だとしても何かしたい、国連で見聞きしたことを通してそう思えるようになった。

そして今私は3年生になった。相も変わらずパツとしないテストの点とたまにある忘れ物。わたしはまだ完全には変わっていないらしい。早急に変わりたい、変わらねば。パソコンに向かっている今、再びそう思った。今回は私の初めての海外渡航であった。次に海外の土を踏む日にはもう少し学力的にも、人間的にも大きくなってほしい。そう心に思いこれからの高校生活を歩んでいきたい。

最後になりますが、本研修にあたりまして多大なるご支援賜りました同窓会の皆様にお礼申し上げます。また事前研修の際にご指導いただきました小島俊彦様、中島先生や木本先生をはじめとした教職員の皆様、サポートしていただきました荒金さんをはじめとする JTB の皆様、現地引率の藤永先生と塚元先生、ガイドのヨーコさんと木下さん、本研修にかかわった全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

○挑戦することの大切さ～兒玉美智子

この海外派遣研修は私にとって初めての海外で、出発まであともう少しだという時に私には少なからず不安があった。テレビや映画でしか見たことのない世界を自分の目で見て、肌で感じることにもちろん胸を躍らせていたが、何しろ経験もなければ英語がペラペラに話すことができる状態でないのに大丈夫だろうか、ちゃんと生きて帰ることができるだろうか、大げさかもしれないが初めてのことにはそういう気持ちがつきものだと思う。私個人の目的としては海外で活躍なさっている OB, OG の方との交流を通して視野を広げるといったことだった。私には医者になって日本だけでなく世界中の人を助けるという夢がある。グローバル化が進む今、日本の病院でも外国人を見ることは少なくない。アメリカは「人種のサラダボール」といわれるほど様々な言語、習慣、考えを持つ人がおり、日本では学べないようなことも学べる環境が整っている国だと私は思う。今回の研修で病院などの医療現場に立ち寄ることはなかったが、人の違いは空港に着いた時点で感じられた。飛び交うことばも英語だけではなく、聞いたこともないような言語で話す人もいて、当たり前なことだが衝撃を受けた。何もかもが新たな発見で私の新たな引き出しが増えていった。

私が一番印象に残っているのは OB, OG との懇親会である。私は大内田さんという OG の隣の席に座っていたのだが、大内田さんは大学からアメリカに来たそうだ。日本の大学を卒業してからではなく、高校を卒業してからアメリカに来たと聞き、その行動力と勇気に衝撃を受けた。アメリカの大学に通うために必要なこと、アメリカの学校と日本の学校の違いも教えてくださった。また、少しアメリカの医療事情について教えていただいた。今、アメリカでは赤ちゃんの性別や双子かそうでないかなどを選ぶことができるそうだ。日本では命に手を加えることに対して批判的な意見が多いが、アメリカでは赤ちゃんを自分の好きなように生み出すことが許されていることに日本との考え方の違

いを見た。アメリカの医療についてはNIHでも聞くことができた。NIHの研究者によると、日本は朝早くから作業を始めたり、徹夜をしたりすることも少なくないが、アメリカでは滅多にそういうことはないという。また、日本はニーズにあった研究をする傾向があるが、アメリカは新しい発見について研究をする傾向があるようだ。逆に日本との共通点もあり、例えば、全体的に女性の医療従事者、特に医者が少ないことや、結果を出さなければならないがそればかりを求めてはだめだということが挙げられる。両国とも良いところも改善すべきところもあり、面白いなと思った。日本にいる間は外からの意見や比較対象も情報もなかったため気づかなかったことも多くあることに気づかされた。私は医者を目指す者として知らなければならないことがまだまだたくさんあるということ、また、もっと世界に目を向けて様々なことに興味を持たなければならないなと思った。NIHの研究者の方の中の話で一番興味を持ったのは、今夢を判断できる機械があるということだ。その機械を使うと、まだ具体的に誰がどこで、どんなことをしているのかを見ることはできないが、いい夢か悪い夢かなど、ざっくりとしたカテゴリーは判断できるという。その機械が研究され続けられれば夢を映像化することも夢ではなくなるかもしれないと期待が膨らんだ。集まってくださった研究員の方は皆さん研究されていることも違ってとても興味深い話をきくことができた。

この研修では様々な場所を見学させてもらったが、セキュリティが日本の何倍も厳重であったことも衝撃を受けたことの一つである。どの施設を訪れた時も荷物をX線に通したり、空港で通るようなゲートを何回も通った。私のイメージでは日本はよほど重大な施設でない限りそこまではしないので驚いた。日本のセキュリティは日本が他国と比べて安全であるために成り立っているのだとここでも日本の良さを感じた。

アメリカで一番苦労したのはやはり英語を話すということだった。私は英語を話すこと(speakではなくtalk)に苦手意識を持っていて、ホームステイの時もたまにペアの古荘さんの力を借りながらなんとか話していた。確かに学校では教科書や問題集の長文を読む練習をしているが、日常会話で使えるフレーズや、瞬間的な回答にはあまり慣れておらず、大変だった。それでもscrambleという英語表現で使っている教材の中の熟語が多く使われていて、「あっ、今のscrambleにあったくない？」と友達とワイワイ話していた。私たちが大人になって社会に飛び出す頃にはもっとグローバル化が進んでいて、英語を求められるだろう。それまでにはネイティブほど話すことができなくてもそれに近い状態にまでもっていきたいと思う。海外派遣研修はわずか一週間という短い間だったが中身がとても濃く、私に新たな視点を教えてくれた。もし私がこの海外派遣研修に挑戦していなかったら今の私にはなっていないであろう。

最後になりましたが、この研修で私たち小倉高校生を受け入れてくださった皆さん、計画を立ててくださった先生方、JTBの方、そして私をこのすばらしい海外派遣研修に参加させてくれたお父さん、お母さんに感謝します。本当にありがとうございました。

○すべてがかげがえのない経験～古庄 桜

私の周りには、将来の夢がはっきり決まっいて、それに向かって努力をしている仲間がたくさんいる。それに比べて私は、特に好きなことや得意なこともなく、医師になりたいという夢も漠然としていて、そのための努力もできていなかった。将来の進路を尋ねられても、「考え中なの」と言い訳のように言っていた。進路に限らず、「好きかどうか」ではなく、「自分にできるかどうか」で判断をし、選択肢を自分で狭めていた。そのことに自分で気づいてはいたが、性格だからどうしようもできず、苦しく感じていた。ただそんな私でも胸を張って好きだといえたことは、「外国人とコミュニケーションをとるのが好き」ということだ。小中学生の時、父の仕事の関係で、ドイツとシンガポールに住んでいた経験がある。日本人学校に通っていたから、ドイツ語も英語もペラペラに話せるようにはならなかったけれど、現地の人との交流では、自分が一人の日本人として見られる感覚が新鮮で、他の国の文化に触れることが好きで、つたない英語でも話が通じたときは心から嬉しかった。しかし日本に帰ってくるとそんな機会はなくなり、忙しい毎日の中でそうした経験を思い出すことも少なくなっていた。でも変わらず英語は好きだったし、医療の進路に進もうと考えていても、心のどこかで「海外で働きたい」と思っていた。だからこの研修を知ったとき、海外にいるあの感覚を思い出したい、これまで勉強してきた英語を使ってみたい、そして様々な人の話を聞いて自分を変えるヒントをもらいたいと思い、応募することにしたのだった。

この研修を通して私が学んだことは、主に二つある。一つ目は、英語はツール＝道具であるということだ。現地で出会った日本人の皆さんは、研究者、外交官、記者など様々な職業で、英語を使いそれぞれの分野を追求されていた。私は今までただ漠然と、英語が好きだから上手になりたい、英語を使った仕事をしてみたいと思っていたが、大事なものはその英語を使って何をするかなのだと思う。英語が話せる人は世界中にたくさんいる。「英語が上手になること」を目標にするよりも、どの分野でどう使うかを考えなくてはいけないと思った。そして英語は、道具であるから磨き上げて使いこなす必要がある。自分の英語力を上達させることで、自分の可能性が広がっていく。学校で習う英語は実際のコミュニケーションではあまり役立たないのではないかと考えていたが、そんなことは全くなかった。行きの飛行機で観た映画でも、地下鉄の中の広告でも、英単語で習った単語を多く見かけた。学校で習う英語も今後の自分の財産になると確信できたので、成績のためだけでなく実生活で英語を使ういつかのために、これまで以上に英語の勉強を頑張ろうと思った。

学んだことの二つ目は、「好きなことを追求する」とことと、「人生はどうなるかわからない」、言い換えると、「人生はどうにでもなる」ということだ。それを身を以て証明しているNIHの方々の口からその言葉を直接聞いたのはとても大きかった。NIHの研究者の皆さんは、年齢も、研究している分野も、それまでのキャリアも本当に様々だったので驚いた。日本の大学で医学部を出て研修を終え、そしてアメリカでも再び研修をして資格を取ったという方や、薬学部にはいつから研究に興味を持って精神系の研究を行っている方、工学部出身で脳・神経科学の研究を行っている方、カエルの研究を医学と結び付けて研究を行っている方など。お一人お一人の経験談や価値観のお話を

聞くのは興味深かった。皆さんに共通していたのは、NIHに来たのは前から決めていたことではなく、いろいろなキャリアを経てきた結果であり、そしてこれからのキャリアにおいてはその通過点に過ぎないということだと思う。「好きなものを追求するのがいいよ」と、日本国大使館の鈴木さんと同じことを偶然研究者の皆さんもおっしゃっていたのだが、まさに皆さんは好きなことや興味のあることを突き詰めてきたからこそ、NIHで活躍されているのだろうと感じた。会の終了後、研究者の方々に私が進路で迷っていることを話すと、「あまり考えすぎなくてもいいんじゃない？」という風に声をかけてくださった。その言葉にとっても救われた。すべてが思い通りに行くことはないのだから、その時の気持ちを大切に挑戦してみよう、頑張っていこうと思えた。NIHの研究者の皆さんとの出会いが、とても良い刺激になった。

英語はツールであること。好きなことを追求すること。人生はどうなるか分からない、どうにでもなるということ。これらを新たに吸収した私は、目標を立て直すことにしようと思う。そして出来るかどうかはさておき、ここに宣言してしまおうと思う。それは、医者になって自分の努力を人のために生かせるようになって、その経験を生かしていずれは海外で働くということだ。脈絡のない欲張りな夢だが、今の気持ちはその二つだ。でもまだ建築士や国際支援など他の仕事にも興味はあるから、その興味は捨てずに大事に持っておこう。自分の「好き」アンテナを常に張って生きていこうと思う。

「世界の政治・経済・文化の中心地域の動向を直接見聞きするとともに、国際的に活躍する本校卒業生との交流を通じて、将来世界に羽ばたき、国際社会のリーダーとなる力を持った倉高生の育成を図る。」という本研修の目的を今、かみしめている。この研修では、素晴らしい方々との出会いがあり、想像をはるかに超える多くの体験をして、私の中で新たな発見がたくさんあった。さらにこうして研修の振り返りを通して、今の自分の思いに向き合い、自分の人生について考えることが出来た。これこそがこの研修の、私の一番の成果だ。

最後になりますが、今回の研修で私は本当にたくさんを経験し、学ぶことが出来ました。支援してくださった方々、送り出してくれたお父さんお母さん、事前準備をしてくださった先生方、引率してくださった藤永先生と塚元先生、添乗員さん、ガイドさん、アメリカで出会った皆さん、そして一緒に思い出をつくれた派遣団のみんなに感謝を伝えたいです。本当にありがとうございました。

私が生徒海外派遣研修について初めて知ったのは、小倉高校の推薦入試に合格するべく、小倉高校について、インターネットで調べている時だった。そのことを知り、私は小倉高校に入学し、生徒海外派遣研修に参加したいと強く思った。

私は、中学三年生の夏に、少年少女国連大使になり、アメリカの国連本部や国際連合日本政府代表部などで講義を受けた。私はそのころ、まだ国際問題や貧困問題についてよくわかっていなかったもので、講義を聞くことで精一杯だった。そして、英語での講義の時には、話を聞きながら自分の考えをまとめることもできなかった。未熟さを指摘されて涙したこともあったが、その悔しさが、次はもっと成長して研修を受けたいという思いにつながり、生徒海外派遣研修に参加したいという気持ちを大きくした。中学三年生のころよりも、小倉高校でたくさんのことを学び、成長した自分の視点でもう一度アメリカで学びたいと思った。

念願かなって、私は生徒海外派遣研修生となることができた。私が今回の研修で学びたいと思ったことは、3つある。

1つ目は将来海外で働くためにはどのようなスキルが求められるのかを知ることだった。私は今回の研修で、大切なことは「交渉をすること」であるということを知った。相手の状況を踏まえたうえで自分の意見を言えるようになりたい。そのために、日常会話レベルの英語ではなく、スムーズに交渉をすることができるレベルの英語を話せるようになりたい。

2つ目はアメリカと日本には、どのような違いがあるかを知ることだ。私は、ホームステイ期間中に、とても驚いたことがあった。ホームステイ先の子と話していた時、彼女は、学校のアルバムを持ってきた。私が「これは卒業アルバム？」と尋ねると、「いいえ、学校で毎年配布されるものよ。」と言って、そのアルバムを見せてくれた。載っていたのは、名前と顔写真だけではなく、親からのメッセージや、ベスト〇〇といった項目もあった。また、先生の写真も載っていたのだが、日本の学校よりもとても多くの先生がいた。

実際に、ホームステイ先の子が通っている高校にも連れて行ってもらった。「小さな学校なのよ。」と聞かされていたのだが、そこは、テニスコートが8面、そのほかにもサッカー、アメフト、陸上などのフィールドがそれぞれあるという広大な敷地をもつ学校だった。しかもそこは、私立ではなく公立の高校なのだ。

日本は狭いので、このような敷地面積を確保することは困難だと思われるが、子どもの教育にかける国の予算がアメリカと比べて少ないのではないかと思った。

後で調べたことだが、アメリカでの義務教育は幼稚園から高校までの13年間あり、子どもはその地域の学校に通うため、受験がなく、塾に通うという文化がない。しかし、日本は幼稚園にいくかどうかは各家庭の判断によるし、小学校と中学校のみが義務教育で、高校に入学するには受験が必要である。この制度では、家庭の事情により、十分な教育を受けることができない子も出てくる。アメリカのように、義務教育期間を長くすれば、少なくとも現在の日本の教育システムよりも、家庭環境の差による教育の格差が

小さくなるだろう。だからこそ、日本は子どもの教育に対する投資をするべきだ。子どもへの投資は、日本の未来への投資でもあるのだから。

3つ目は、国際連合を再訪することだった。前回国連大使としてアメリカに行った時から今回アメリカを再訪するときまでに、私にはいったい何ができたのだろうか、振り返るいい機会となった。

母校での啓発活動やタウンミーティングでの発表を行ったり、「金融と経済を考える高校生小論文コンクール」で、今まで学んできたことを踏まえ、労働者つまり生産者が雇用者から不当に搾取されるのを防ぐことができるような経済システムを構築したいと書いた。また、北九州市とJICAの主催する、ベトナムでの上下水道ユース研修にも参加し、発展途上国の上下水道事情について学んだ。教育の格差是正をしたいと思い、出身中学校に協力していただき、中学生たちが自由に使えるように、卒業生たちから集めた問題集などを置かせてもらう活動をしている。

しかし、このように振り返ってみると、もっといろいろなアクションを起こすことができたのではないかと感じる。私は今回の研修に参加することができたおかげで、これまでの学びや活動について反省をする機会を得ることができたと思う。これは私にとって、これまでの自分を省みるとてもいい契機となった。

私は、「もっとこうなれば社会はよくなるだろう。」と考えてきた。しかし、頭の中でそう思うだけでなく、「私を変えよう」、「私がシステムを作ろう」というように、もっと主体的に具体的に行動を起こせるようになりたい。そのために、今回の研修で改めて大切さを知った、交渉力や英語力、行動力を習得し、これからの社会に貢献できるようになりたいと思っている。

9. 引率教師感想

○第7回海外派遣研修を終えて～塚元博子

この海外派遣研修の第一のねらいは、「世界で活躍する日本人と交流し、自身の将来に対する考えを深める」ことである。一週間という短い期間ではあるが、政治・経済の中心地であり、世界の文化の発信地でもあるアメリカに渡り、各分野において活躍されている日本人の方々を訪問したことは、他には代えがたい貴重な体験になったと確信している。普段日本で生活をしている私たちがアメリカでの生活に適応していけるか、出発前は不安に思うこともあったが、それも杞憂であった。実際に行ってみると、インターネットで知ることができるアメリカの姿とは違った、リアルなアメリカの様子を肌で感じ、毎日が驚きと興奮の連続だった。各訪問先の方々も暖かく迎え入れてくれ、有意義な時間を過ごすことができた。

日本大使館、NIH、NHK アメリカ総局や国連を訪問して日本人の方々の話を聞き、質問することを通して、生徒たちは様々な知識を吸収し、刺激を受けたようだった。また、スミソニアン博物館で本校 ALT のニコ先生のお父様のレクチャーを受けることができたのも貴重な経験となった。現地でお話を伺った方々に共通していたのは、自分の取り組んでいることに対してプロの誇りと熱い思いを持ち、生き生きと仕事や研究に向かっていることだった。それは本校の卒業生の方々にも当てはまっていて、ニューヨークでのOB、OGとの食事会では様々な経歴を持つ様々な年齢層の方々からたくさんのお話を伺うことができた。その姿勢から、自分の好奇心に従うことの大切さ、好きなことを追求することの素晴らしさを研修生たちも学び取ったことだろう。

また、当たり前のように、研修生とのやり取りを通して、彼らのものの見方や将来描いているビジョンが一人ひとり違っているということにも気づいた。自身の将来像を既にはっきりとイメージしている生徒もいれば、やりたいことがまだ見つからない生徒もいる。また、自分の興味関心の分野に関しては、人一倍積極性を発揮する生徒もいた。今回の研修は、学級担任未経験の私にとっては、普段の学校生活では見られない彼らの個性に触れられる良い機会であった。これからも彼らの進路選択を陰ながら支え、見守っていきたいと思う。

研修期間中大きなトラブルがなかったことは本当にありがたいことだった。それも現地の訪問先でお世話になった方々の心遣いと、添乗員さんや現地のガイドさんが旅の成功に尽力してくださったおかげだろうと思う。生徒たちもハードなスケジュールの中よく頑張っていたと思う。

最後に、今回の海外研修のために多大なるご支援をくださった小倉高校奨学会、明陵同窓会、事前研修の企画や検討会、現地の方々との細かい打ち合わせ等をしてくださった小倉高校国際交流委員会の先生方、また現地の訪問先で真摯に対応して下さった方々に、心より感謝を申し上げます。小倉高校 72 期の研修生たちが、今回の体験に感謝するとともに、本研修を通して学び取ったことをこれからの実生活や進路選択に役立てることによって、この御恩に報いることを切に願っています。

○生徒海外派遣研修引率を終えて～藤永容子

今回の研修にあたって、事前学習としてアメリカの慣習や英語のレッスンをしていたOBの小島俊彦様、英語による北九州市の紹介、現地でのコミュニケーションなどについて他校のALTも招いてレッスンをさせていただいた本校ALTのニコ先生にお礼申し上げます。また、10名の生徒の研修を快くお引き受けいただいた訪問先の皆様、現地でお世話になった添乗員さん、ガイドさんをはじめとするすべての方々、小倉高校奨学会、明陵同窓会、本校国際交流委員会の先生方に感謝申し上げます。

小倉高校の海外派遣の特長を一言で挙げると、小倉高校の110年の歴史に基づく独自プログラムがあることでしょう。先輩方が世界でご活躍されて来られた財産をもとに、日本大使館や国連日本政府代表部、NIH、NHKアメリカ総局などを訪問し、貴重なお時間をいただいております。さらに、アメリカで働くOBとの懇親会などが用意されていました。地球上の情報が一瞬で手に入る時代ではありますが、実際に現地に行き、現地の人のお話を聞くという機会を感受性の豊かな10代のうちに持つことができたのは、非常に大きな意味を持っていると思います。人を変えるのはやはり人、熱い思いやその思いが現れた言葉、行動だと考えるからです。

日本大使館の鈴木氏からは、大学時代に様々な分野で活躍している社会人の方と実際に会って話をしたり、本を読んだりしながら自分の頭で考え続けたことが、将来の目標を突き詰めるのに役立ったと伺いました。その話には生徒も感銘を受けているようでした。

NIHの日本人研究員からは、ご自身の研究分野を熱心に説明していただき、興味をひかれました。特に他の研究者の研究内容について矢継ぎ早に質問が起こるといった状況を拝見し、こちらもその知的好奇心の強さにエキサイトしました。さらに、研究のあり方の違いだけでなく、生活、慣習、価値観、大学、男女差など、様々な視点から日本とアメリカの違いについて本音を伺うことができました。その中には日本社会が現在抱える閉塞的な状況についての厳しいご指摘も含まれていました。しかし、このような率直なお話を聞くことができたのも、研究者の先生方が、生徒に真摯に向き合ってくださいました証だと思います。そんな中で私が一番印象に残ったのは、日本社会の課題を聞いた10名のうちの一人の女子生徒の、「でも、私はそんな日本から出て行くのではなく、そんな日本を変えたいです。」という一言でした。現在の課題に真摯に向き合い、そこから逃げ出すのではなく、向かい合おうとするその姿勢に私は深く感動し、未来を託せる若者が今育ちつつあるのだと強く感じました。

このように、生徒は現地を訪れ、熱い思いを持った方々から、直接話を伺い、自分の頭で考え、自己の将来を模索するためのヒントや刺激を得ることができました。また、日本や自分を客観的に見つめ直す契機となっていました。この研修を糧として、世界全体の持続可能な発展を視野にそれぞれの専門分野で今後活躍をしてくれるものと期待しています。今後も海外派遣研修が様々な方のご支援により続いていくことを願います。

10. 謝辞

まず初めに、第7回生徒海外派遣研修の準備期間におかれ、多くの場面で我々を激励してくださった早野祐子前校長先生をはじめ、研修費用に多くの支援をしてくださった奨学会、明陵同窓会の方々、5日目の夜にお忙しい中お集まりいただき、それぞれの豊かな人生経験を話してくださった小倉高校OB・OGの皆様、各方面で世界を舞台に働いておられ、私たちの夢に理想像や具体性を持たせてくださった訪問先の方々、ワシントンでの研修の際、私たちに気さくに話しかけて楽しく賑やかな3日間にしてくださったヨーコさん、ニューヨークでの研修の際、豊かな教養でわかりやすく色々なものを説明してくださった木下さん、的確な指示で私たちの旅を安心して過ごせるものにしてくださった添乗員の荒金さん、事前の研修説明で不備のないよう、細やかに手配をしてくださったJTBの折居さん、昨年の経験から、私たちに多くの助言をしてくださった第6回生徒海外派遣研修生の先輩方、引率として常に私たちをまとめてくださった藤永先生と塚元先生、事前学習の際に多くの場面で関わってくださった学年の先生方、英語面でのサポートを手厚くしてくださったニコ先生、そして私たちの可能性に投資してくれた家族など、多くの方々に感謝申し上げます。

研修生のほとんどがアメリカへ行くのは初めてで、1週間という短い期間でしたが、私たちは多くのことを吸収できたと思います。多くの訪問先、OB・OGの方々との懇親会を通して、世界を股にかけて働いていらっしゃるの方々にお会いし、私たちは、グローバル化が進むこの世界で求められる人材やスキルについて学ぶことができました。今後、ますます日本と海外の連携が増えていくと思われませんが、その中で私たちは各分野で日本と海外をつなぐ架け橋のような人材になれるよう、まずは自分たちの進路実現に向けて頑張っていこうと改めて思いました。

また、アメリカに行ったことで日本という国の規模の小ささや、逆に日本特有のよさに気づくことができました。それを踏まえた上で、私たちはこれからの日本を背負っていく立場として、日本は海外諸国と友好的な関係を築くために何をすべきなのか、また私たちにできることは何なのかということについて真剣に考えていく必要があると感じました。

先程も述べたようにこの研修は多くの方々のご理解とご協力があつてなされたものです。世界各地に様々な分野の優秀な人材を輩出し、また世界の第一線でご活躍されている方々とコンタクトも取れる小倉高校の人脈の広さに改めて感心させられました。それと同時に、今この学校で学ばせていただいていることに深く感謝し、将来この学校に貢献できるような人材になりたいとも思いました。

最後に、このような有意義な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。この研修を支えてくださった全ての方に感謝申し上げます。

令和元年5月21日
第7回研修生一同